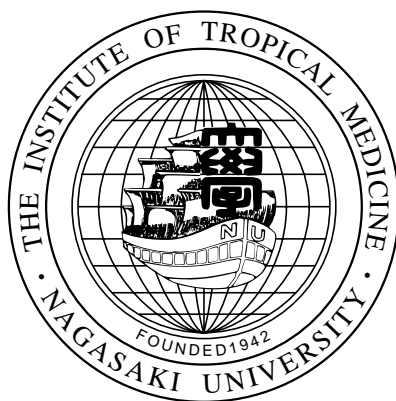


長崎大学熱帯医学研究所

年 次 要 覽

平成17年度

(2005)



長崎大学熱帯医学研究所

平成18年(2006)12月

長崎大学熱帯医学研究所

総合目標

熱帯地域に存在する複雑多様な自然・社会環境が、熱帯病をはじめとする錯綜した健康問題を引き起こし続けている。国際交流の進展が著しい今日、これらの問題は世界的視野に立って解決されなければならない。

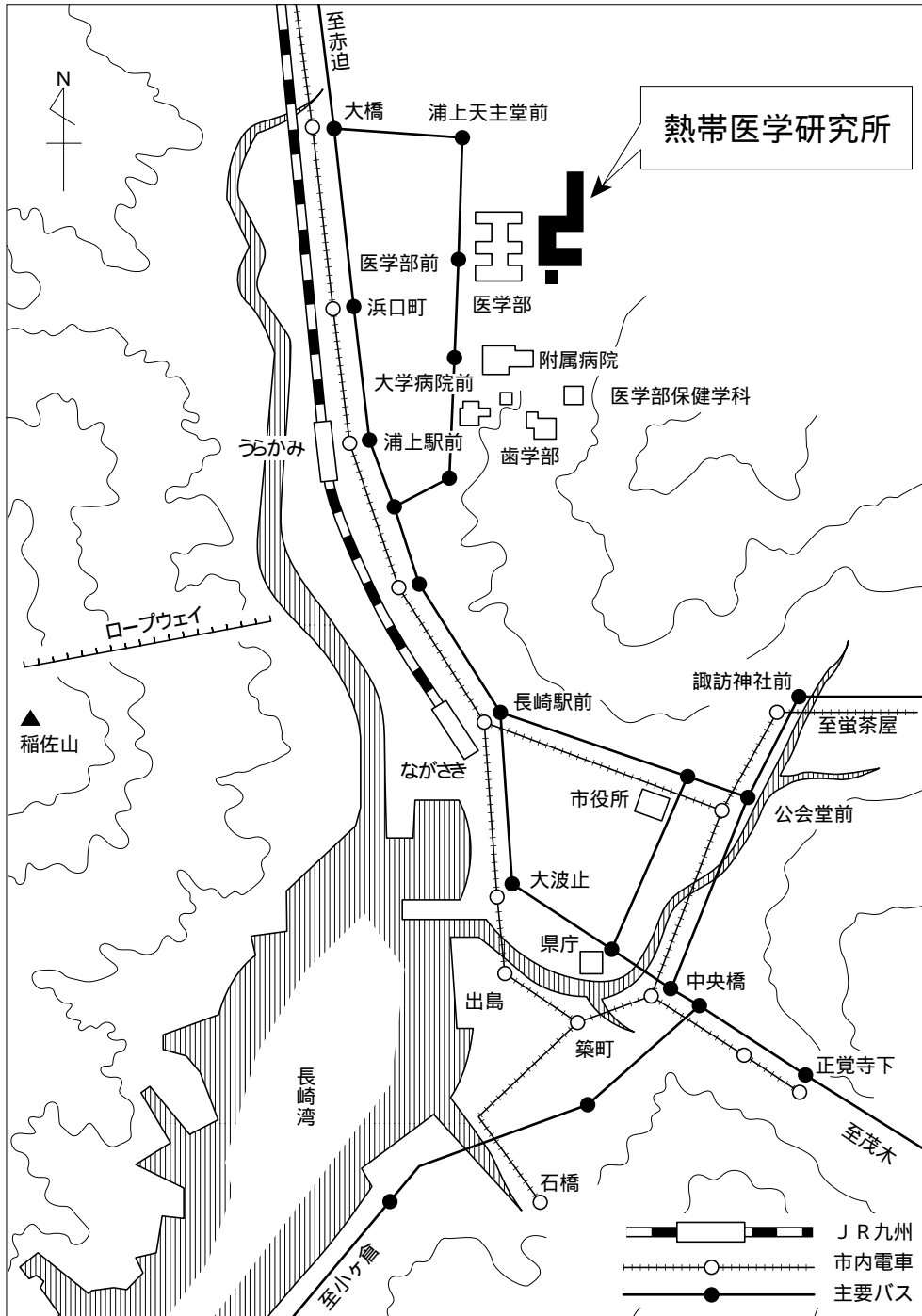
長崎大学熱帯医学研究所は、上述の認識に基づき、熱帯病の中でも最も重要な領域を占める感染症を主とした疾病と、これに随伴する健康に関する諸問題を克服することを目指し、関連機関と協力して以下の項目の達成を図るものである。

- 1．熱帯医学及び国際保健における先導的研究
- 2．研究成果の応用による熱帯病の防圧ならびに健康増進への国際貢献
- 3．上記に係る研究者と専門家の育成



研 究 所 全 景

長崎大学熱帯医学研究所位置図



所在地 長崎市坂本1丁目12-4 (〒852-8523)
 電話 095-849-7800 (総合案内)
 敷地面積 3,305m²
 建物面積 延8,428m²

新築年月 昭和36年(1961)3月
 増築年月 昭和42年(1967)2月
 増築年月 昭和55年(1980)3月
 増築年月 昭和60年(1985)8月
 増築年月 平成6年(1994)3月
 増築年月 平成15年(2003)3月
 改修年月 平成18年(2006)3月

序

長崎大学熱帯医学研究所は、昭和17年に長崎医科大学附属東亜風土病研究所として開設され、沿革に記載された経緯の後、昭和42年に「熱帯医学に関する学理および応用の研究」を設置目的とする長崎大学附置熱帯医学研究所となった。以後今日まで、日本において熱帯医学研究を目的とする唯一の公的機関として活躍してきた。平成元年に医学系国立大学附置研究所として初の共同利用研究所に、平成6年度には大部門制に改組され、平成7年度には文部省から熱帯医学に関する国際的に卓越せる研究拠点（Center of Excellence = COE）に指定された。平成13年度には文部科学省による4大学の免疫・感染症研究の連携推進体制の整備の一環として熱帯感染症研究センターが独立し、現在の組織は3大部門（11研究分野、1客員分野、1外国人客員分野を含む）、1センター、1施設、1診療科からなる。

本誌の表紙をめくった頁に研究所の総合目標 - Mission Statement - が記されている。これは平成8年度に行われた外部評価の提言に基づき研究所が平成11年5月に策定したものである。研究所は総合目標を達成するために、種々の研究教育活動を行っている。

熱帯医学研究所は研究教育活動の大要を昭和44年以来、年度毎にまとめて要覧として発刊している。平成11年度までは、要覧の中で最も重要な項目である研究活動の項目は、各分野毎の研究活動として紹介されていた。しかし熱帯医学研究所の総合目標の中で最も重要な「熱帯医学及び国際保健における先導的研究」がどのように熱帯医学研究所で行われているのかを読者に理解して貰うには、古い編集方法は適切でないと判断し、この点を改善する為、平成12年度以後の要覧の編集においては、各研究分野で行われている研究活動を主たる熱帯病毎にまとめなおして、研究活動として報告している。

近年、熱帯医学研究所は文科省の支援により3つの大型研究プログラムを開始した。21世紀COEプログラム「熱帯病・新興感染症の地球規模制御戦略拠点」(平成15年)、ケニアおよびベトナムにおける「熱帯病・感染症研究拠点形成プログラム」である。これらの採択理由の一つに研究所の長年に亘る熱帯医学領域での実績があげられているので、これまでに研究所が発刊してきた要覧にも目を通していただきたい。

熱帯医学研究は熱帯病が流行する現場での研究と分野横断的・学際的研究で特長づけられる。研究所全体として、また各研究分野が総合目標を達成するためにどのような視点で、熱帯医学の研究に取り組んでいるかを、読者の方々がこの要覧をざらんになり理解していただければ幸いである。

平成18年12月5日

長崎大学熱帯医学研究所 所長 青木克己

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧 平成17年度（2005）

目 次

総合目標

長崎大学熱帯医学研究所位置図

序

1	沿革	1
2	組織及び規模	3
2.1	組織	3
2.2	職員	3
2.3	経費	11
2.4	敷地と建物	11
3	共同利用研究	
3.1	共同研究	12
3.2	研究集会	16
4	研究活動	
4.1	マラリア	19
4.2	住血吸虫症	24
4.3	フィラリア症	25
4.4	トリパノソーマ症	26
4.5	腸管寄生原虫症	27
4.6	アルボウイルス感染症	28
4.7	コレラに代表される細菌性下痢症	32
4.8	呼吸器感染症	32
4.9	その他世界的に問題になっている感染症	33
4.10	細胞からのアプローチ	35
4.11	社会および人間からのアプローチ	37
4.12	エイズ	40
5	特別事業費による事業	
5.1	熱帯医学研修課程	41
6	文部科学省科学研究費補助金等による研究	
6.1	文部科学省科学研究費補助金（平成17年度採択分）	42
6.2	文部科学省科学研究費補助金（平成18年度内定分）	44

6.3	受託研究費（平成17年度分）	45
7	海外活動	48
8	外国人研究者の受け入れ	
8.1	熱帯医学研究コース	58
8.2	平成17年度に受け入れた外国人研究者	59
9	研究成果の発表状況	
9.1	研究業績	61
9.2	学会発表演題	74
9.3	国際会議における研究発表	84
9.4	報告書等印刷物	88
10	講演会	
10.1	熱帯医学研究所における所外講師による講演	90
10.2	熱帯医学研究所教官による講演	92
11	主要な研究設備	98
12	刊行物	99

1 沿 革

昭和17年 3月	長崎医科大学附属東亜風土病研究所設立	昭和54年 4月	感染動物隔離実験棟が熱帯性病原体感染動物実験施設に昇格
昭和20年 8月	原爆投下により研究所建物及び研究資料消失	昭和55年 3月	本館の第二次増築竣工
昭和21年 4月	長崎医科大学風土病研究所に改称	昭和58年 4月	国際協力事業団（JICA）の集団研修コース「熱帯医学研究コース」開設
昭和21年 5月	諫早市に移転し、研究活動再開	昭和59年 4月	原虫学部門の増設
昭和24年 5月	新制長崎大学に附置され、長崎大学附置風土病研究所に改称	昭和60年 8月	本館の第三次増築竣工
昭和32年 7月	諫早大水害により、施設、機器、研究資料等に壊滅的な被害	昭和62年 4月	病害動物学部門の増設
昭和34年 3月	長崎市興善町の元長崎大学医学部附属病院外来患者診療所跡に移転	平成元年 4月	熱帯医学研究所は共同利用研究所に改組
昭和36年 3月	長崎市坂本町に新庁舎竣工	平成 3年 4月	感染生化学部門の増設
昭和36年 4月	新庁舎に移転	平成 6年 3月	本館の第四次増築竣工
昭和39年 4月	疫学部門の増設	平成 6年 4月	大部門制に改組（3大部門12研究分野）
昭和40年 4月	寄生虫学部門の増設	平成 7年 4月	世界の最先端の学術研究を推進する卓越した研究拠点（COE）の研究所に指定
昭和41年 4月	ウイルス学部門の増設	平成 8年 4月	病原体解析部門に分子疫学分野（外国人客員分野）の新設
昭和42年 2月	本館の第一次増築竣工	平成 9年 4月	附属熱帯医学資料室の廃止・転換に伴い、附属熱帯病資料情報センターの新設
昭和42年 6月	風土病研究所が熱帯医学研究所に改称	平成13年 4月	附属熱帯病資料情報センターの廃止・転換に伴い、附属熱帯感染症研究センターの新設
昭和42年 6月	熱帯医学研究所内科として、医学部附属病院に設置	平成15年 3月	本館の第五次増築（熱帯性病原体集中研究管理棟）竣工
昭和49年 4月	附属熱帯医学資料室設置	平成17年 9月	ナイロビ研究拠点 設置
昭和49年 4月	病原細菌学部門の増設	平成18年 3月	本館の改修工事竣工
昭和53年 3月	感染動物隔離実験棟竣工		
昭和53年 4月	防疫部門（客員部門）の新設		
昭和53年 4月	熱帯医学研修課程の新設		

歴 代 所 長

(長崎医科大学附属東亜風土病研究所)

角 尾	晋	自 昭和17年(1942)5月4日 至 昭和20年(1945)8月22日
古 屋 野	宏 平	自 昭和20年(1945)12月22日 至 昭和23年(1948)1月23日
高 瀬	清	自 昭和23年(1948)1月24日 至 昭和23年(1948)8月31日
登 倉	登	自 昭和23年(1948)9月1日 至 昭和24年(1949)5月30日

(長崎大学風土病研究所)

登 倉	登	自 昭和24年(1949)5月31日 至 昭和33年(1958)8月31日
大 森	南 三 郎	自 昭和33年(1958)9月1日 至 昭和38年(1963)11月30日
福 見	秀 雄	自 昭和38年(1963)12月1日 至 昭和42年(1967)5月31日

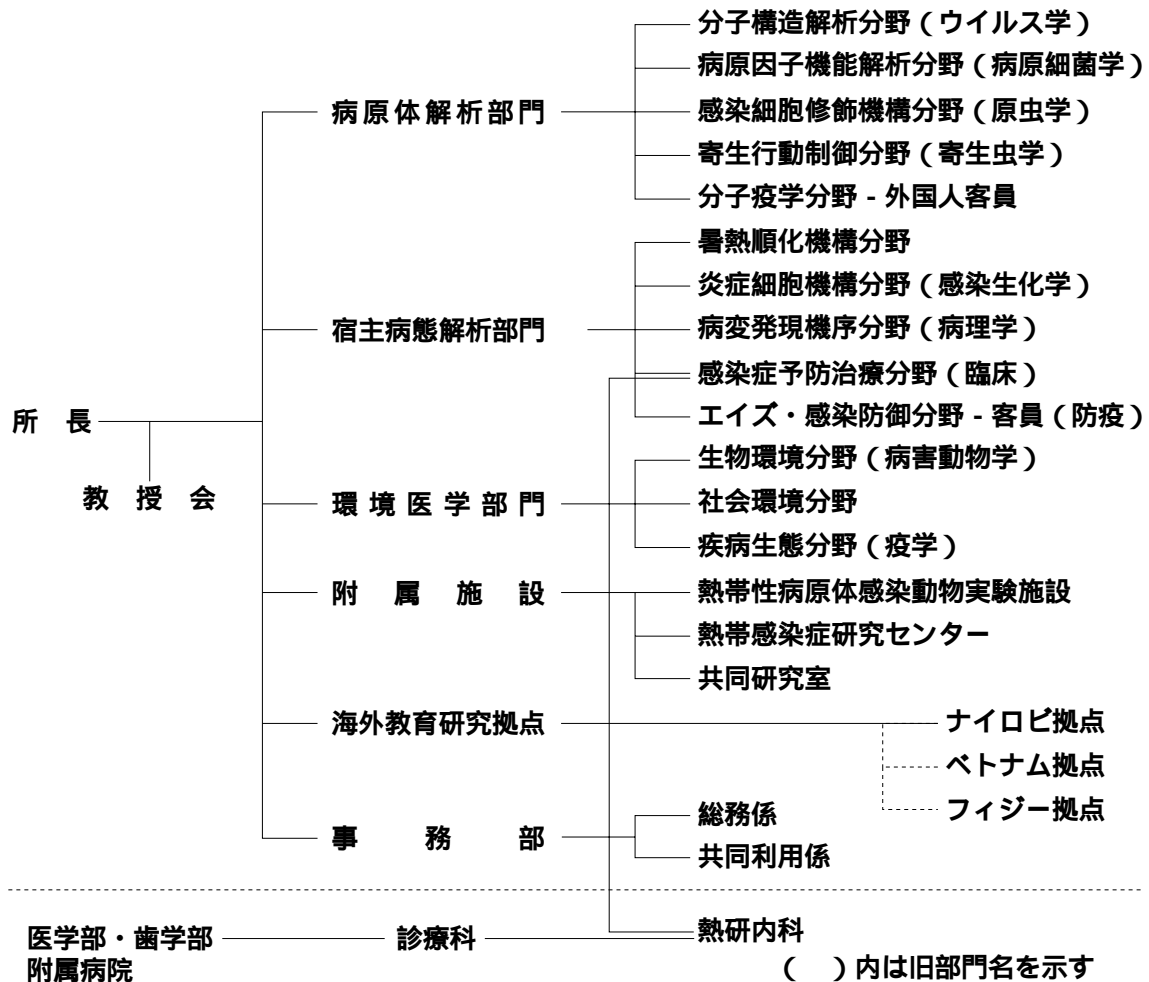
(長崎大学熱帯医学研究所)

福 見	秀 雄	自 昭和42年(1967)6月1日 至 昭和44年(1969)11月30日
片 峰	大 助	自 昭和44年(1969)12月1日 至 昭和48年(1973)11月30日
林	薫	自 昭和48年(1973)12月1日 至 昭和52年(1977)11月30日
内 藤	達 郎	自 昭和52年(1977)12月1日 至 昭和54年(1979)11月30日
片 峰	大 助	自 昭和54年(1979)12月1日 至 昭和56年(1981)4月1日
松 本	慶 蔵	自 昭和56年(1981)4月2日 至 平成3年(1991)4月1日
板 倉	英 吉	自 平成3年(1991)4月2日 至 平成5年(1993)4月1日
小 坂	光 男	自 平成5年(1993)4月2日 至 平成9年(1997)4月1日
五 十 嵐	章	自 平成9年(1997)4月2日 至 平成13年(2001)3月31日
青 木	克 己	自 平成13年(2001)4月1日 至 現 在

2 組織及び規模

2.1 組織

平成18年10月1日



2.2 職員

平成18年10月1日

1) 定員内職員

区分	教 員					その他の職員	合計
	教授	助教授	講師	助手	計		
現員	11	5	3	17	36	8	44

2) その他の職員

非常勤講師 30名 外国人研究員 (客員教授) 1名 客員教授 1名
 客員助教授 1名 COE研究員 4名 COE技術員 1名 COE事務員 3名
 プロジェクト研究員 1名 科学研究費補助金技術支援員 1名
 研究支援推進員 6名 研究機関研究員 1名 事務補佐員及び技能補佐員 25名

	大 学 院 生			與 座 嘉 康
	大 学 院 生			ブテイ トウ フウオン
	大 学 院 生			小 山 純
	大 学 院 生			加 地 千 春
	大 学 院 生			大 学 院 生
	大 学 院 生			大 学 院 生
	大 学 院 生			大 学 院 生
	大 学 院 生			大 学 院 生
診 療 科 (熱 研 内 科)	科 長 (命) 教 授	医 学 博 士		有 吉 紅 也
	副 科 長 (命) 助 教 授	医 学 博 士		森 本 浩 之 輔
	助 手	医 学 博 士		土 橋 佳 代
	助 手	医 学 博 士		黒 木 本 喜
	助 手	医 学 博 士		古 寺 田 真 嗣
	医 員	医 学 博 士		寺 小 田 真 由 美
	医 員	医 学 博 士		小 田 谷 中 守 玲 健 陽 子
	医 員	医 学 博 士		田 津 守 陽 子
	医 員	医 学 博 士		津 守 陽 子
エイズ・感染防御分野	客 員 教 授	医 学 博 士		山 本 直 樹
	客 員 助 教 授	医 学 博 士		佐 藤 保 村 嘉 直 生
	助 手	医 学 博 士		久 西 富 永 知 可
	C O E 研 究 員	医 学 博 士		西 富 永 知 可
	技 能 補 佐 員	医 学 博 士		富 永 知 可
生 物 環 境 分 野 (病 害 動 物 学)	教 授	農 学 博 士		高 木 正 洋
	講 師	農 学 博 士		川 都 野 展 子
	助 手	農 学 博 士		都 野 展 子
	C O E 研 究 員	農 学 博 士		野 展 子
	産 学 官 連 携 研 究 員	農 学 博 士		大 竹 中 宏 平
	研 究 支 援 推 進 員	農 学 博 士		竹 中 宏 平
	事 務 補 佐 員	農 学 博 士		鶴 上 野 千 秋
	事 務 補 佐 員	農 学 博 士		上 野 千 秋
	事 務 補 佐 員	農 学 博 士		酒 本 淳 子
	大 学 院 生	農 学 博 士		長 谷 川 麻 衣 子
	大 学 院 生	農 学 博 士		杉 浦 正 昭
	大 学 院 生	農 学 博 士		都 築 中
	大 学 院 生	農 学 博 士		トラン ブ フォン
	大 学 院 生	農 学 博 士		前 川 芳 秀

社会環境分野	教授	医学博士	溝田 勉
	助手	医学博士	谷村 晋
	助手	医学博士	後藤 健介
	研究支援推進員		池田 知美
	技能補佐員		今岡 奈津子
	大学院生	体育学修士	峰松 和夫
	大学院生	医学士	依田 健志
	大学院生	医学士	秦 亮
疾病生態分野 (疫学)	教授	医学博士	平山 謙二
	(兼)教授(有期雇用)	医学博士	安波 道郎
	助教授	医学博士	大渡 伸
	(兼)講師	医学博士	菊池 三穂子
	COE研究員		奥田 尚子
	技能補佐員		早嶋 順子
	大学院生		エクラス ハメド アブデル ハーフィズ アブド
	大学院生		グエン ティ フォン ラン
熱帯性病原体感染動物 実験施設	施設長(命)教授	医学博士	中村 三千男
	助手	医学博士	柳 哲雄
	技能補佐員		川嶋 順子
	センター長(命)教授	保健医学博士	門司 和彦
熱帯感染症研究センター	教授	医学博士	嶋田 雅暁
	教授	医学博士	堀尾 政博
	助教授	医学博士	本田 純久子
	(兼)助教授(有期雇用)		松山 章子
	助手	理学博士	砂原 俊彦
	助手	医学博士	金田 英子
	COE研究員		橋爪 真弘
	研究機関研究員		竹内 昌平
研究支援推進員		荒木 一生	

	研究支援推進員		崎 谷 恭 子
	技能補佐員		須 田 清 美
	技能補佐員		秦 亮
	事務補佐員		清 水 洋 治
	事務補佐員		駒 水 澤 暁 子
	大学院生		浜 田 芳 樹
	大学院生		阿 部 朋 子
	大学院生		大 野 晃 生
	大学院生		駒 澤 大 佐
	大学院生		蔡 国 喜
	大学院生		中 尾 優 子
	大学院生		中 尾 理 恵 子
	大学院生		中 村 禎 子
	大学院生		野 村 亜 由 美
	大学院生		畑 岸 悦 子
	大学院生		マガフ ムガイワ ダマス
	大学院生		氏 家 無 限
	大学院生		ウペンド ムウィンギラ
共 同 研 究 室	室長(命)教授	医 学 博 士	平 山 謙 二
	(命) 助手		一 ノ 瀬 昭 豊
	研究支援推進員		堀 江 仁 美
ナ イ ロ ビ 拠 点	拠点長(命)教授	医 学 博 士	嶋 田 雅 暁
	教授(有期雇用)	医 学 博 士	一 瀬 休 生
	教授(有期雇用)	理 学 修 博 士	皆 川 昇
	教授(有期雇用)	公衆衛生修士(MPH)	金 子 聰
	教授(有期雇用)	医 学 博 士	堀 尾 政 博
	助教授(有期雇用)	獣 医 学 修 博 士	西 浦 博
	事務職員	医 保 健 学 博 士	本 田 志 保
	プロジェクト研究員	B.A.hon Social Science	二 見 恭 子
ベ ト ナ ム 拠 点	拠点リーダー(兼)教授	医 学 博 士	森 田 公 一
	教授(有期雇用)		山 城 哲 太
	教授(有期雇用)		長 谷 部 英 樹
	教授(有期雇用)		野 内 英 樹
	助手(有期雇用)		比 嘉 由 紀 子

	助手(有期雇用)		鈴木	木	基
	事務職員		古	矢	佳
	産学官連携研究員		上	地	玄一郎
フイジー拠点	拠点リーダー(兼)教授	医学博士	森	田	公
	教授(有期雇用)		神	谷	保
	助教授(有期雇用)		塚	越	達
	技術職員		塚	川	健
	事務職員		大	澤	彦造裕
非常勤講師	大分大学・教授	医学博士	牧	野	芳
	埼玉医科大学・講師	医学博士	名	和	大
	琉球大学・教授	医学博士	森		直
	大阪大学・教授	医学博士	本	田	武
	国立感染症研究所・副所長	医学博士	渡	邊	治
	京都大学・教授	医学博士	光	山	正
	長崎大学医歯薬学総合研究科・教授	医学博士	河	野	茂
	おおり医院・院長	医学博士	大	利	昌
	三和中央病院・部長	医学博士	坂	本	信
	長崎大学医歯薬学総合研究科・教授	医学博士	由	井	克
	清原龍内科・院長	医学博士	清	原	龍
	赤司医院・院長	医学博士	前	川	知
	東京都立墨東病院・部長	医学博士	大	西	健
	大阪大学・教授	医学博士	大	石	和
	亀田総合病院・部長	医学博士	岩	田	健太郎
	慶応義塾大学・教授	医学博士	竹	内	勤
	国際医療福祉大学	医学博士	楽	得	康
	三田病院予防医学センター・教授	医学博士	田	崎	昇
	長崎市平和推進協会(財)・事務局長	教育学修士	國	井	修
	ユニセフ ニューヨーク本部・上席顧問	公衆衛生学修士	太	田	伸
	東京医科歯科大学・教授	医学博士	松	田	肇
	独協医科大学・教授	医学博士	金	子	明
	スウェーデン カロリンスカ研究所・助教授	医学博士	我	妻	ゆき子
	筑波大学・教授	医学博士	中	澤	港
	群馬大学・助教授	保健学修士	山	本	太郎
	外務省経済協力局開発計画課・課長補佐	医学博士	CGN	Mascie-Taylor	博
	英国ケンブリッジ大学・教授	理学博士	鈴木	木	博

事 務 部	タイ国立衛生研究所・所長	公衆衛生学博士	Pathom Sawanpanyalert
	青山学院大学・教授	文学博士	飯島 渉
	事務長	事務職員	陣野 勝久
	総務係長	事務職員	原田 司
	総務主任	事務職員	山村 直幹
	総務係員	事務職員	野田 亜美
	総務係員	事務職員	金井 祐子
	総務係員	事務補佐員	末永 純子
	総務係員	事務補佐員	松尾 明日香
	総務係員	事務補佐員	竹之内 智子
	総務係員	事務補佐員	平野 まりこ
	総務係員	事務補佐員	内田 悦世
	総務係員	事務補佐員	赤木 真美子
	総務係員	事務補佐員	清水 久美子
	共同利用係長	事務職員	野口 英光
	共同利用主任	事務職員	橋口 文子
共同利用係員	事務補佐員	松本 由美子	

2.3 経費

年度別歳出決算額（平成8 - 平成17年度）

年度	区分	人件費	物件費	合計
平成8年		423,863,566 円	406,226,075 円	830,089,641 円
"	9年	431,756,359	294,963,427	726,719,786
"	10年	473,414,781	412,687,773	886,102,554
"	11年	471,498,613	307,109,233	778,607,846
"	12年	450,088,155	307,804,552	757,892,707
"	13年	448,975,931	443,188,323	892,164,254
"	14年	436,287,495	446,435,378	882,722,873
"	15年	436,856,514	329,800,442	766,656,956
"	16年	566,026,173	352,687,470	918,713,643
"	17年	513,548,151	483,922,022	997,470,173

2.4 敷地と建物

敷地 長崎市坂本1丁目12-4 長崎大学医学部構内 3,305m²

建物

建物名称	構造	建面積m ²	延面積m ²	所在地	備考
本館	鉄筋コンクリート 3階, 1部4階建	1,763	6,454	坂本1丁目 12-4	昭36.3 建築 " 42.2 増築 " 55.3 " " 60.8 " 平6.3 " 平18.3 改修
熱帯性病原体集中研究 管理棟	鉄筋コンクリート 4階建	329	1,331	"	平15.3 建築
熱帯性病原体感染動物 実験施設	鉄筋コンクリート 3階建	190	490	"	" 53.3 新築 " 63.3 増築
薬品庫	ブロック建	20	20	"	" 47.3 新築
保管庫	プレハブハウス	133	133	"	平16.3 改築
計		2,435	8,428		

3 共同利用研究

3.1 共同研究（ は研究代表者）

1. ヘリコバクター・ピロリの VacA 毒素の毒性発現

長崎大・熱研	平山 壽哉, 和田 昭裕
千葉大・大学院医	野田 公俊, 八尋錦之助
杏林大・医	神谷 茂
弘前大・農	片方陽太郎
長崎大・大学院医歯薬	河野 茂
大阪府立大・生命環境科	山崎 伸二, 倉園 久生

2. 活性酸素産生系コア蛋白質 gp91^{phox} の高次構造の解析

長崎大・熱研	中村三千男
ファルマ・アクセス	勝部 幸輝, 濱田 賢作
研究協力者・非常勤講師	前川 知之
研究協力者・学生	高橋 慧

3. 熱帯感染症に対する宿主感受性を決定する遺伝子多型の解析

長崎大・熱研	平山 謙二, 菊池三穂子, 石井 一成, 青木 克己, 神原 廣二, 嶋田 雅暁, 森田 公一
東京医科歯科大	太田 伸生
愛知医科大	木村 英作
独協医科大・医	松田 肇
ホーチミン市パスツール研	Vu Thi Que Huong

4. 抗エイズ薬耐性 HIV 流行対策の為のアジア・ラボネットワーク

長崎大・熱研	有吉 紅也
--------	-------

5. 日本脳炎ウイルス・デングウイルスのレセプターの同定

長崎大・熱研	森田 公一, 長谷部 太, EGM Mathenge
静岡県立大・薬	鈴木 康夫, 左 一八

6 . SARS ウイルスの診断 , 予防 , 治療の研究

長崎大・熱研	森田 公一 , 余 福勲 , 井上 真吾
国立感染研・ウイルス一部	森川 茂 , 高崎 智彦
埼玉医科大	名和 優

7 . 住血原虫の機能と病態

長崎大・熱研	神原 廣二 , 上村 春樹 , 中澤 秀介 , 柳 哲雄
久留米大・医	福間 利英 , 井上 雅広
徳島大・総合科学	大橋 眞
藤田保健衛生大・医	前野 芳正
愛媛大・無細胞センター	坪井 敬文

8 . 腸管内原虫の種多様性とその疫学

長崎大・熱研	神原 廣二 , 上村 春樹 , 柳 哲雄 , 中澤 秀介
神戸大・医	宇賀 昭二
金沢大・大学院医	井関 基弘 , 所 正治
奈良女子大・理	吉川 尚男
東海大・医	橘 裕司
大阪市大・大学院医	寺本 勲

9 . 象皮病患者には何故血中に仔虫が検出されないか

長崎大・熱研	青木 克己 , 江原 雅彦
徳島大・医・栄養	太田 房雄
愛知医大	木村 英作
鹿大・多島研	野田 伸二
動物衛研	辻 尚利

10 . ケモカイン受容体機能の新奇測定法の確立とその応用

長崎大・熱研	中村三千男
エフェクター細胞研	金ヶ寄士朗
東京大学&同上	山内 明
研究協力技術員	森内 俊之

11. 薬物などによる重症肝障害の臨床病理学的研究

長崎大・熱研	鳥山 寛, 千馬 正敬
長崎大・医	中尾 一彦, 濱崎 圭輔

12. レプトスピラ症の診断と病態に関する研究

大阪大・微生物病研	大石 和徳
国立感染研	川端 寛樹, 小泉 信夫
静岡県立大	柳原 保武

13. レトロウイルス細胞内侵入経路の決定機構

長崎大・熱研	久保 嘉直
理化学研	天沼 宏

14. 現場を想定した疾病媒介蚊防除技術, 効果判定, モニタリングの再検討

長崎大・熱研	高木 正洋, 川田 均, 都野 展子
名古屋女子大・短期大学	杉山 章
国立感染研・昆虫医科学	津田 良夫
住友化学工業(株)	庄野 美穂, 久保田俊一

15. 開発途上国における保健医療環境の社会的基盤の研究

長崎大・熱研	溝田 勉, 谷村 晋
九大	信友 浩一
国立保健医療科学院	長谷川敏彦
国連人口基金	池上 清子
(財)エイズ予防財団	島尾 忠男
長崎純心大	鈴木千鶴子

16. 貧困・文化が熱帯起源の感染症対策に及ぼす影響

長崎大・熱研	溝田 勉, 後藤 健介
大阪国際大	山本 勇次
実践女子大	石井 明
国連人口基金	池上 清子
大阪教育大	藤田 大輔

足立保健所
長崎純心大

坂野 晶司
鈴木千鶴子

17. ミニブタを用いたヒト住血吸虫症モデルの確立と応用

長崎大・熱研
独協医科大・医
産業医科大・医

平山 謙二, 菊池三穂子, 青木 克己
加藤 尚子
熊谷 貴

18. 結核とエイズ問題についてアジアとアフリカの事例を元にした比較研究

長崎大・熱研
結核研
弓削病院

野内 英樹, 門司 和彦, 有吉 紅也, 松山 章子
Jintana Ngamvithayapong, 今津 里沙,
太田えりか, 石川 信克
庄野 昌博

19. アジア・オセアニアの人口・健康・栄養転換の統合的研究

東大・大学院医
長崎大・熱研
東大・サステナビリティ学
佐賀大・農
新潟医療福祉大
宮崎大・医
福岡県立大
千葉大・文
HANDS
関西学院大
国立医療センター
長崎シーボルト大
北海学園大
長崎大

梅崎 昌裕, 山内 太郎
門司 和彦, 金田 英子
古澤 拓郎, 関山 牧子
稲岡 司
村山 伸子
今井 秀樹
夏原 和美
小谷 真吾
神谷 保彦
安高 雄治
中村 哲
四童子好廣, 正木 基文
須田 一弘
中尾理恵子, 野村亜由美, 駒澤 大佐, 加地 千春

3.2 研究集会

1. 医学研究における倫理に関する国際セミナー

開催日：平成17年7月25日～27日

場 所：長崎大学医学部ポンペ会館

代表者：疾病生態分野 平山 謙二

発表者：(1)・医学研究の倫理とは - その歴史的背景と原理 -

米国 NIH (研究倫理) Ezekiel Emanuel

(2)・研究への参加の意思決定：インフォームドコンセント

米国 NIH (研究倫理) Ezekiel Emanuel

(3)・リスクと利益の評価

ベルゲン大学 教 授 Reidar Lie

(4)・小児臨床試験の倫理的配慮

国立成育医療センター 室 長 中村 秀文

(5)・誘導と搾取

米国 NIH (研究倫理) Ezekiel Emanuel

(6)・日本の治験システムと倫理審査委員会

昭和大学 教 授 内田 英二

(7)・韓国中央倫理委員会組織と法的な規制

ソウル国立大学 助教授 Ock Joo Kim

(8)・倫理審査のやり方

ベルゲン大学 教 授 Reidar Lie

(9)・フィールド研究と倫理

長崎大・熱研 教 授 嶋田 雅暁

(10)・国際共同研究における倫理問題，標準的な治療，研究が終わった後の利益

ベルゲン大学 教 授 Reidar Lie

(11)・薬理遺伝学と倫理

Benjamin Wilfond

Mock REC

2. HIV 感染症の世界的治療戦略

開催日：平成18年3月25日～26日

場 所：長崎大学医学部ポンペ会館

代表者：感染症予防治療分野 有吉 紅也

タイトル：(1) . Research Forum on Japan-Thailand collaborative studies on HIV/AIDS; developing a new strategy against HIV-Infection

タイ保健省医科学局	局長	Paijit Warachit
タイ国立衛生研究所	所長	Pathom Sawanpanyalert
ランパン病院	部長	Panita Pathipvanich
大阪大学微生物病研究所	教授	塩田 達雄
近畿大学医学部	教授	宮澤 正顕
京都大学ウイルス研究所	教授	小柳 義夫
国立国際医療センター	技官	向山 ゆみ
国立感染症研究所	室長	佐藤 裕徳
結核研究所	博士	野内 英樹
長崎大学医学部	教授	森内 浩幸

3 . 熱帯病の数学モデルの構築と予防制圧への応用

開催日：平成18年 1月28日

場 所：東京大学生産技術研究所コンベンションホール

代表者：チュービンゲン大・医 西浦 博

発表者：(1) . Age-Structured Homogeneous Epidemic Systems with Application to the MSEIR Epidemic Model

東大・数理科学研 稲葉 寿

(2) . Global dynamics of SIS model with transport-related infection

静岡大・工 竹内 康博

(3) . ツリー上の拡張型コンタクトプロセスの大域的臨界値と局所的臨界値について

独立行政法人科学技術振興機構 ERATO 合原複雑数理モデルプロジェクト 杉峰 伸明

(4) . 空間構造を伴う集団での病原性の進化

産業技術総合研究所化学物質リスク管理研究センター 加茂 将史

(5) . 伝染媒介体の空間分布に依存した伝染病汚染地域の拡大速度に関する確率過程モデル

広島大・大学院理 瀬野 裕美

- (6) . 多状態確率粒子モデルの特性とその近似解法について
東大・先端科学技術研究センター 大塚 一路
- (7) . エージェントベースモデルによるヒト集団の死亡シミュレーション
群馬大・大学院医 中澤 港
- (8) . 日本における BSE 感染頭数の Simulation-based estimation
動物衛生研究所 山本 健久・筒井 俊之
- (9) . 天然痘バイオテロの流行規模及必要ワクチン量推定の試み
九大・大学院医 徳永 章二
- (10) . IBM を用いての公衆衛生的対応能力を明示的に考慮した天然痘対策の評価
国立感染症研究所 大日 康史
- (11) . SARS による院内感染の影響シミュレーション
岡山大 福留 彩子・石川 洋文
- (12) . インフルエンザの流行に対する学級閉鎖の効果の数値モデルによる検証
東大・大学院 竹内 昌平
- (13) . IBM を用いてのパンデミック対策の評価
東大・大学院情 前田 博志
- (14) . Why is the distribution of HTLV-I carriers in Japan geographically biased?
: An answer through a mathematical epidemic model
大分大・医 江島 伸興
- (15) . Complete parameterization project and its application to stochastic process
チュービンゲン大・医 西浦 博

4 研究活動

4.1 マラリア

マラリアに関する研究は病原原虫 *Plasmodium* の生物学的、病理学的研究、その原虫によって影響される宿主（ヒト）側の感受性、病態発症機構の研究、原虫を媒介するハマダラカの生態学的研究とそれによって生み出される病気の疫学的研究と多岐にわたっている。熱帯医学研究所では昨年来ケニアにおけるマラリア研究が始まり、媒介蚊の生態学的研究とマラリア疫学への関連研究が集中的に行われている。ケニアにおいては近年人口増加により、高地への人口移動と地域開発が活発に行われ、それらの人々の間で発生する熱帯熱マラリア流行が問題となっている。そこで今回発表された報告はケニア西部高地1450 - 1580mの Kakamega 地区における媒介蚊 *Anopheles gambiae* の生態学的研究を中心として、何故開発によりマラリアが増加したかを理解しようとしている。まず2002年7月、12月、2003年6月の3回の横断的マラリア調査が行われ、熱帯熱マラリアの罹患状況が調べられている。罹患率、血中原虫濃度ともに1 - 4才でピークを示し、その後減少する高度流行パターンを示す。7月と12月の間にすべての年令層で約19%の罹患率の減少があり伝播の季節変動のあることを示す。またこの地区は谷状の地形を示し、この谷の中心を流れる川に近い程罹患率は高く、この原因は川に沿った土手に媒介蚊 (*Anopheles gambiae*) の繁殖場所のほとんどが集中するためと考えられる⁴⁷⁸¹。

続いてこの地区から分離し実験室でコロニー化した *An. gambiae* の産卵行動が調べられている。雨水および農地、森林、自然湿地から採取した水について産卵選択性および卵の孵化率が調べられた。媒介蚊 *An. gambiae* は乾期、雨期を問わず、森林や湿地から得た水よりも雨水に有意に高い産卵を行った。このことは水に不純物が少ない方が産卵に向いていることを示す。乾期においては森林、湿地から得た水より有意に多い卵を農地からの水に産んだが、この差は雨期には統計的に有意な差としてみられない。屋内でも自然環境下でも卵の死亡率は自然湿地の水では農地のそれに比し有意に高かった。自然環境下では湿地水の水温は農地のそれに比し有意に低いが、温度を同じとした屋内でも同じ結果を得ていることから、産卵、孵化率の高いことは水温によるのではなく、地表面の状態の差異が生みだす地表水の差によるもので、これが *An. gambiae* の分布の不均衡を生みだしている⁴⁷⁸⁰。さてこの生息場所からの幼虫発生をそのサイズと安定性に関連して調査した。生息場所のサイズはその総水量で測定した。安定性は6日間に亘って水がその場所に存在する頻度で表された。幼虫発生（度）は調査期間中幼虫が観察される日数によって表された。結果生息場所の安定性と幼虫発生

* 文中の4桁の上付数字は長崎大学熱帯医学研究所「業績番号」を示す。(参照 p.61)

(度)は生息場所サイズに正に相関した。サイズが 1 m^3 以下になると安定性、幼虫発生(度)ともに急速に減少した。生息場所に近いことは明らかに家屋内休息蚊数を高めた。これらの結果は生息場所サイズがその安定性、幼虫発生ひいては成虫蚊数の主要な決定要因であることを明らかにした⁴⁷⁷⁸。西ケニア高地における幼虫の分布は乾期、雨期ともに川の流れる谷底地域に集中するが、この集中は乾期に一層顕著である。*An. gambiae* 種群の幼虫生息場所は農地や牧場に多く、一方 *An. funestus* 幼虫生息場所は自然湿地や牧場に多い。樹冠による覆いが *An. gambiae* 種群および *An. funestus* 発生に関連する唯一の要因である。この覆いの平均数はハマダラカ幼虫のいない場所に比し、明らかに *An. gambiae* 種群と *An. funestus* の発生のある生息場所では少ない。このように土地の覆いや地形の特徴がハマダラカ分布に主要な影響を及ぼす。従って川岸の森林の排除はケニア高地におけるハマダラカの生育を促すことになる⁴⁷⁷⁹。さて西ケニア高地で進んでいるここ30年間の土地利用の変化は蚊の繁殖場所の物理、化学的性状を変化させ、マラリア流行発生を起こしている。性状変化がハマダラカ発生に及ぼす機構を明らかにするため、雨水を溜めた容器上端近くの横面に網を張った穴を明け、余分な水はそこから流れ出し、表面から水があふれ出ないようにして、1ヶ月間日光の当たる場所 (open habitat)、樹冠で覆われた場所 (forest habitat) および部分的に覆いのない場所 (forest edge habitat) に放置した。このようにして自然環境で作られる水を用意し、これをろ過し、再び容器に入れ同じ場所に放置、ここに第二齢幼虫を離し、その生存率、他の水棲動物発生、温度変化、落ち葉片などの観察を行った。Open habitat での生存率は55.57%で forest および forest edge habitat で1~2%であった。平均水温は Open habitat で3~3.4高かった。Diptera, Coleoptera, Odonata 類の水棲動物の集まりが認められたが、habitat によりそれぞれの分布は大きく異なっていた。この水生動物の集まりは水温と、落ち葉片の量に関連することが示された。開放されていることと、捕食生物の存在が *An. gambiae* の生存率に有意に関係した。これらのことは森林伐採は高地における未熟期の *An. gambiae* の生存を容易にすることを示している⁴⁷⁴³。これらの報告はケニア西部高地におけるマラリア流行発生は、人口移動による土地利用のため川岸(水系)の森林を伐採して来たことが大きな要因であることを示している。

一方東洋における重要なマラリア媒介蚊 *Anopheles minimus* 種群には少なくとも三つのメンバー(A, C, E)が記載されている。ここでは台湾南部から採取された *An. minimus* (*A. m.*) の特性をタイ国からの species A、および日本からの species E と交配させることにより研究した。台湾 *A. m.* はタイ国 species A とは遺伝的適合性を示した。species E との交配における接合体観察によると、交雑子孫は台湾雌と species E 雄の交配によってのみ得られた。この交雑雄は萎縮した睾丸が異常精子をもち不妊かほとんど不妊で、 F_2 交雑子孫は得られなかった。交雑雌は台湾 F_1 子孫か、species E 雄と戻し交配すると卵を産むが、低い産卵数と生存

能力しかなかった。この研究は先のリボゾーム DNA の28S 遺伝子 D3 領域の分析から得た *A. m. species A* が台湾に土着しているという報告データを支持した。他のメンバーの *A. m.* が台湾に存在するかどうかについては今後の研究による⁴⁷⁴⁶。

もう1つ蚊については、ハマダラカに関連しないが、蚊種のもつ光周性と複眼を構成する個眼の構造の関連性についての報告がある。蚊の宿主（被吸血動物）を捜す光周性のパターンは4つに分けられる。パターンⅠとⅠ'は夜間活動性、パターンⅡは薄明および夜間活動性、パターンⅢは薄明および昼間活動性、パターンⅣは昼間活動性である。眼パラメーター（個眼の直径と個眼間の角度から測定）をこれら4つのパターンの中で比較すると、パターンⅠとⅠ'が最も高く（2.7-4.2）、最も低いのがパターンⅣ（0.8-2.3）、パターンⅡとⅢはこの中間の値（2.3-2.6）を示す。これらの結果は薄明り活動性は夜間活動性から昼間活動性に移行する進化の過程にあることを示す。同じ蚊属の中でも眼パラメーターは光周性行動によって大きな差異が認められた。これらのことから蚊の個眼の構造は蚊の種分類によって決定されるのではなく、それぞれの蚊の最も活動的な光環境によって進化学的に決定されてきたと考えられる⁴⁷⁴⁷。

続いて多い研究はヒトのもつ遺伝的形質と、熱帯熱マラリア重症化との関連、あるいは熱帯熱マラリアに対する感受性との関連についてのものである。まずバヌアツ諸島のマラリア流行の特徴、北側の島から南の島に下るにつれ、マラリア発生率が減少してゆくという点が注目され、同じ起源を持つ民族の中にあつて、マラリア流行がその遺伝的要因にどのような影響を及ぼしてきたのかが解析されている。まず微生物感染の病理に影響をもつサイトカインのひとつ TNF- α については、これまで TNF- α プロモーター対立遺伝子（TNFP alleles）多型が、重症マラリアに対して異なる遺伝的感受性を示すことに関連していることが報告されている。著者達は先の研究において、TNFP allele の上流857番目塩基の C から T への転位（TNFP-D）がミャンマーにおける脳マラリア感受性のマーカーになることを示した。そこでバヌアツにおける TNFP-D の頻度を調べることにより、この遺伝子に異なるマラリア発生率が選択圧として働いているかどうかを検討した。TNFP-D の頻度は島々のマラリア発生率と逆相関を示し、マラリア発生の最も低い島では0.55、最も高い島では0.26を示し、このことが裏付けられた。マラリア罹患と発病を抑制すると考えられている α サラセミア遺伝子頻度は、マラリア発生率との間に正の相関を認めた。これらのデータはこれまでの報告にみられる G6PD（グルコース 6 リン酸脱水素酵素）欠乏症の頻度とマラリア発生率の正の相関データと一致する。このことは感受性を与える遺伝子（TNFP-D）、防御的に働く遺伝子（ α サラセミア、G6PD 欠乏症）に対し、マラリア流行度が影響していることを示す⁴⁷⁶⁰。ところで最近の報告によれば IL-4 プロモーター領域における遺伝子変異がマラリアに対する感受性に関連し、この結果 IgE 産生増加を招くとされる。この研究では IL-4 遺伝子上流

590番目 (-590) および下流33番目 (+33) の変異の発現頻度と、熱帯熱マラリア原虫 (*P. f.*) 特異的 IgE レベルを流行度の異なるバヌアツの三つの島の住民について調査した。計878名が -590について、750名が +33について調べられた。変異遺伝子 C 590T が0.27 - 0.39, C + 33T が0.39 - 0.48の頻度に認められた。この両変異遺伝の間には強い連鎖不均衡が認められた。Aneityum 島 (中等度流行) において両方の変異遺伝子が Futuna 島 (非流行地) に比し高頻度に認められた。Aneityum 島では C + 33T 遺伝子保有者と *P. f.* 特異 IgE レベルの間に有意な相関が認められた。けれどもこれらの関係は Malakula 島 (中等度流行でマラリア対策実施) ではみられなかった。この IL 4 多型に関する研究はメラネシア住民における最初のものである。この対立遺伝子変異の頻度はアジア住民の間で高く、コーカシアンの間では低いことが観察されている。これらのことは IL 4 プロモーター領域多型はマラリアと IgE の関連性を説明する1つの遺伝的要因であることを示している⁴⁷⁶¹。熱帯熱マラリアの脳マラリアの発症機構については感染赤血球が脳内小血管に付着し、さらに正常赤血球がこれに付着、血流を障害し、局所的虚血を招くことが主因であるとされる。一方熱帯熱マラリア原虫感染により大量の感染赤血球ならびに非感染赤血球までもが破壊されるため、多量のヘモグロビンを血中ならびに細胞中で処理する必要がある。細胞内ではヘモグロビンはヘムとグロビンに分解され、ヘムはヘムオキシゲナーゼ 1 (HO 1) によってビリルビン、鉄、COへと分解される。これら産物は有用でもあり、有害にもなる。HO 1 遺伝子プロモーターは多型の (GT)_n 繰り返し構造を含み、HO 1 発現に影響を与えている。この繰り返し頻度を単純性マラリア患者 (120名) と脳マラリア患者 (30名) の間で比較研究した。(GT)_n 繰り返しは、23個をピークとする短い遺伝子グループと、30個をピークとする中間グループ、36個をピークとする長いグループとに分けられた。脳マラリア患者 (30名) は単純マラリア患者 (120名) に比し、有意に高い短い繰り返し (28未満) 遺伝子のホモ接合体頻度をもつことが示された。短い (GT)_n 遺伝子は脳マラリア発症の遺伝的危険因子であると考えられる⁴⁷⁶²。バヌアツにおける重症化遺伝子解析についての日本語総説もある⁴⁷⁷²。

さて近年クロロキンを始めとする従来の薬剤に対する熱帯熱マラリア原虫の薬剤抵抗性が世界的な広がりを見せ、薬剤もアルテスネートを中心とする併用療法に替りつつある。さらに東南アジアでは三日熱マラリア原虫のクロロキン耐性報告が相次いでいる。タイ、マヒドール大学附属病院において三日熱マラリアに対するアルテスネート治療が行われた。アルテスネートを5日間投与、その後プリマキン14日投与が行われた。解熱時間、原虫消失時間ともにクロロキンに比し良好な結果を示した⁴⁷⁵²。マラリアの流行疫学としてインドネシア、ロンボク、スンバワ島の状況が報告されている。ロンボク、マタラム病院のデータからその病院だけで毎年少なくとも30名のマラリアによる死亡が確認されている。1996 - 1999にかけての西ロンボクにおけるマラリア年間発生率は40per1000である。調査された両島での小さなマ

ラリア流行地では、熱帯熱マラリアが三日熱マラリアより多いことを示している。重要なハマダラカとして3種があげられ、2種がそれに続くものとされる。主として海岸地帯にマラリア流行が認められるが、内陸部での流行もあると予想している⁴⁶⁹⁶。疫学的データとメロゾイト表面抗原多様性出現の頻度の関係を考察した研究がある。メロゾイト主要表面抗原(MSP 1)は減数分裂の際の遺伝子の組換えによってその多様性が生み出されている。この研究では高流行を示すソロモン、ガダルカナルにおける熱帯熱マラリア原虫のMSP 1遺伝子の多様性を調べて、その組換え頻度を他地域のものと比較してマラリア疫学との関係を考察している。MSP 1遺伝子5'側組換えタイプ、3'側の配列タイプを検討して、この両者のユニークな組合わせを示す *msh 1* ハプロタイプを検出した。これらをタイ国およびバヌアツの低流行地域のものと比較した。患者個人における5'組換えタイプの平均検出数(多重感染)はタイより低い値を示した。ガダルカナルでは6 - 8個の *msh 1* ハプロタイプが認められるが、この数はバヌアツのそれに匹敵するが、タイに比べてずっと少ないものであった。またガダルカナル内の地域においても、このハプロタイプ分布に大きな差違が認められる。さらに *msh 1* (遺伝子)における連鎖不均衡はタイにおけるより強く、このことはソロモン島における限られた組換え機会を示す。*msh 1*の組み換え頻度はマラリア伝播の強さだけでなく、存在する *msh 1* alleles の数や感染の多重性によって決定されることを示している⁴⁷⁶⁸。

さてこのMSP 1の遺伝子構造から、三日熱マラリア原虫(*P. v.*)と共通祖先種とされるマカカ属カニクイザル寄生マラリア原虫の1種 *Plasmodium knowlesi* (*P. k.*)と *P. v.*の分岐時期とその後の変化についての推測を行った。*P. k.*についてはタイ国でヒトに自然感染していた分離株の *msh 1* 遺伝子配列を、*P. v.*については世界各地からいくつかの分離株について *msh 1* 配列を分析した。MSP 1のアミノ酸配列からみた系統学的分析は *P. v.*と *P. k.*は同じクレードに属し、同一の祖先から分岐したと考えられる。この分岐時期は *P. v.*の *msh 1* 遺伝子多型が4.556myaにわたって維持されて来ていると分析されることから、おそらく同時期5.273myaに起こったものと推定される。アジアにおけるマカカ属の拡散が起きたのは4.9mya以下と考えられるので、*P. v.*のヒトにおけるアジア起源は、マカカザルの中で生じた先祖 *P. v.*がヒトに宿主転換した結果として生じたものと考えられる⁴⁶⁹⁹。この *P. v.*の古代の個体群の拡張について、ミトコンドリアゲノム配列から推定された研究がある。最も地理的に広い分布を示す *P. v.*のミトコンドリアゲノムにおける核酸多様性研究は病原性の強い熱帯熱マラリア原虫(*P. f.*)における多様性と同じか、それよりやや高いレベルの多様性を示している。ミトコンドリアゲノム配列の間の核酸の相違の対方式による分布研究は両種が古代の個体群拡張を経ているとする仮説を支持した。これより著者らは *P. v.*および *P. f.*のミトコンドリアゲノムの最も近い共通祖先は200,000 - 300,000年前にあると推定した。これはヒ

トミトコンドリアの最も近い共通祖先の年代，および現代人類の始まり時期に近いもので，これらのマラリア原虫種が現代人類の起源前にすでにヒト科の寄生虫であったものが，現代人類宿主の拡張と共に拡張してきたとする仮説に一致する⁴⁶⁹⁸。他にネズミマラリア *Plasmodium berghei* (*P. b.*) を用いたマラリア再燃機構を研究したものがある。赤血球内発育原虫が薬剤や免疫の攻撃を逃れて生き残り，再びマラリア症状が再発する現象を再燃と呼ぶ。マウスの系での実験では再燃は3日間のクロロキン投与量を増やすことでは予防できない，投与期間を延長することによって再燃率を下げるができる。より多数の原虫の感染は再燃の頻度を高めた。再燃した原虫は処理前のものと同じようにクロロキン感受性であった。脾摘マウスについて炭素顆粒を与えたものと，PBSを与えたものに，*P. b.* 感染を行いその後クロロキン治療を行うと，炭素顆粒処理マウスで有意に高い再燃が認められた。このことからメロゾイトは食細胞中に潜んでクロロキン作用を免れるのではなく，休眠リングステージ原虫のような潜伏原虫が再燃を起こしていると思われる⁴⁸⁰⁷。この他日本語総説として Duffy 血液型システムと三日熱マラリア原虫⁴⁶⁹⁷，プーチェン村のマラリアがなくなる道筋⁴⁸⁰⁸がある。

(文責：神原廣二)

4.2 住血吸虫症

住血吸虫症はマラリアに次ぐ代表的な熱帯寄生虫病のひとつである。熱帯，温帯に棲息する特定の淡水貝（伝播貝，中間宿主）から水中に放出されたセルカリアが経皮的に人体に侵入して感染が成立するため，安全な水の供給が得られず，川，池，湖などの水を使わざるを得ない特に熱帯地の途上国農村部住民の風土病として知られる。推定患者数は約2億人，感染の危険に曝されているものは5億人にのぼる。

日本住血吸虫症，マンソン住血吸虫症，ビルハルツ住血吸虫症が世界の3種の主要な住血吸虫症として知られている。日本住血吸虫症とマンソン住血吸虫症は糞便中に虫卵が排泄され主要な病変は肝硬変，ビルハルツ住血吸虫症は尿中に虫卵が排泄され主要な症状として血尿が知られており，膀胱癌の原因ともなる。

熱帯医学研究所も基礎研究から対策研究まで幅広い研究を行っている。平成17年度に発表された業績の概要を記す。

Kisuらは，タンザニアのマンソン住血吸虫症の流行地で，簡易診断法の一つとしての自己診断の効果を調べ，学童が訴える下痢と腹部膨満感はマンソン住血吸虫感染（Kato-Katz法による虫卵検査による）と高い相関があると報告した⁴⁸⁰⁴。この所見は，興味あることに，学童が治療を受けると消失する。

開発途上国での住血吸虫症対策として集団治療を進めるうえで、近年、マンソン住血吸虫症の簡便かつ感受性・特異性の高い診断法の開発が期待されており、Kisuらの研究成果は注目に値する。

住血吸虫症の病害、伝播疫学等に関する総説が、嶋田⁴⁷⁹⁰、安高ら⁴⁷⁸⁷、青木^{4704, 4705}によって発表された。

(文責：青木克己)

4.3 フィラリア症

フィラリア症はリンパ系に寄生するバンクロフト系状虫とマレー系状虫の感染によっておこる重篤な疾患である。主として開発途上国に流行し(76ヶ国)、感染者の数は8千万人、感染の危険にさらされている人は7億人と推定されている。近年WHOにより集団治療による撲滅対策(Elimination of Filariasis)が世界各地で推奨され、実施されているので、近い将来、フィラリア症は公衆衛生上の問題はなくなると期待されている。

しかし、フィラリア症の発症機序の解明、抗成虫薬の開発など未解決の研究課題は多い。

熱帯医学研究所は主として疫学と対策につながる基礎研究と応用研究を行っている。平成17年度に発表された業績の概要を記す。

藤巻らは、抗成虫剤の開発を目指して、中米グアテマラで伝統薬として使用されている生薬の中から、呪医の処方参考に、線虫症に有効と思われる11種を選び、そのエタノール抽出物の糸状虫(*Brugia pahangi*)成虫効果をin vitroで調べた。11種の中で、高濃度では9種が*B. pahangi*成虫(雌雄ともに)の運動を抑制した。特に*Neurolaena lobata*は $10\mu\text{g/ml}$ の低濃度でも抗成虫・抗仔虫作用を有することが明らかとなった⁴⁷⁰¹。

Gunawardenaらは、*B. pahangi*に対するジエチルカルバマジン(DEC)とテトラサイクリン(TC)の抗成虫・抗仔虫作用と両剤併用の効果をin vitroで調べた。DECは成虫の運動を抑制することはないが、仔虫の産生を抑制すること、TCは仔虫の分娩を抑制するとともに運動性も抑制することを明らかにした。また、TCは虫体内の共生体リケッチャ(*Wolbachia*)を排除する。DECとTCの併用は成虫の運動抑制と仔虫産出抑制に相乗効果を示すことも明らかにした⁴⁷⁰²。

(文責：青木克己)

4.4 トリパノソーマ症

2005年度、トリパノソーマ症に関連して、媒介昆虫についての報告、輸血を介した感染の危険性についての報告、そしてシャーガス病についての解説が発表されている。

熱帯感染症研究センターの堀尾教授は、シャーガス病の母子感染が多数報告されている地域とほとんど報告されていない地域で、病原体 (*Trypanosoma cruzi*) を媒介する昆虫サシガメ (*Triatoma infestans*) を集め、その生態と感染率を比較して報告した⁴⁷⁸⁴。母子感染が多数報告されているボリビア SantaCruz 州の家屋内には、多数のサシガメが生息しており、しかもその *T. cruzi* 感染率は平均80.5%と極めて高い。それは、家屋内でシャーガス病の感染サイクルが回っていることを示唆しており、住民の *T. cruzi*-IgG 抗体陽性率が84.0%と非常に高いことから支持される。この地域では、サシガメも住民も高い *T. cruzi* 感染率を保ち、その結果、子供たちも常時感染の危険に曝されてしまっていることを示している。一方、母子感染が報告されていないブラジル東北地方では、多数のサシガメが見つかるが、それは家畜小屋のみに生息していて人家内には殆ど見つからない。これらのサシガメはトリ等の動物吸血嗜好性で、*T. cruzi* の感染率も極めて低かった。この地域では、多数のサシガメがいてもシャーガス病の危険性は低いものと思われる。今回のサシガメの生態と感染率の比較実験の結果は、サシガメの生態がシャーガス病の感染に重要な要因となっていることを示している。

疾病生態分野平山教授は、輸血を介する *T. cruzi* 感染についてメキシコのグループとの共同研究を報告している⁴⁷⁸⁵。中南米では、既に800件程度の輸血を介する *T. cruzi* 感染例があるにも関わらず、詳細な調査、研究は行われていない。この報告ではまず、メキシコの32州のうち18州で65,000程度の輸血サンプルを調べ、州によるバラツキはあるが0.2~2.8%、平均すると1.6%が抗体陽性、すなわち感染源となる可能性があることを認めた。続いて、首都メキシコシティにある国立病院に集まる輸血 donor サンプルについて、1999~2003年の5年間に渡って43,000程度を用いてもう少し詳しく調べている。ELISA法、間接蛍光抗体法 IIF の免疫的方法で *T. cruzi* 感染率を調べると0.37% (161/43,048) が陽性であること、その20%程度 (29/160) については、血液からの原虫培養、PCR、ECG 心電図異常の検査を行い、40% (5/29) は陽性と認められ検査時の時点で輸血によって *T. cruzi* 感染を起こしてしまう可能性が高いことが判定された。抗体価陽性の一部 (70/161) サンプルについて調べると、血液を分画すると原虫は白血球フラクションに集まり、赤血球、血小板の分画からは検出されなかった。しかし今回の研究から、輸血時の *T. cruzi* 感染検査の必要性、さらに輸血後のシャーガス病による心臓疾患フォローアップの必要性が示唆された。

さらに平山教授は、寄生虫病の現状を紹介するシリーズの一つとして、中南米に分布する

シャーガス病について解説している⁴⁷⁷⁴。その中で、自らのこの寄生虫病との出会い、コントロール活動の経験について触れ、病原体であるクルーズトリパノソーマへの感染から慢性期における心臓や消化管への障害の概説、有効な治療薬の無い現状、WHO と各国政府による対策の現状と問題点を説明し、感染の実態の把握、病態の観察、媒介昆虫の生態を含めた理解、病気に対する住民の意識と行動、治療と予防の方法、公衆衛生からのアプローチ、国家の政策における位置づけ、国際協力の必要性、そしてこれらの包括的対策の必要性を強調している。

(文責：上村春樹)

4 . 5 腸管寄生原虫症

近年、AIDS などの蔓延によりこれまで思いもよらなかった自然界の原虫がヒトに感染するようになった。微孢子虫類はさまざまな動物種で観察されているが、その正確な発育環さえまだ解明されていない。この微孢子虫の AIDS 患者の角膜への感染がたまたまタイの共同研究者らによって発見され、原虫が分離された。一部の微孢子虫種が AIDS 患者の角膜に感染可能なことは、これまでも報告があった。感染細胞修飾機構分野（旧原虫学部門）ではこの角膜切除片の一部を貰い受け、この原虫が細胞内寄生でのみ発育可能なことが分かっていたので、まずマウス由来線維芽細胞を宿主細胞とする培養を試みた。幸い細胞内微孢子虫の増殖が得られ、線維芽細胞を用いた培養系が確立された。さらにこの培養好適条件が検討され、マウス由来線維芽細胞では脳由来のものが最も良く、培養は37℃、5%CO₂中で、宿主細胞の増殖を抑えるため MEM 中の胎児血清濃度を2%に減少させると良いことも判明した。この細胞内で増殖した原虫を電子顕微鏡で観察し、この種がこれまで世界で1例のみの報告のある微孢子虫類の *Trachipleistophora anthropophthera* であることを突き止めた。さらに宿主細胞内では2つのタイプのスポア増殖寄生胞が形成されることを見つけた。1つは8個以上の卵形の孢子 (Spore) を形成するが、もう1方は2個の球形孢子を形成する⁴⁶⁹⁵。

一方病原性原虫のうち赤痢アメーバ (*Entamoeba histolytica* , 以下 *E. h.*) も公衆衛生学的に劣悪な環境で流行するだけでなく、男性同性愛好者の間や、精神遅延患者収容施設、時には老人ホームにおいての集団発生を起こすことがみとめられるようになった。後者は先進国においても忝々見られるもので、新たな医学的問題となっている。原虫部門ではフィリピンの共同研究者とともにフィリピンの精神遅延患者収容施設におけるアメーバ赤痢感染の実態を調査した。糞便は顕微鏡観察、PCR により原虫検出とその種の同定を行った。さらに血清抗体価による検討も行われた。結果、顕微鏡観察は113名の患者のうち、43名 (38%) が

赤痢アメーバ (*E. h.*) または非病原性 *Entamoeba dispar* (以下 *E. d.*) シストを保有していることを見つけた。一方 PCR では74名 (65.5%) が *E. h.* 陽性で6名 (5.3%) が *E. d.* 陽性であることを検出した。血清抗体反応 (IFA test) は現在あるいは過去における *E. h.* 感染を検出するが、78名 (80.4%) が陽性であることを見つけている。IFA test 陰性者のうち、5名は PCR で *E. h.* 陽性であった。糞便材料より抽出した DNA により *E. h.* の多様性が Serin-rich protein 遺伝子の分析により調べられた。nested PCR と制限酵素 Alu 1 による消化の結果は、わずかに6つの異なるバンドパターンを示し、患者集団の中で限られた数の *E. h.* クローンが感染しあっている状況を明らかにした⁴⁷⁰⁰。

(文責：神原廣二)

4.6 アルボウイルス感染症

アルボウイルスとは arthropod-borne virus の総称であり、節足動物 (カ、ヌカカ、ダニ、サシチョウバエなど) により脊椎動物に伝播し、ヒトでは熱性の疾患または脳炎の原因となることで知られている。アルボウイルスにはフラビウイルス、トガウイルス、ブニヤウイルス、レオウイルス、ラプトウイルスなどおよそ10科におよぶウイルスを含み、20世紀末までに500種を超える病原体が発見され、ヒトに臨床症状をもたらすものは100種を超えるとされている。その中でもフラビウイルス科に属するデングウイルスは重症のデング出血熱を起こし、その媒介蚊は熱帯地域の都市の劣悪な衛生環境下で棲息することから、毎年デングの大流行が熱帯地のどこかで発生しており、また、日本脳炎ウイルスはアジア一帯に分布し、現在でも小児に多くの患者発生が報告されており、時に致命的な脳髄膜炎を起こすなど医学的に重要なウイルスであり、世界保健機関 (WHO) も重要課題としてその対策に取り組んでいる。また、エル・ニーニョに代表される地球規模の気象変動や温暖化現象によって媒介蚊が激増し、その分布域が拡大するなど、環境変化によるアルボウイルス感染症の発生地域および流行規模の拡大が懸念されている。分子構造解析分野と生物環境分野ではこれらのウイルス感染症の病原性や感染伝播様式をより深く理解し、その疾病対策に利することを目的としてヒト 媒介蚊 ウイルスのそれぞれの要因について以下のような研究を実施した。

1. フラビウイルス

1-1) デングウイルスの分子疫学

デングウイルス感染症の流行の予測およびその病原性のメカニズムを解析することを目的として、東南アジアの国々を中心にデング患者よりウイルス分離を継続して行っている。常

に地球上のどこかでデングの流行が発生しており，各地域で優勢な血清型の交代が繰り返し行われている。これは優勢な血清型のウイルスに対する免疫を地域住民が獲得することによって見られる交代劇であるが，同じ血清型においても目まぐるしい遺伝子型の交代が行われていることが判明した。1995年から今日まで，フィリピンにおいてデング患者から分離したデングウイルス2型の prM と E 蛋白をコードする遺伝子領域の塩基配列を用いて系統樹解析を行ったところ，1998年以前まで優勢だったアジア2型の遺伝子型が1998年以降に減少しはじめ，2001年以降世界中に広く分布している遺伝子型のコスモポリタン型に全て置き換わってしまっていた。このことはある遺伝子型がより高いウイルス血症を誘導し，より効率よく伝播することにより，その結果として特定の遺伝子型の選択が生じたのか，それとも媒介する蚊による何らかのセレクションによるものなのか今後の検討課題である⁴⁷²⁴。

バングラデッシュでは1960年代半ばと1990年代半ばに Dacca fever として急性の熱性疾患の流行が報告されているが，デング熱・デング出血熱に関する詳細はほとんどわかっておりませんでした。2002年にバングラデッシュで起こった熱性疾患の流行で6132人の患者と58人の死者が報告された。我々は200人の患者から採血を行い，デングウイルス感染症を想定し，その臨床所見，血清学的診断およびウイルス分離について検討を行った。このうち100人の患者がウイルス分離および IgM-capture ELISA 法によってデング患者と確定された。8人の患者からはデングウイルス3型が分離され，これはバングラデッシュで初めて分離されたデングウイルス株 (BDH01 08) として GenBank に登録された。この分離されたデングウイルスの E 蛋白遺伝子領域の塩基配列を決定し，これまで登録されてあるデングウイルス3型57株の遺伝子情報を基に系統樹解析を行ったところ，タイ国およびマレーシアで流行している亜型 (Genotype II) であることが明らかとなった。また，血清診断の結果からデング抗体陽性患者の78%が二次感染と思われる高い IgG 抗体価を示していたことから，デングウイルスのバングラデッシュへの侵入はかなり以前から起こっていたことが示唆された⁴⁶⁷⁸。

1 - 2) 哺乳動物細胞における新たなるデングウイルスの受容体の解析

細胞表面のウイルス特異的受容体を見つけて，ウイルスの外被糖タンパクとの相互作用のメカニズムを解明することは，そのウイルスの持つ細胞嗜好性や病原性について理解する上で非常に重要である。これまで Vero 細胞や BHK 細胞表面のヘパラン硫酸，C6/36細胞表面の40-45kDaの糖蛋白質や樹状細胞表面の ICAM3 grabbing non-integrin (DC-SIGN) といったいくつかの細胞表面分子がデングウイルスの受容体候補として報告されているが，デングウイルスが標的細胞に侵入する際の分子メカニズムは未だによく解明されていない。今回我々は細胞表面の carbohydrate 決定基に注目し，デングウイルス2型との結合性について解析を行ったところ，ヒトの赤白血病由来の K562細胞および BHK 21細胞表面に存在するグ

リコフィンゴリピッド (nLc 4 Cer) が強く反応性を示すことが判明した。この nLc 4 Cer は他の血清型(1 , 2 , 4 型)とも反応性を示したことから, このような中性の carbohydrate 決定基がデングウイルスの哺乳動物細胞上の受容体形成に関わっている可能性が示唆された。また, 化学的に合成した多価の nLc 4 オリゴ糖がデングウイルス 2 型の BHK 21細胞への感染を抑制したことから, デングウイルスに有効な抗ウイルス化学療法剤の開発への応用が期待される^{4679 4685}。

1 - 3) 日本脳炎弱毒ワクチン株 ML 17分子生物学的解析

日本脳炎ウイルスの弱毒化に関与するウイルス遺伝子領域を特定するために, 弱毒化する前の親株の JaOH0566株とサルの腎臓細胞とウズラの胚線維芽細胞で継代培養を繰り返すことで弱毒化した ML 17株の全塩基配列を比較したところ, 25ヵ所のヌクレオチド変異と, この変異に関連して10個のアミノ酸置換 (prM/M 領域に 2 個, NS 2 A 領域に 1 個, NS 4 B 領域に 3 個, NS 5 領域に 4 個) が確認された。今回我々は構造蛋白質に認められたアミノ酸置換 (prM/M 領域, 127Met Ile と274Asn Thr) に注目し, 以前我々が構築した日本脳炎ウイルス (JaOArS982株) の感染性クローンに同様のアミノ酸置換を導入し, その生物活性およびマウスを用いた神経侵襲性への影響について検討を行った。127番目のアミノ酸 Met を Ile に置換した変異株は274番目のアミノ酸 Asn を Thr に置換した変異株に比べて強い神経侵襲性の低下が認められた。しかし, 両変異株とも ML 17株より強い神経毒性を示すことから, ML 17株と同程度の十分な弱毒性を導入するには非構造蛋白領域に認められたアミノ酸変異との組み合わせが必要であることが示唆された。また, ML 17株の E 蛋白領域にはアミノ酸変異が認められなかったことから, ML 17株をバックボーンとして E 蛋白領域のみを組み換える弱毒フラビウイルスキメラワクチンへの応用が期待される^{4676 4677}。

1 - 4) その他

現在, 西ナイルウイルスをマウス脳ではなく組織培養した Vero 細胞により大量生産し不活化する技術が確立され, 民間のワクチン会社との共同研究として組織培養による不活化西ナイルワクチンが試作され, 我々の研究室において試作ワクチンの有効性試験を実施している^{4675 4682 4684}。

2 . 媒介昆虫へのアプローチ

2 - 1) ネットアイシマカの生態学・行動学

デング熱ウイルスの媒介蚊であるネットアイシマカ, *Aedes aegypti* (L.) およびヒトスジシマカ, *Aedes albopictus* (Skuse) の, 生態学的・行動学的特徴の違いを明らかにする研究の一

環として、両種の寄主探索行動の違いを、室内実験によって比較した。光の照度をコントロールできる室内において、数段階の照度下に置かれた雌蚊成虫を、二酸化炭素、熱および黒白のコントラストによって誘引し、誘引源をターゲットとしてアタックする雌成虫の頻度をセンサーによって経時的に記録したところ、両種において夜間における照度とアタック頻度とに正の相関が見られることが分かった。光に対する感受性はネッタイシマカがヒトスジシマカを上回り、夜間における感受性の閾値はネッタイシマカにおいて0.1ルクス以下であるのに対し、ヒトスジシマカでは10ルクス以上であった。すなわち、家屋内に普通に成虫が生息しているネッタイシマカの方が、基本的に屋外生息性のヒトスジシマカより暗い環境に適応していることが明らかとなった。また、昆虫の光に対する感受性の指標である eye parameter（個眼の平均直径と個眼間角度の積）を調べたところ、ネッタイシマカの eye parameter はヒトスジシマカのそれをやや上回ることが分かり、上記の結果を裏付ける結果となった⁴⁷⁴²。

2 - 2) 昆虫成長制御剤ピリプロキシフェンと copepod の併用による蚊幼虫防除効果

ネッタイシマカの幼虫を捕食する *Mesocyclops pehpeiensis* Hu および *Megacyclops viridis* (Jurine) の、昆虫成長制御剤ピリプロキシフェンに対する感受性を、室内試験によって調査した。ピリプロキシフェンは、蚊幼虫に対する有効防除濃度の約10倍の濃度(0.1ppm)で、*Mesocyclops pehpeiensis* に対して影響を及ぼさなかった。一方、*Megacyclops viridis* に対しては、0.1ppm で幼生期の生存率の低下をもたらした。しかし、ピリプロキシフェンの影響下で生き残った *Megacyclops viridis* は、成長が早い上に生存期間が長く、より多くのネッタイシマカ幼虫を捕食し、さらにより多くの産卵数を示した。したがって、自然環境下でピリプロキシフェンを両種の copepod と同時に処理することは、より効果的な蚊幼虫防除を実現しうることが示唆された⁴⁷⁴⁵。

2 - 3) 新規常温揮散型ピレスロイド剤のネッタイシマカに対する空間忌避効果

新規常温揮散型ピレスロイド剤であるメトフルトリンを含有する樹脂製剤の、ネッタイシマカ成虫に対する空間忌避効果を、ベトナム・ハイフォン市ド・ソンの民家を用いて調査した。30軒の民家のうち15軒を処理家屋、他を無処理家屋とし、1部屋あたり1個の樹脂製剤(メトフルトリン1000mg含有)を処理したところ、resting survey による雌成虫数は処理直後から急激に低下し、この状態が少なくとも6週間持続した。樹脂の改良、用法用量の検討などにより、従来の蚊取り製剤では実現できなかった、蒸散のためのエネルギーを必要としない新しい長期残効型の蚊取り製剤の開発が期待される⁴⁷⁴⁴。

(文責：長谷部 太)

4.7 コレラに代表される細菌性下痢症

コレラの診断と治療，防御免疫反応，コレラワクチンの現状及び今後のコレラワクチンとしての繊維毛の有用性を1987年から1998年までの著者の論文を中心に総説として記載している⁴⁶⁹⁴。

(文責：平山壽哉)

4.8 呼吸器感染症

急性呼吸器感染症は，年齢，性別，地域を問わず熱帯地（発展途上国）における罹患率，死亡率の主要な原因であり，熱帯医学研究所においてこの領域の疾患に関する研究を推進することには大変意義がある。平成17年4月1日及び平成18年3月31日までに呼吸器感染症領域にて，本研究所が関連し，発表された原著論文は全6編であった（内1編は邦文論文）。

呼吸器感染症を来たす最も頻度の高い病原体である肺炎球菌・インフルエンザ菌・モラキセラ菌に関わるものである。モラキセラ菌に関して，モラキセラカタラーリスのヒト咽頭上皮細胞への付着における Lipooligosaccharide (LOS) の役割を，特に P^k と呼ばれる抗モラキセラ菌抗体のエピトープ領域に注目して論じた論文¹⁴⁸⁰⁶とモラキセラ菌の家族内で高頻度に伝播していることを薬剤耐性パターンとパルスフィールド電気泳動法により示した論文¹⁴⁷²²が発表された。また，インフルエンザ菌については，ベトナム保健省国立衛生疫学研究所との共同研究で，ハノイ市の国立小児病院で経験された下気道感染と髄膜炎より分離されたインフルエンザ菌における薬剤耐性菌の頻度分析およびパルスフィールド電気泳動により分子疫学的検討がされた論文¹⁴⁷²⁰および，米国アイオワ大学細菌学教室との基礎科学分野での共同研究として，莢膜非保有株インフルエンザ菌によるバイオフィーム産生におけるシアル酸と複合糖質生物合成の役割について論じた論文¹⁴⁷²¹を発表した。さらに，臨床現場における介入研究として，老人病棟において上気道感染患者に Povidone-Iodine を用いた口腔内洗浄を実施した場合の院内肺炎への影響について論じた論文¹⁴⁷²⁸および下気道感染症に対する cef-tazidime と cefozopran の市販後臨床試験¹⁴⁷³⁴を発表した。

総説としては，肺炎球菌性肺炎の診断・検査・予防・治療に関するものが4編^{14732, 14733, 14736, 14737}，SARS，高病原性トリインフルエンザといった新興呼吸器ウイルス感染症に関するものが2編^{14730, 14735}，その他百日咳，メチシリン耐性黄色ブドウ球菌，インフルエンザウイルスに関する

るものがそれぞれ 1 編^{14741, 14729, 14738} , また , 本教室の研究紹介が 1 編¹⁴⁷³¹ 発表された。

(文責 : 有吉紅也)

4 . 9 その他世界的に問題になっている感染症

原著 (ウイルス感染) :

ニパウイルス

分子構造解析分野では , 近年 , 人獣共通感染症として新たに見出され , 注目されているニパウイルス感染症の血清学的診断法について検討し , 安全で安価な ELISA 法を開発した⁴⁶⁸³。今回開発した IgG-ELISA および IgM-ELISA 系は , 不活化ウイルス抗原を用いた従来法と比較してほぼ同等の感度と特異性を示した。さらに , 本法ではニパウイルス N タンパク質の組換え体を抗原として用いており , 安全性の面においても高く評価される。

中枢神経系ウイルス

病変発現機序分野では , 中枢神経系に感染するウイルスの病変発現の機序について , 研究を展開している。

ポリオウイルス (PV) の組織親和性において , PV レセプター (PVR) は宿主側の最も重要な決定基と考えられていた。しかしながら , PV は脳幹や脊髄のニューロンで選択的に複製するにもかかわらず , PVR は非標的臓器でも発現していることが明らかにされ , PV の組織親和性には PVR 以外の宿主因子も関与することが示唆された。このため , 東京都神経科学総合研究所および国立感染症研究所との共同で PV の組織親和性に関与する宿主因子について , 検討を行った⁴⁷¹⁰。インターフェロン (IFN) α/β レセプター遺伝子を欠損させた PVR トランスジェニックマウスを作製して PV を感染させたところ , 中枢神経系に加えて肝臓 , 脾臓 , 膵臓等の非標的臓器にも激しい病変が認められた。さらに , PV を感染させた PVR トランスジェニックマウスにおける IFN 遺伝子および IFN によって誘導される関連遺伝子群の発現量を調べたところ , 非標的臓器では感染前でもこれら IFN 関連遺伝子群の発現が認められ , PV 感染後速やかにその発現量が増加した。これに対して , 標的臓器では感染前の発現量も低値で , 感染後も十分な応答が認められなかったことから , IFN 応答が PV の臓器親和性および病原性を制御する重要な決定要因の一つであることが示唆された。本研究は , IFN 系がウイルスの組織親和性および病原性の重要な決定要因の一つであることを示した初めての報告である。

エンテロウイルス 71 (EV71) は , 手足口病の主要な原因ウイルスの一つであるが , EV71

感染は、時に、乳幼児に脳幹脳炎、ポリオ様麻痺の重篤な神経症状を引き起こす。近年、マレーシア、台湾においてEV71による手足口病の大流行が発生した際に多数の致死性脳炎の症例が報告され、再興感染症の原因として注目されるウイルスの一つである。本研究では、サル感染モデルにおけるEV71の神経病原性の弱毒化に関わるウイルス遺伝子領域の同定を試みた⁴⁷¹¹。EV71強毒株の感染性cDNAクローンを構築し、本ウイルスの弱毒株およびPV1ワクチン株の温度感受性変異を導入したところ、5'非翻訳領域、3Dポリメラーゼ領域および3'非翻訳領域に変異を導入した変異ウイルスがサルにおいて弱毒化した神経病原性を示し、EV71とPV1はサルにおける共通の神経病原性決定基を共有していることが示唆された。

北海道大学獣医学部との共同でヨーロッパからアジアに掛けて広く分布するダニ媒介性脳炎ウイルス(TBE)の血清学的診断法について検討を行った⁴⁷¹⁴。TBEの病徴は、日本脳炎ウイルス(JEV)と酷似し、血清学的診断においても高度に交叉性が認められることから、両者を明確に区別できる診断法の開発が望まれていた。本研究では、TBEの組換えPrM/Eタンパク質を発現するプラスミドを293T細胞にトランスフェクトした後に培養液中に放出されるsubviral particlesを抗原とする新しいELISA法を開発した。開発したIgG-ELISA、IgM-ELISA法は、何れも従来法と比較して同等ないしそれ以上の感度と特異性を示し、JEVとの交叉反応性も認められなかったことから、TBE特異抗体の検出に極めて有用である。

運動制御における前頭前野の体部位再現性に関する問題を解決するために、ニューロンを介して逆行性輸送される狂犬病ウイルスを用いてサルにおける前頭前野と第1次運動皮質間の多シナプス性接続の解析を行った⁴⁷⁰⁹。その結果、前肢運動の認知制御において、腹側領域46の重要性が示唆された。

B型肝炎ウイルス(HBV)

長崎大学医学部第一内科と共同で慢性B型肝炎患者の肝胆道系における壊死性血管炎を呈する結節性多発性動脈炎に抗HBV剤ラミブジンと血漿交換およびステロイド療法が著効を示したことを報告した⁴⁷¹⁷。また、タイ国チェンマイ大学医学部、国際医療センターとの共同研究として、タイ国チェンマイで1989年に開始したB型肝炎ワクチンプログラムの評価に関する報告を行った⁴⁷⁰⁸。

その他のウイルス

突発性発疹は、ヒトヘルペスウイルス6(HHV-6)Bの初感染によって引き起こされる新生児疾患であり、稀に中枢神経症状などの重篤な合併症を伴うこともあるが、通常は良好な経過を示す。高熱以外に特徴的な症状も無いことから発疹の出現前にこの病気の診断を行う

ことは困難であり，発熱時に HHV 6B を迅速かつ簡便に検出できる診断法は現在までのところ開発されていない。昭和病院小児科，藤田保健衛生大学小児科および名古屋大学医学部との共同で HHV 6B 感染時の末梢血単核細胞中のウイルス抗原を検出できる方法を確立するために，HHV 6B の組換え U90タンパク質に対するポリクローナル抗体 IEA/ex 3 を作製し，その有用性について報告した⁴⁷⁰⁷。

ウイルス感染に対して強力かつ細胞性免疫，特に細胞障害性 T リンパ球 (CTL) 応答を誘導する効果的なワクチンを開発することは非常に重要なことである。米国マサチューセッツ医科大学との共同研究でハンタウイルス性肺症候群を引き起こすハンタウイルス属 Sin Nombre virus (SNV) に対する組換えアデノウイルスベクターワクチンを作製し，その効果について検討した⁴⁷¹³。作製した SNV の N タンパク質を発現する組換えアデノウイルスベクターワクチン (rAd) は，マウスにおいて，組換えワクシニアウイルスベクターワクチン，プラスミド DNA ワクチンあるいはこれらの組み合わせと，エピトープ特異的な IFN γ 産生 T 細胞数と誘導される細胞障害性 T 細胞活性について比較したところ，rAd は他のものより強力な CTL 応答を誘導することが明らかとなった。

総説：

ダニ媒介性脳炎ウイルス⁴⁷¹⁸およびウシ海綿状脳症 (BSE) をはじめとするプリオン病について⁴⁷⁹²，総説として解説した。

(文責：吾郷昌信)

4 . 10 細胞からのアプローチ

オーストラリアの JR. Warren & BJ. Marshall (05年ノーベル賞受賞者) が，人の胃十二指腸潰瘍などを発症させる菌としてグラム陰性螺旋状桿菌 *Helicobacter pylori* を報告した。その後，本菌の感染が胃がんの一部や，リンパ腫を誘発させることも解ってきた。若年者の *H. pylori* 保菌率は発展途上国で高く，保菌率を低下させることは，国際保健上重要である。また，本菌による発症機構の解明は学問的に重要な研究となっている。病原因子解析分野では，一貫してその発症の分子機構を細胞や個体レベルで解析し，その成果の応用を目指している。

H. pylori は，種々の細胞に空砲を形成させ死に至らしめる蛋白毒素 VacA を菌外に分泌する。この毒素が，宿主細胞膜の受容体型蛋白チロシンホスファターゼ RPTP β と RPTP α に結合することや，ノックアウトマウスの実験から前者が病変発現に必須であることを明らかにしてきた。今回 VacA を酸やアルカリ処理すると RPTP への結合が高まること，また糖鎖が

結合していない低分子量 RPTP α は弱毒性の m2 VacA への結合が弱く、それによる活性も乏しいことを発見した⁴⁶⁸⁹。かつて *H. pylori* が、強酸性の胃で生きているのは信じがたい事だったが、その分泌する毒素が酸性条件でさらに毒性を高めることは注目に値する。

VacA の *in vitro* 細胞毒性や *in vivo* 胃傷害作用は、ポリフェノール - 特にホップ包葉抽出物 - で阻害することができた⁴⁶⁸⁶。本抽出物はビール製造に用いられたホップの残り物から得られるので、廃棄物の有効利用の可能性を秘めている。

H. pylori は、菌内で作った CagA を 4 型分泌装置で宿主細胞に注入する。注入された CagA は、宿主のシグナル伝達系でチロシン部分がリン酸化を受けて活性型となり、宿主細胞の SHP2 に結合してそのホスファターゼ活性を上げ、細胞の運動性や増殖を著しく亢進する。東アジア菌株の CagA は欧米型菌株の CagA よりその作用が強く、これは東アジア型菌株が萎縮性胃炎や胃がんを高頻度に発症させることと相関している。

マイクロアレイを用いて、CagA を直接 AGS ヒト胃上皮細胞株に発現させた時に動く遺伝子を網羅的に検索したところ、8,500中339遺伝子が活性化されることがわかった。一次的に CagA で活性化されたと思われる遺伝子のプロモータ・エンハンサー領域には、共通して T 細胞活性化因子 (NFAT) ファミリーの結合する *cis* エlement が認められた⁴⁶⁸⁷。CagA は、それ自体のリン酸化には関係なく(ただしリン酸化部位の構造は必須)、ホスホリパーゼ C γ /カルシニューリン系による NFATc3 の脱リン酸化を促進してその核移行を高める。その結果、NFATc3 の制御を受けているサイクリン依存性キナーゼ阻害因子 (p21^{WAF1/Cip1}) 分子が増加することが観察された。同じ現象は、AGS 細胞に CagA⁺VacA⁻ の *H. pylori* を感染させても観察された。ただし、CagA に依存する一連の現象は、培養液に VacA を添加すると打ち消される。P21は細胞の増殖を抑える機能がある。したがって、その発現を VacA が阻害することは、CagA による細胞増殖を促進し、胃細胞の癌化を促進する可能性がある。

H. pylori による胃炎患者の胃液では、誘導型内因性抗菌ペプチド β defensin 2 の濃度が高い⁴⁶⁸⁸。これは IL 1 β や IL 8 の濃度とは相関しないことから、おそらく細菌が胃粘膜細胞と直接接触した事で誘導されたものと思われ、それまでに *in vitro* 実験で報告してきたことと一致した。炎症が治癒すると、本ペプチドの濃度は正常になることが観察された。また、*H. pylori* 感染で炎症を起こしている胃十二指腸粘膜では、トロンビン/アンチトロンビン複合体および EGF が VacA の量に比例して増えており、トロンビンが組織傷害や感染防御に係わっている事が示唆された⁴⁶⁹⁰。

これら、*H. pylori* に関する一連の成果は概説の形でも発表されている^{4691 4692}。

疾病生態分野では、アフリカや東南アジアにおけるマラリア・日本住血吸虫などへの宿主感受性を遺伝子の一塩基多型 SNP や HLA との関連で幅広く検索している。今回、耳あかの

乾燥型と湿潤型を決める SNP 探索プロジェクトに加わり，SNP の同定と各型の世界的な分布の解析に貢献した⁴⁷⁶⁷。耳あかのタイプに相関する SNP が第16番染色体長腕にある遺伝子 *ABCC 11* [ATP-binding cassette, C type , 別名 multidrug resistance-associated protein 8 (MRP 8)] に見つかり (538位塩基 G , A) , アミノ酸残基では180位 (arginine , glycine) 多型であった。G が優性であり，両親からの遺伝子のどちらか一方でも G の場合は湿潤型となり北欧・アフリカに多くみられる。乾燥型 [AA] は中国北部・韓国・日本に多い。本遺伝子にコードされている蛋白質は ATP 依存性 cGMP 運搬機能があり，A 型 [180G MRP 8] を高発現している細胞株では，その活性が殆ど認められなかった。乾燥型は，ユーラシア大陸北部に発し，北>南，東アジア>北欧>南アメリカ>アフリカであった。*ABCC 11* を含む領域は配列が厳格な領域であり，人の進化で重要と思われるが，その正確な役割はまだ確定されていない。

病変発現機序分野では，熱帯疾患だけでなく，大学における一般的な病理学の研究に協力してきた。その中で，一般的な低悪性度子宮内膜間質肉腫 (low-grade endometrial stromal sarcoma) の希少な転移例を発見し，報告した⁴⁷¹⁶。本肉腫の転移は近位の膣，骨盤，腹膜に見られる。今回の症例は，S 字結腸の粘膜下ポリープに発見された。形態学的にも組織免疫学的にも，3 年前子宮より摘出された肉腫と同じであり，これの転移である事がほぼ確実であった。

なお新たに本研究所の一員となった研究者が前研究室で行った優れた研究^{4723 4763 4764}，従来のデータをもとにシンポジウムで発表されたもの⁴⁷¹⁶⁴⁸⁰⁵，教育用テキスト^{4770 477116}などの資料についての紹介は省く。各文献を参照されたい。

(文責：中村三千男)

4 . 11 社会および人間からのアプローチ

近年，社会環境分野および附属熱帯感染症研究センターを中心に，GIS (Geographical Information System : 地理情報システム) / GPS (Global Positioning System : 全地球測位システム) / RS (Remote Sensing : リモートセンシング) をつかった地理学・空間疫学的アプローチ，その災害研究への応用，国際感染症危機管理への対応，国際保健医療協力，およびその医療人類学的・健康教育学的研究が盛んになり，その分野を担う人材が熱帯医学研究所に集まったり，また育ったりしている。熱帯医学を，熱帯病に対する bio-medical なアプローチをコアとしながら，その周辺領域と連携統合して，如何に熱帯病対策，熱帯途上国の健康水準向

上に寄与するかを問われ続ける実学であると規定するならば、これらの研究の充実は重要である。

台風被害に対する災害地理工学的アプローチとしては、2003年の九州豪雨による浸水状況にかかわる都市の土地条件の研究⁴⁷⁴⁸が、都市化による人工的地形改変による地域的洪水リスクの上昇を明らかにしている。また、2005年の台風14号による宮崎県の大淀川下流域の氾濫被害を衛星画像と現地調査によって明らかにし⁴⁷⁵⁵、同様のアプローチは1999年の熊本県の台風18号被害にも応用されている⁴⁷⁵⁶。

地震被害に対する同様のアプローチとしては2005年3月20日の福岡県西方沖地震（マグニチュード：6.470）に対する玄界島・神集島・志賀島・福岡市の詳細な現地調査研究⁴⁷⁴⁹、GISとアンケートによる被害報告⁴⁷⁵⁷がある。

また、本分野の方法論的検討としてはGISと2万5千分の1地図との組合せによる詳細土地利用データ作成⁴⁷⁵⁸がある。Google EarthなどによりRSの情報が無料または安価に利用できるようになり、GPS装置も小型化し、GISの操作も容易になっており、今後、熱帯医学のフィールド研究での応用が有望・不可欠な分野である。この分野については今後も世界のトップレベルに伍する研究を展開していく必要がある。

また、地球環境問題に対する熱帯医学の取組みも、今後重要な焦点になるであろう。本年度には黄砂の粒径が長崎を含めた日本の各地で異なることを明らかにした研究がなされた⁴⁷⁵³。この研究は、中国のどの地域から黄砂が来ているのかに繋がる研究になり、また、その原因としての人間活動についても同定することに繋がるであろう。このような地球レベルの研究においてもGIS/GPS/RSの活用が重要になるであろう。

2005年といえば、2004年12月26日のスマトラ島沖地震およびインド洋津波に対して熱帯医学研究所として津波被災後の感染症勃発に対するモニタリングと対策を行った年である。活動全体については「スマトラ島沖地震津波後の感染症流行対策：基礎調査（代表：国井修・文部科学省科学研究費補助金 特別研究促進費（2）研究成果報告書 2005）」に詳しい。また、いくつかの英文論文が2005年度中にアクセプトされ、2006年に報告されている。2005年度中の業績としては、緊急医療援助を開発と関連づけて研究したものの⁴⁷⁸⁸、災害と新興感染症の危険性について論じたもの⁴⁷³⁹、タイでの生活・健康被害を論じたもの⁴⁷⁵⁹がある。

この津波被害への対応の基礎となったものに2003年のSARSへの対応があった。SARS対応についてWHO主導の国際感染症危機管理としてGOARN（Global Outbreak Alert and Response Network）の重要性が報告されている⁴⁷⁴⁰。

熱帯医学研究所としては、災害疫学、国際健康危機管理に対する統合的研究・統合的対策研究を強化すること、その人材育成についても力を入れることが必要であろう。同時に、単なる一時的な緊急援助、緊急研究に終わることなく、緊急アウトブレイク対策から、復興支

援，生活再建支援，開発支援，再発予防支援，そのためのキャパシティビルディングとガバナンスの強化に資するような研究を長期的に展開していくべきであろう。津波被害に関しては，そのインパクトの測定がなされ，長期的なメンタルケアが現在課題になっており，それらについても研究が開始されている。

国際医療協力活動分野の人材育成についての研究としては，英国の取組みが研究されている⁴⁷⁵⁴。国内の医師，看護師不足がクローズアップされる中，総合的な熱帯医学・国際保健医療学分野の育成の枠組みが研究されるべきであろう。

国際保健医療分野では，ミレニアム開発目標（MDGs：Millennium Development Goals）が，2000年9月の国連総会において149カ国の国家元首の支持を得て採択されて以来，メインストリームとなっている。その中で貧困削減，初等教育の普及，ジェンダー問題，環境問題とならんで，保健が「人間の安全保障」として重視されている。乳幼児死亡と並んで，毎年50万人を超える女性が妊娠中または出産によって死亡していることから，女性の出産について政策が見直されている。論文⁴⁷⁹³は，ネパールの1地域において，女性の教育が妊婦健診受診行動に与える影響を医療人類学的に検討したものである。家制度が厳しく，「嫁」の地位が伝統的に極めて低い南アジアにおいては，ヘルスセンターを建てて，妊婦健診を開始すれば，妊婦が集まってくれるというものではない。十分に有効なサービスを提供するとともにコミュニティにその意義が認識されること，妊婦も夫も舅も姑もそれを認識することが不可欠なことを報告している。論文⁴⁷⁹⁴はそのような医療人類学的アプローチの重要性を解説したものである。

論文⁴⁷⁵⁰は中国のHIV感染，エイズの現状と対策についてまとめた研究である。中国の人口規模，多様性，急激な経済発展，国内・国外人口移動を考慮すると，中国のエイズ対策は人類にとって極めて重要な問題であり日本にとっても重要な問題であろう。WHOは対策が進まなければ2010年までに1000万人のHIV感染者が発生すると推計している。中国では対策体制が整備され，今後，モニターリングも組織的に進むと考えられる。熱帯医学研究所出身の中国人留学生と現地の研究機関・対策機関との協力により，本分野の研究が進むことが望まれる。

アフリカ・ジンバブエにおける学童の住血吸虫症に対する健康教育の効果の研究した論文⁴⁷⁵¹とケニアにおける住血吸虫症対策をレビューしたエッセイ⁴⁷⁸⁹は，途上国における熱帯病対策における社会および人間からのアプローチが重要なことを示している。健康教育は知識や認識を一時的に向上させる効果はあった。そして，そのために学校保健を利用することは合理的で有効であった。しかし，それと感染率の減少とは必ずしも明確に関連していなかった。いわゆる「風土病的」な熱帯病を研究する場合，そのメカニズムがわかってなかなか病気はなくなる。そのような風土病をなくすには，bio-medicalなアプローチとともに，

人びとの生活と文化・社会を十分に理解したうえで疾病対策に取り組む風土病学 (endemiology) を確立し, その地域の健康転換・健康開発を総合的に進めていく視点も大切である。

(文責: 門司和彦: 附属熱帯感染症研究センター)

4.12 エイズ

感染症予防治療分野 (臨床) の有吉教授が国立感染症研究所エイズ研究センターに所属していた当時, タイ National Institute of Health との共同研究において, HIV サブタイプ AE およびサブタイプ B との新規組換え体をタイ人エイズ患者から発見した⁴⁷²⁵。また, タイ人エイズ患者において Epstein-Barr virus と Cytomegalovirus の日和見感染は高頻度に検出されるが, JC virus はあまり検出されないことを報告した⁴⁷²³。加えて大阪大学との共同研究において, IL-4 と RANTES 遺伝子のプロモーター領域における polymorphism が, エイズの病態進行と関わっていることを発見した⁴⁷²⁶。一方, アメリカ・スタンフォード大学との共同研究により, HIV サブタイプ B において検出された薬剤耐性に関与する塩基置換が, サブタイプ B 以外のサブタイプの HIV においても薬剤耐性と関連することを見出した⁴⁷¹⁹。

(文責: 久保嘉直)

5 特別事業費による事業

5.1 熱帯医学研修課程

熱帯医学研究所のミッションのひとつである「専門家の育成」として位置付けられる本研修課程は、熱帯医学に特化した我が国で唯一の3ヶ月の短期集中研修コースである。目的は、熱帯地で保健医療活動をするにあたって必要最小限の熱帯医学に関する基本的な知識や技術を、短期間で習得することにある。本課程には、所内の教官に加え33名という多数の所外講師の協力を得て平成17年6月1日から8月31日までの3ヶ月実施された。研修内容にはウイルス学、病原細菌学、原虫学、寄生虫学、病害動物学、環境生理学、感染生化学、病理学、宿主遺伝学、疫学、人類生態学、社会医学、臨床医学の広きにわたり、特別講義では、「UN-FPA」「国境なき医師団」「国際保健協力市民の会」などによる実践的な講義もとりあげられた。

昭和53年度（第1回）に定員10名として開設され、平成12年度からは定員が5名増加し15名となり、平成17年度（第28回）までに321名の修了生（医師132名、看護師、保健師、助産師、薬剤師など189名）を輩出してきた。平成17年度は、24名の応募があり、医師4名、看護師5名、薬剤師3名、保健師1名、検査技師2名の計15名が研修生に選ばれた。すべての研修生が全課程を修了し、修了証書および和文・英文2葉のディプロマが授与された。

運営は、学外の専門家11名、所外（学内）委員2名、所内委員13名によって構成される熱帯医学研修課程運営委員会によって行われ、研修課程終了時の平成17年8月30日には、運営委員会と同時に研修生との意見交換会も開催され、研修生の意見が運営委員へ直接伝える機会が設けられた。

本年度に新たに実施された試みは、

- 1) 専属のコースコーディネータを配置し、決め細やかな対応を可能にしたこと
 - 2) カリキュラムを従来の分野直列型カリキュラムから、感染病原体解析分野から臨床・公衆衛生・生態学までの学際的リンクを意識した並列型カリキュラムへ大幅に改編したこと
 - 3) 研修生の自主性を引き出すことを目的に、経験と自己学習をもとに研修生が発表するセミナーを新たに設けたこと
 - 4) チュートリアルを導入し、個人面談を軸とした学習や情報ネットワークおよび進路ガイダンスが実施されたこと
 - 5) 学習促進を目的に、選択問題50問からなる試験を実施したこと
- 以上の5点であったが、いずれの試みも研修生から高い評価を得た。

（文責：有吉紅也）

6 文部科学省科学研究費補助金等による研究

6.1 文部科学省科学研究費補助金(平成17年度採択分)

研究種目	研究代表者職・氏名	金額(千円)	研究課題	備考
特定領域研究	教授・平山壽哉	7,500	ヘリコバクター・ピロリ VacA 毒素の毒性発現機序	16年～17年度 継続
特定領域研究	教授・平山謙二	6,400	テング出血熱の感受性遺伝子の解明	16年～17年度 継続
特定領域研究	教授・森田公一	3,500	西ナイルウイルスのワクチン開発	16年～17年度 継続
基盤研究A 一般	教授・平山壽哉	18,200 間接 5,460	ヘリコバクター・ピロリが産生する VacA 毒素の受容体の機能と毒性発現	17年～18年度 継続
基盤研究A 海外	教授・高木正洋	1,600 間接 480	東南アジアにおける蚊媒介性感染症の流行を左右する環境の定量的評価	14年～17年度 継続
基盤研究B 海外	教授・平山謙二	2,600	南米のシャーガス病の重症化を規定するヒトおよび原虫の遺伝子解析	15年～18年度 継続
基盤研究B 海外	教授・青木克己	4,300	ビルハイツ住血吸虫症：感染者の疾病認識に沿った調査により明らかになる多様な病害	15年～17年度 継続
基盤研究B 海外	教授・森田公一	2,200	デング出血熱重症化に関与する宿主および病原体因子の解明	15年～17年度 継続
基盤研究B 海外	教授・神原廣二	4,800	インドネシアにおけるマラリア薬剤耐性の起源と現状	16年～17年度 継続
基盤研究B 海外	助教授・大石和徳	6,600	デング出血熱の重症化機序の解明と治療戦略	16年～17年度 継続
基盤研究B 海外	教授・國井修	3,200	エイズ遺児のケアに関するソーシャルネットワークと公的セクターの役割に関する研究	17年～20年度 継続
基盤研究C 一般	教授・中村三千男	900	新奇 GT ミスマッチ DNA 結合タンパク質の解析	16年～17年度 継続
基盤研究C 一般	講師・和田昭裕	1,300	病原性遺伝子群をもつヘリコバクター・ピロリによる宿主細胞への炎症誘導機構	16年～17年度 継続
基盤研究C 一般	教授・岩崎琢也	1,400	アルファヘルペスウイルス感染の体内動態：侵入から神経への感染初期の伝播経路	16年～17年度 継続
萌芽研究	助教授・大渡伸	700	水圧振動の共鳴・忌避周波数による水棲病害微生物の選択的駆除と生態系影響評価	15年～17年度 継続
萌芽研究	教授・門司和彦	1,600	熱帯における人口・健康・栄養転換に差異をもたらす人類生態要因の検討	17年～18年度 継続

研究種目	研究代表者職・氏名	金額(千円)	研究課題	備考
萌芽研究	教授・平山謙二	1,700	臍帯血造血幹細胞移植免疫不全マウスを用いたヒトマラリアモデルの作製	17年～18年度継続
若手研究B	助手・都野展子	900	マラリア媒介蚊ガンビエハマダラカグループの同所的共存機構	15年～17年度継続
若手研究B	助手・谷村晋	2,000	小児人口の受療機会における不平等性の時空間分布	17年～18年度継続
合計	直接経費 間接経費	71,400 5,940		

6.2 文部科学省科学研究費補助金(平成18年度内定分)

研究種目	研究代表者職・氏名	金額(千円)	研究課題	備考
基盤研究A 一般	教授・平山壽哉	20,300 間接 6,090	ヘリコバクター・ピロリが産生する VacA 毒素の受容体の機能と毒性発現	17年～18年度 継続
基盤研究A 海外	教授・有吉紅也	14,100 間接 4,230	北タイにおける HIV 伝播とエイズ病態に関する宿主遺伝子多型研究	18年～20年度 継続
基盤研究B 海外	教授・平山謙二	2,600	南米のシャーガス病の重症化を規定するヒトおよび原虫の遺伝子解析	15年～18年度 継続
基盤研究B 海外	助手・都野展子	5,200	アフリカマラリア媒介蚊の吸血宿主選好性決定機構の解明	18年～21年度 継続
基盤研究B 海外	教授・平山壽哉	6,900	フィリピン及びタイにおけるヘリコバクター・ピロリの病原因子の多型比較調査	18年～19年度 継続
基盤研究B 海外	教授・森田公一	3,700	デング出血熱重症化に関与するウイルス遺伝子多型性の研究	18年～20年度 継続
基盤研究C 一般	講師・和田昭裕	1,800	コレラ毒素Bサブユニット結合蛋白質の精製および同定	18年～19年度 継続
萌芽研究	教授・門司和彦	1,100	熱帯における人口・健康・栄養転換に差異をもたらす人類生態要因の検討	17年～18年度 継続
萌芽研究	教授・平山謙二	1,100	臍帯血造血幹細胞移植免疫不全マウスを用いたヒトマラリアモデルの作製	17年～18年度 継続
萌芽研究	教授・青木克己	1,800	レーザー細胞破壊技術を用いた寄生蠕虫感染型幼虫の特殊細胞・器官の機能と役割の検証	18年～19年度 継続
萌芽研究	教授・森田公一	2,000	アジアで流行している未知の蚊媒介性脳炎ウイルスの網羅的解析	18年～19年度 継続
萌芽研究	助教授・本田純久	1,600	スマトラ沖地震津波被災地域における心的外傷後ストレス障害のマルチレベル分析	18年～19年度 継続
若手研究B	助手・谷村晋	800	小児人口の受療機会における不平等性の時空間分布	17年～18年度 継続
若手研究(スタートアップ)	助教授・西浦博	1,350	個体の行動及び個人保護具による新興感染症予防に関する理論疫学的研究	18年～19年度 継続
合計	直接経費 間接経費	64,350 10,320		

6.3 受託研究費(平成17年度分)

受託者等	職・氏名	研究課題	備考
科学技術振興機構 戦略的創造研究 推進事業	教授・森田公一	糖鎖機能によるデングウイルス感染の制御	
科学技術振興機構 戦略的創造研究 推進事業	講師・和田昭裕	ヘリコバクター・ピロリの空胞化致死毒素 の作用機序解析と新しい治療戦略	
アサヒビール 株式会社	教授・平山壽哉	ピロリ菌毒素の性状解析に関する研究	
千葉大学 ナショナルバイオリ ソースプロジェクト	教授・神原廣二	中核的拠点整備プロジェクト - 病原性微 生物 - 病原性原虫の収集, 株保存と分析 その提供	協力業務 担当者
国立国際医療 センター 国際医療協力研究 委託費	教授・神原廣二	インドネシア国ロンボック・スンバワにお けるマラリアコントロールと住民教育効果	分担研究者
国立国際医療 センター 国際医療協力研究 委託費	教授・門司和彦	ミレニアム開発目標達成のためのよりよい パートナーシップに関する分析	分担研究者
国立国際医療 センター 国際医療協力研究 委託費	教授・平山謙二	マラリアワクチン及び薬剤開発に関する研 究	分担研究者
科学技術振興機構 科学技術振興 調整費	教授・平山壽哉	我が国の国際的リーダーシップの確保 アジアのヘリコバクターピロリ感染対策	
科学技術振興機構 科学技術振興 調整費	助教授・大石和徳 助手・森本浩之輔	重要課題解決型研究等の推進 生体成分粘膜アジュバントによる戦略的予 防	
厚生労働科学研究 費補助金 新興・再興感染症 研究事業	教授・森田公一	ウエストナイルウイルス侵入に備えての診 断, 予防対策への基盤的研究	分担研究者
厚生労働科学研究 費補助金 エイズ対策 研究事業	助手・久保嘉直	HIVの増殖・変異の制御に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究 費補助金 国際健康危機管理 ネットワーク研究事業	教授・森田公一	国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得 のための人材育成のあり方に関する研究	主任研究者
厚生労働科学研究 費補助金 国際健康危機管理 ネットワーク研究事業	教授・平山謙二	国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得 のための人材育成のあり方に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究 費補助金 国際健康危機管理 ネットワーク研究事業	教授・門司和彦	国際的な健康危機管理に必要なスキル獲得 のための人材育成のあり方に関する研究	分担研究者

受託者等	職・氏名	研究課題	備考
厚生労働科学研究費補助金 国際健康危機管理ネットワーク研究事業	助教授・大石和徳	国際健康危機管理のための情報ネットワークのあり方に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・森田公一	節足動物媒介性ウイルスに対する診療法の確立、疫学及びワクチン開発に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	助教授・大石和徳	水痘、流行性耳下腺炎、肺炎球菌による肺炎等の今後の感染症対策に必要な予防接種に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・平山謙二	輸入蠕虫性疾患の監視と医療対応整備に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 がん臨床研究事業	助教授・本田純久	難治性白血病に対する標準的治療法の確立に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・森田公一	SARS コロナウイルス検査法の精度向上及び迅速化に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・岩崎琢也	野生げっ歯類及び節足動物に由来する感染症の診断、疫学及び予防に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・岩崎琢也	動物由来感染症対策のサーベイランス手法の開発に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・神原廣二	アジアで流行している感染症の我が国への侵入監視の強化に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 新興・再興感染症研究事業	教授・高木正洋	マラリアの感染予防及び治療に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 国際医学協力研究事業	教授・平山謙二	寄生虫症の病態・治療及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 国際医学協力研究事業	教授・門司和彦	寄生虫症の病態・治療及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究	分担研究者
厚生労働科学研究費補助金 国際医学協力研究事業	教授・平山壽哉	細菌性腸管感染症の病原因子の解析と診断・治療への応用に関する研究	分担研究者

受託者等	職・氏名	研究課題	備考
厚生労働科学研究費補助金 国際医学協力研究事業	助教授・大石和徳	急性呼吸器感染症の感染メカニズムと疫学 感染予防・制御に関する研究	分担研究者
大学高度化推進経費・研究プロジェクト (学長裁量経費)	COE 研究員・ 石井一成	臍帯血造血幹細胞移植免疫不全マウスを用いた ヒトマラリアモデルの作製に関する研究	研究代表者

7 海外活動

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
助手	金田英子	PI/Co-PI meeting 主催・参加	タイ	H17.4.6 ～ H17.4.8	先方負担
教授	門司和彦	PI/Co-PI meeting 主催・参加	タイ	H17.4.7 ～ H17.4.8	先方負担
教授	大石和徳	海外感染症研究の打ち合わせ	フィリピン	H17.4.26 ～ H17.4.29	C O E
教授	森田公一	太平洋予防接種事業強化プロジェクトの現地用務実施	フィジー	H17.4.19 ～ H17.4.30	受託研究費
技術職員	笹川健造	太平洋予防接種事業強化プロジェクトの現地用務実施	フィジー	H17.4.24 ～ H17.10.7	受託研究費
事務職員	大澤裕	太平洋予防接種事業強化プロジェクトの現地用務実施	フィジー	H17.4.24 ～ H17.10.7	受託研究費
教授	森田公一	WHO（新興感染症対策）の会議に出席	ニューカドニア	H17.5.5 ～ H17.5.14	W H O
教授	有吉紅也	米呼吸器学会に出席	アメリカ	H17.5.19 ～ H17.5.25	大学運営経費
教授	門司和彦	5th Indepth Network : Annual General and Scientific Meeting	南アフリカ共和国	H17.5.21 ～ H17.5.29	大学運営経費
教授	金田英子	5th Indepth Network : Annual General and Scientific Meeting	南アフリカ共和国	H17.5.21 ～ H17.5.29	大学運営経費
教授	神原廣二	インドネシアにおけるマラリア薬剤耐性の起源と現状に関する調査	インドネシア	H17.5.22 ～ H17.6.1	科学研究費補助金
教授	國井修	タンザニア：HIV/AIDS 遺児に関する研究調査 アメリカ：国連戦略本部強化事業のための研究打ち合わせ	タンザニア アメリカ	H17.5.22 ～ H17.6.5	大学運営経費(国際戦略強化事業)
教授	高木正洋	熱帯性疾病媒介蚊の防除試験実施	中国	H17.5.24 ～ H17.5.27	共同研究(住友化学)
講師	川田均	熱帯性疾病媒介蚊の防除試験実施	中国	H17.5.24 ～ H17.5.31	共同研究(住友化学)
教授	青木克己	第10回日韓寄生虫セミナー出席	韓国	H17.6.3 ～ H17.6.5	委任経理金

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
講師	上村春樹	第10回日韓寄生虫セミナー出席	韓国	H17.6.3 ~ H17.6.5	科学研究費 補助金
助手	柳哲雄	ネパールにおけるリーシュマリア症の共同研究	ネパール	H17.6.9 ~ H17.6.23	受託研究費
教授	中村三千男	食細胞の殺菌機構とその分化制御に対する共同研究	アメリカ	H17.6.13 ~ H17.6.19	大学運営費
講師	川田均	拠点大学方式による学術事業	ベトナム	H17.6.13 ~ H17.6.18	J S P S
助手	金田英子	スマトラ沖地震、津波後の感染症対策・被災地現況調査	スリランカ	H17.6.13 ~ H17.8.12	委任経理金
教授	森田公一	フィリピン：WHO会議出席 ベトナム：感染症対策調査	フィリピン ベトナム	H17.6.14 ~ H17.6.22	先方負担
教授	門司和彦	スマトラ沖地震、津波後の感染症対策・被災地現況調査	スリランカ	H17.6.17 ~ H17.6.24	委任経理金
助手	錦織信幸	スマトラ沖地震、津波後の感染症対策・被災地現況調査	スリランカ	H17.6.17 ~ H17.6.24	委任経理金
教授	國井修	スマトラ沖地震、津波後の感染症対策・被災地現況調査	スリランカ	H17.6.18 ~ H17.6.23	委任経理金
教授	有吉紅也	ロンドン大学で修士設立のための協力を要請するため	イギリス	H17.6.19 ~ H17.6.24	科学研究費 補助金
教授	平山謙二	HLAとマラリアの研究	タイ	H17.6.21 ~ H17.6.23	先方負担
教授	嶋田雅暁	熱帯地域の感染症についての現地調査	ケニア	H17.6.26 ~ H17.7.5	大学運営費
教授	平山謙二	南米のシャーガス病の研究打ち合わせ	ボリビア パラグアイ	H17.6.26 ~ H17.7.3	科学研究費 補助金
助手	菊池三穂子	Dengue出血の感受性遺伝子解明のための研究打ち合わせと実験	ベトナム	H17.7.1 ~ H17.7.4	C O E
教授	高木正洋	Dengue熱媒介蚊調査研究	ラオス	H17.7.3 ~ H17.7.13	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
教授	神原 廣二	マラリアコントロールと住民の教育効果に関する調査・研究	インドネシア	H17.7.10 ～ H17.7.27	受託研究費
講師	上村 春樹	マラリア薬剤耐性の起源と現状に関する研究	インドネシア	H17.7.10 ～ H17.7.24	科学研究費補助金
助教授	大石 和徳	国立衛生疫学研究所・カンホア病院にて共同研究	ベトナム	H17.7.10 ～ H17.7.16	J S P S
COE 研究員	砂原 俊彦	マラリア流行地における媒介蚊の生態に関する研究	インドネシア	H17.7.10 ～ H17.7.31	C O E
教授	有吉 紅也	熱帯医学修士課程海外臨床研修に係る現地調査及び情報収集	ベトナム タイ	H17.7.10 ～ H17.7.19	C O E
助手	都野 展子	ケニア・ガーナ：マラリア媒介蚊の繁殖水域のサンプル収集 アメリカ：マラリア媒介蚊サンプルの分子生物学的解析 媒介動物国際学会参加と研究結果の発表	ケニア ガーナ アメリカ	H17.7.12 ～ H17.10.1	科学研究費補助金
教授	平山 謙二	Protocol Writing workshop に出席	タイ	H17.7.13 ～ H17.7.17	先方負担
教授	門司 和彦	熱帯における人口・健康・栄養転換に差異をもたらす人類生態要因の研究	ラオス	H17.7.16 ～ H17.7.24	先方負担
教授	國井 修	タイ：HIV・エイズ遺児に関する調査 スリランカ・モルジブ：スマトラ沖地震津波後の現地調査	タイ スリランカ モルジブ	H17.7.17 ～ H17.7.28	C O E
助教授	大石 和徳	大量免疫グロブリン療法のための事前調査	フィリピン	H17.7.18 ～ H17.7.21	科学研究費補助金
助手	井上 真吾	日本脳炎ウイルスの分離及び解析に関する研究打ち合わせと実験	ベトナム	H17.7.19 ～ H17.7.22	C O E
助教授	大石 和徳	HIV感染者に対する肺球菌ワクチンに関する研究	ウガンダ	H17.7.29 ～ H17.8.5	C O E
教授	門司 和彦	ケニア国際寄生虫対策プロジェクトに参加	ケニア	H17.7.31 ～ H17.8.27	J I C A
教授	森田 公一	NIHE国立衛生研究所で研究打ち合わせ	ベトナム	H17.8.21 ～ H17.8.24	受託研究費 (国際戦略本部)
教授	有吉 紅也	エイズ遺児調査計画の調査	タイ	H17.8.30 ～ H17.9.8	科学研究費

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
助 手	井 上 真 吾	デングウイルス及び日本脳炎ウイルス感染症の共同研究	フィリピン	H17.8.25 ~ H17.9.14	科学研究費
助 手	金 田 英 子	現地調査	ラ オ ス	H17.8.30 ~ H17.9.24	先方負担 (地球環境 学研究所)
COE 研究員	斉 藤 まりこ	デング熱プロジェクトの研究	フィリピン	H17.8.15 ~ H17.10.7	科学研究費
教 授	嶋 田 雅 暁	熱帯地域に興る感染症、特に住血吸虫等、寄生虫疾患にかかわる現地調査のための研究打ち合わせ	ケ ニ ア タ イ	H17.8.7 ~ H17.10.8	大学運営 経 費
教 授	平 山 謙 二	熱帯医学実地研修コースの引率と Refresher Course on GCP for TDR Clinical Monitors の会議出席	タ イ	H17.8.7 ~ H17.8.18	タマサート 大学WHO
教 授	高 木 正 洋	拠点大学方式における学術交流事業	ベトナム	H17.8.8 ~ H17.8.13	受託研究費
助教授	大 石 和 徳	熱帯感染症専門研究コースに参加し、南米ペルーにおけるデング熱をはじめとする熱帯感染症に関する専門的知識を習得する	ペ ル ー	H17.8.13 ~ H17.8.28	科学研究費
教 授	高 木 正 洋	マラリアの感染症予防及び治療に関する研究	インドネシア	H17.8.18 ~ H17.8.23	国立国際医 療 研 究 所
教 授	有 吉 紅 也	熱帯医学修士コースへの協力依頼	韓 国	H17.8.19 ~ H17.8.19	C O E
教 授	平 山 謙 二	NIHE国立衛生研究所で研究打ち合わせのため	ベトナム	H17.8.21 ~ H17.8.24	受託研究費 (国際戦 略本部)
助 手	中 澤 秀 介	フィールド調査及びサンプリング	ベトナム	H17.9.4 ~ H17.10.16	J S P S
教 授	神 原 廣 二	インドネシアにおけるマラリアコントロールと住民の教育効果に関する研究	インドネシア	H17.9.4 ~ H17.9.11	受託研究費
教 授	平 山 謙 二	修士課程ヒアリング出席と研究打ち合わせ	アメリ カ フ ラ ン ス ガ ー ナ	H17.9.8 ~ H17.9.22	C O E
事務長	牧 山 謹 一 郎	ケニア中央医学研究所の視察や調印式出席	ケ ニ ア	H17.9.10 ~ H17.9.17	大学運営経費 (連携融 合 事 業 経 費)
教 授	青 木 克 巳	ケニア中央医学研究所の視察や調印式出席	ケ ニ ア	H17.9.10 ~ H17.9.17	大学運営経費 (連携融 合 事 業 経 費)

渡 航 者		渡 航 目 的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職 名	氏 名				
教 授	國 井 修	タンザニア・ケニア：エイズ調査研究 イギリス・アメリカ：MDGs達成のための よりよいパートナーシップに関する分析	タンザニア ケニア・イギリス アメリ カ	H17.9.13 ～ H17.9.28	大学運営経 費受託研究 費
助教授	大 石 和 徳	熱帯感染症研修コースの指導及び引 率	フィリピン	H17.9.14 ～ H17.9.27	C O E
教 授	門 司 和 彦	熱帯における人口・健康・栄養転換 に差異をもたらす人類生態要因の検 討について現地調査	ラ オ ス	H17.9.14 ～ H17.9.21	先方負担 (国立国際医 療センター)
C O E 研究員	砂 原 俊 彦	マラリア媒介蚊幼虫発生源の生態環 境調査	ベトナム	H17.9.21 ～ H17.11.17	C O E
教 授	平 山 謙 二	データ管理法のコンピュータソフト ウェアについての情報交換	中 国	H17.9.25 ～ H17.9.29	C O E
教 授	森 田 公 一	平成17年度「太平洋予防接種事業強 化プロジェクト」の現地用務実施	フィジー	H17.9.18 ～ H17.10.8	受託研究費
教 授	皆 川 昇	ケニア中央医学研究所の視察や調印 式に出席	ケ ニ ア	H17.9.9 ～ H17.9.27	大学運営経費 (連携融合 事業経費)
教 授	金 子 聰	ケニア拠点のデータマネージメント の研修	中 国	H17.9.25 ～ H17.9.29	大学運営経費 (連携融合 事業経費)
教 授	平 山 壽 哉	コペンハーゲン大学で招待講演	ド イ ツ デンマーク	H17.10.11 ～ H17.10.17	科学研究費 補 助 金
講 師	竹 中 伸 一	ケニアにおける新興・再興感染症に 関わる研究教育拠点構築のための研 究打ち合わせ	ケ ニ ア	H17.10.11 ～ H17.11.16	大学運営経費 (連携融合 事業経費)
助教授	大 石 和 徳	デングウイルス感染症に関する調査 研究、打ち合わせ	フィリピン	H17.10.16 ～ H17.10.22	C O E
教 授	高 木 正 洋	新興・再興感染症拠点プログラムに関 するプロジェクトドキュメントとMOU の進捗状況に関する事務打ち合せ	ベトナム	H17.10.19 ～ H17.10.22	受託研究費
教 授	嶋 田 雅 暁	ケニア、タンザニアにおける新興・ 再興感染症に関わる研究教育拠点構 築のための研究打ち合わせ	ケ ニ ア タンザニア	H17.10.20 ～ H17.12.4	大学運営経費 (連携融合 事業経費)
事 務 員	本 田 志 保	ケニア、タンザニアにおける新興・ 再興感染症に関わる研究教育拠点構 築のための研究打ち合わせ	ケ ニ ア タンザニア	H17.10.20 ～ H17.11.15	大学運営経費 (連携融合 事業経費)
教 授	金 子 聰	ケニア、タンザニアにおける新興・ 再興感染症に関わる研究教育拠点構 築のための研究打ち合わせ	ケ ニ ア タンザニア	H17.10.21 ～ H17.11.16	大学運営経費 (連携融合 事業経費)

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
技術員	笹川 健造	H17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」の現地調査	フィジー	H17.10.23 ～ H18.3.13	受託研究費
事務員	大澤 裕	H17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」の現地調査	フィジー	H17.10.30 ～ H18.3.14	受託研究費
教授	皆川 昇	ネットワーク構築のための調査及び研究打ち合わせ	ケニア タンザニア	H17.11.4 ～ H17.12.4	大学運営費
教授	森田 公一	新ケニアプロジェクトの研究打ち合わせ	ケニア	H17.11.5 ～ H17.11.10	大学運営費
COE 研究員	斉藤 まり子	デングウイルス感染症の調査研究	フィリピン	H17.11.5 ～ H17.12.4	C O E
教授	平山 壽哉	タイにおけるヘリコバクター感染の現状調査	タイ	H17.11.8 ～ H17.11.13	受託研究費
教授	青木 克己	NIHEとの新興・再興感染症研究拠点形成プロジェクトの打ち合わせ	ベトナム	H17.11.12 ～ H17.11.16	受託研究費
教授	高木 正洋	NIHEとの新興・再興感染症研究拠点形成プロジェクトの打ち合わせ	ベトナム	H17.11.12 ～ H17.11.16	受託研究費
事務長	牧山 謹一郎	NIHEとの新興・再興感染症研究拠点形成プロジェクトの打ち合わせ	ベトナム	H17.11.12 ～ H17.11.12	受託研究費
教授	平山 謙二	住血吸虫症研究推進会議に出席	スイス	H17.11.13 ～ H17.11.18	先方負担 (WHO)
助教授	大石 和徳	デングウイルス感染症の調査研究	フィリピン	H17.11.13 ～ H17.11.15	C O E
助手	中澤 秀介	共同研究	ベトナム	H17.11.13 ～ H17.11.17	受託研究費
教授	有吉 紅也	会議出席、研究打ち合わせ	ベトナム	H17.11.17 ～ H17.11.19	受託研究費
助手	金田 英子	研究会出席	ベトナム	H17.11.20 ～ H17.11.27	先方負担 (京都大学)
教授	岩崎 琢也	マラリアならびに結核に関する調査研究	タイ	H17.11.24 ～ H17.12.1	C O E

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
教授	平山謙二	研究打ち合わせ	スウェーデン	H17.11.26 ～ H17.12.4	受託研究費
教授	嶋田雅暁	平成17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」の現地用務実施	フィジー	H17.11.27 ～ H17.12.24	受託研究費
助教授	鳥山寛	チェンマイ大学にて肝疾患の疫学および病理学的共同研究	タイ ラオス	H17.12.1 ～ H18.3.1	自費
教授	森田公一	平成17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」の現地用務実施	オーストラリア フィジー	H17.12.4 ～ H17.12.20	受託研究費
助手	金田英子	アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究	タイ ラオス	H17.12.4 ～ H17.12.27	先方負担 (総合地球科学研究所)
事務員	本田志保	ケニア、タンザニアにおける新興・再興感染症に関わる研究教育拠点機構のための事務処理	ケニア	H17.12.4 ～ H17.12.27	大学運営費
教授	平山謙二	アメリカ：NIHE国際共同研究者の担当者との打ち合わせ タイ：WHOの倫理審査に関する国際連帯担当者との会議 ベトナム：ベトナム拠点の運営に関する打ち合わせ	アメリカ タイ ベトナム	H17.12.9 ～ H17.12.19	受託研究費
教授	門司和彦	日米医学合同会議に参加	アメリカ	H17.12.9 ～ H17.12.12	先方負担 (日米医学協力研究会)
教授	平山壽哉	第45回細胞生物学会出席と発表	アメリカ	H17.12.10 ～ H17.12.14	科学研究費補助金
助教授	大石和徳	国際健康危機管理	アメリカ	H17.12.10 ～ H17.12.16	大学運営費
COE 研究員	齋藤麻理子	American Society of Tropical Medicine and Hygiene 54th Annual Meeting 参加	カナダ アメリカ	H17.12.10 ～ H17.12.19	COE
講師	和田昭裕	第45回 ASCB Annual Meeting に参加	アメリカ	H17.12.11 ～ H17.12.16	先方負担 (PRESTO)
教授	高木正洋	蚊媒介性感染症研究における Dengue 熱基礎調査の調査研究	ベトナム	H17.12.20 ～ H17.12.24	受託研究費
教授	川田均	蚊媒介性感染症研究における Dengue 熱基礎調査の調査研究	ベトナム	H17.12.20 ～ H17.12.24	受託研究費
教授	有吉紅也	IVIとのベトナムプロジェクトの共同研究に関する協議	韓国	H17.12.21 ～ H17.12.31	受託研究費

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
助教授	鳥山 寛	チェンマイ大学にて肝疾患の疫学及び病理学的共同研究	タイ	H17.12.1 ～ H18.3.1	自費
教授	平山 謙二	マラリアワクチンについて研究打ち合わせ	ガーナ	H18.1.8 ～ H18.1.14	科学研究費補助金
事務員	本田 志保	ケニア、タンザニアにおける新興・再興感染症に関わる研究教育拠点構築のための事務処理	ケニア	H18.1.8 ～ H18.1.28	大学運営経費（連携融合事業経費）
教授	神原 廣二	アジアで流行している感染症のわが国への侵入監視の強化に関する研究	ケニア	H18.1.11 ～ H18.1.29	先方負担（厚生労働科研費）
教授	青木 克己	ケニアの住血吸虫症の流行地における調査	ケニア	H18.1.12 ～ H18.1.22	科学研究費補助金
助手	中澤 秀介	連携融合事業におけるマラリア調査・研究対象地域やケニアにおけるマラリア調査研究の実際を調べる	ケニア	H18.1.12 ～ H18.1.29	大学運営経費（連携融合事業経費）
助手	柳 哲雄	マラリアの調査研究	インドネシア	H18.1.14 ～ H18.1.27	受託研究費
教授	皆川 昇	ケニア、タンザニアにおける新興、再興感染症に関わる研究教育拠点構築の為の研究打ち合わせ及び情報収集	ケニア	H18.1.18 ～ H18.2.23	大学運営経費（連携融合事業経費）
教授	嶋田 雅暁	海外赴任	ケニア		大学運営経費
教授	金子 聡	海外赴任	ケニア		大学運営経費
教授	森田 公一	平成17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」現地用務	フィジー	H18.2.4 ～ H18.2.14	受託研究費
教授	江原 雅彦	共同研究	ベトナム	H18.2.5 ～ H18.2.20	JSPS
講師	川田 均	媒介性感染症研究におけるデング熱基礎調査の調査研究	ベトナム	H18.2.6 ～ H18.2.11	受託研究費
教授	青木 克己	ベトナム拠点構築の事前打ち合わせ	ベトナム	H18.2.12 ～ H18.2.17	受託研究費
教授	平山 謙二	原虫の種内変異についての研究打ち合わせ	キューバ	H18.2.12 ～ H18.2.17	科学研究費補助金

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
助手	井上真吾	デングウイルス及び日本脳炎ウイルス感染症の共同研究	フィリピン	H18.2.12 ～ H18.2.24	C O E
事務補佐員	蔡国喜	「エイズ性感染症の治療実験と中国福建省の医師の医学知識と態度」に関する研究	中国	H18.2.17 ～ H18.3.27	大学運営費
助手	渡邊貴和雄	共同研究	ベトナム	H18.2.18 ～ H18.2.25	J S P S
助手	中岡大士	タイ：海外実習プログラムの要請及び打ち合わせ ベトナム：疫学調査プロジェクトの打ち合わせ	タイ ベトナム	H18.2.20 ～ H18.2.27	受託研究費
教授	有吉紅也	タイ：海外実習プログラムの要請及び打ち合わせ ベトナム：疫学調査プロジェクトの打ち合わせ	タイ ベトナム	H18.2.20 ～ H18.2.27	受託研究費
助手	金田英子	「感染症の成立と宿主応答の分子基盤・国際情報ネットワーク構築に関する研究」	ラオス	H18.2.22 ～ H18.3.19	科学研究費補助金
教授	岩崎琢也	マラリアに関する共同研究	タイ	H18.2.27 ～ H18.3.2	C O E
客員教授	テムエマニュエル オードリー	タンザニアの National Institute for Medical Research 主催の会議出席・モシ・ダ ルエスサーラムでの研究打ち合わせ	タンザニア	H18.3.3 ～ H18.3.19	大学運営費
助教授	本田純久	研究打ち合わせ及び調査研究	ラオス	H18.3.4 ～ H18.3.12	大学運営費
教授	森田公一	平成17年度「太平洋予防接種事業強化プロジェクト」現地用務実施	フィジー	H18.3.5 ～ H18.3.14	受託研究費
助手	中澤秀介	研究打ち合わせ及び調査研究	ベトナム	H18.3.6 ～ H18.3.30	受託研究費
教授	皆川昇	研究打ち合わせ	ケニア	H18.3.8 ～ H18.3.31	大学運営費
教授	門司和彦	熱帯林住民のヒューマンセキュリティに関する研究について資料収集	ラオス	H18.3.8 ～ H18.3.18	先方負担
教授	高木正洋	共同研究	ベトナム	H18.3.11 ～ H18.3.18	大学運営費
事務職員	本田志保	拠点整備事務処理	ケニア	H18.3.12 ～ H18.3.31	大学運営費

渡航者		渡航目的	渡航先国	渡航期間	経費区分
職名	氏名				
教授	有吉紅也	開所式への出席及び研究打ち合わせ	ベトナム	H18.3.12 ~ H18.3.19	JSPS/ 受託研究費
教授	平山謙二	開所式への出席及び研究打ち合わせ	ベトナム	H18.3.13 ~ H18.3.19	受託研究費
教授	森田公一	開所式への出席及び研究打ち合わせ	ベトナム	H18.3.15 ~ H18.3.18	受託研究費
教授	青木克巳	開所式への出席	ベトナム	H18.3.16 ~ H18.3.19	受託研究費
事務員	橋口文子	事務打ち合わせ	ケニア	H18.3.20 ~ H18.3.25	大学運営 経費

8 外国人研究者の受け入れ

8.1 熱帯医学研究コース

本集団研修コース（熱帯医学研究）は、国際協力機構（JICA）の委嘱により昭和58年度より毎年おこなわれており、開発途上国の研究者に対して、毎年1月から12月までの12ヶ月間にわたり、熱帯医学を研究する機会を提供し、研究および人材育成を通して、熱帯地にはびこる熱帯病および各種感染症の予防、撲滅に貢献することを目的としている。第21回目にあたる平成15年度より、熱帯医学研究Ⅱとしてリニューアルされた。

第22回熱帯医学研究コースは、平成17年1月（平成16年度）より平成17年12月まで実施され、7カ国から集まった9名（中国1名、フィジー2名、ケニア1名、ギニア1名、ミャンマー1名、タンザニア2名、ウガンダ1名）が研修を修了した。平成17年12月6日には熱研セミナー室において、それぞれの研修生が12ヶ月の成果についての発表会が開かれ、分子構造解析分野では2名の研修生が、「Complete Nucleotide Sequence and Mutation Analysis of 2 Variants of Attenuated ML-17 Strain of JEV」と「Development of Multiplex Reverse Transcriptase-PCR Assays for Rapid Detection of Dengue, Chikungunya, Japanese Encephalitis and West Nile Viruses」について、社会環境分野では「Emerging and Re-emerging infectious diseases Global crisis」、病原因子機能解析分野では「Synergy effects of ammonium and sodium chloride on H-pylori VacA toxin binding to AZ-521 cells」、生物環境分野では「genetic diversity of Malaria parasite isolated from wild type mosquitoes from Tanzania」、疾病生態分野では「Association study of HLA-DRB1 for Post Schistosomiasis Liver Fibrosis in Philippine」、熱帯感染症研究センターでは「Stigma and Discrimination against people living with HIV/AIDS in Tanzania: Understanding the way it manifests and its effects」、感染細胞修飾機構分野では「Correlation among parasite density, antibodies and cytokines in Rodent Malaria Model」、感染症予防治療分野では「Immune response to pneumococcal polysaccharide type 14 in HIV-infected adults in Uganda after immunization with 7-valent pneumococcal conjugate vaccine followed by 23-valent pneumococcal polysaccharide vaccine」に関する研究成果が各教室に配置された研修生によって無事発表された。その内容を踏まえ、熱研教授会にて資格審査を行った結果、全員承認され、平成17年12月9日の修了式にて研修生9名全員に対し Diploma in Tropical Medicine が授与された。

次年度の平成18年度から本集団研修コースは4月に始まり、同時に開講予定の長崎大学大学院医歯薬総合研究科熱帯医学専攻（熱帯医学修士課程）と共同で、研修生の研修を実施する予定である。

（文責：有吉紅也）

8.2 平成17年度に受け入れた外国人研究者

分野等	氏名	国籍	受入期間	制度等	備考
分子構造解析	Maria Terres Galevz Alonzo	フィリピン	H17.6.16~ H17.6.30		COE
	Aryati	インドネシア	H17.10.12~ H18.4.12		COE
	Doan Hai Yen	ベトナム	H18.2.5~ H18.3.5		JSPS
	Shah Paresh Sumatilal	インド	H18.2.6~ H18.2.17		COE
	Phan Thi Nga	ベトナム	H18.2.13~ H18.3.13		JSPS
病原因子機能解析	Somesh Chandra Bhunia	インド	H17.4.11~ H17.4.15		独立行政法人 国際交流機構
	Manoj Kumar Chakarabarti	インド	H17.4.11~ H17.7.18		独立行政法人 国際交流機構
	Jan Sup	ベルギー	H17.9.6~ H17.9.15		共同研究費
	Joel Moss	アメリカ	H17.9.26~ H17.9.29		共同研究費
	Blanqita Blanco De Guzman	フィリピン	H18.1.15~ H18.1.21		共同研究費
	Philippian Prieto Padilla	フィリピン	H18.1.15~ H18.1.21		共同研究費
	Manas Changsanguan	タイ	H18.2.6~ H18.2.10		共同研究費
	Hahm Ki-Baik	韓国	H18.3.9~ H18.3.11		大学運営経費
感染細胞修飾機構	Rivera Windell Laberinto	フィリピン	H17.8.9~ H17.11.6		独立行政法人 国際交流機構
	Nguyen Thi Huong Binh	ベトナム	H17.11.26~ H17.12.23		JSPS
	Truong Van Hanh	ベトナム	H17.11.26~ H17.12.23		JSPS
	Nguyen Minh Hung	ベトナム	H17.11.26~ H17.12.23		JSPS
奇生行動修飾機構	Dunstan Ugumo	ケニア	H17.7.31~ H17.8.3		連携融合 事業経費
	Njeri Wamae	ケニア	H17.7.31~ H17.8.3		連携融合 事業経費
	Phoebe Josiah	ケニア	H17.7.31~ H17.8.3		連携融合 事業経費
感染症予防治療	Siriphan Saeng-aroon	タイ	H17.12.3~ H17.12.10		共同研究費
	Jeerang Wongtrakul	タイ	H17.12.3~ H17.12.10		共同研究費
	Hang Thi Thanh Ha	ベトナム	H17.12.4~ H17.12.10		共同研究費
	Lay Myint	ミャンマー・日本	H17.12.4~ H17.12.10		共同研究費

分野等	氏名	国籍	受入期間	制度等	備考
	Panita Pathipvanich	タイ	H18.3.24~ H18.3.28		大学運営経費
	Paijit Warachit	タイ	H18.3.25~ H18.3.28		大学運営経費
	Pathom Sawan Panyalert	タイ	H18.3.25~ H18.3.28		大学運営経費
生物環境	Dang Duc Anh	ベトナム	H17.6.4~ H17.6.11		JSPS
社会環境	Vu Dinh Thiem	ベトナム	H18.2.14~ H18.3.15		JSPS
疾病生態	Ock - JooKim	韓国	H17.7.24~ H17.7.28		共同研究費
	Youn - MooKoo	韓国	H17.7.24~ H17.7.28		共同研究費
	Xinqing Zhang	中国	H17.7.24~ H17.7.28		米国国立衛生研究所
	Wei Zhu	中国	H17.7.24~ H17.7.28		米国国立衛生研究所
	Xiaomi Zhai	中国	H17.7.24~ H17.7.28		米国国立衛生研究所
	Ren Zong Qui	中国	H17.7.24~ H17.7.28		米国国立衛生研究所
	Pongsri Tippawangkosol	タイ	H18.2.5~ H18.3.19		COE
	Vuthi Quehuongms	ベトナム	H18.3.19~ H18.3.23		大学運営経費
センター	Vu Viet Hung	ベトナム	H17.11.26~ H17.12.23		JSPS
	Nick Mascie-Taylor	イギリス	H17.10.2~ H17.10.8		JICA

9 研究成果の発表状況

9 . 1 研究業績

- 分子構造解析分野 -

- 4675 森田公一：西ナイル熱の現状 . Medical Science Digest Vol.31(14) 548-549, 2005.
- 4676 Paresh Sumatilal Shah, Mariko Tanaka, Afjal Hossain Khana, Edward Gitau Matumbi Mathenge, Isao Fuke, Mitsuo Takagi, Akira Igarashi, Kouichi Morita: Molecular characterization of attenuated Japanese encephalitis live vaccine strain ML-17. Vaccine Vol.24, 402-411, 2006.
- 4677 森田公一：アジアにおける日本脳炎疫学状況 . 小児科 Vol47 , 296 302 , 2006 .
- 4678 Islam M.A., Ahmed M.U., Begum N., Chowdhury N.A., Khan A.F., Parquet M.C, Bipolo S., Inoue S., Hasebe F., Suzuki Y., Morita K.: Molecular Characterization and Clinical Evaluation of Dengue Outbreak in 2002 in Bangladesh. Japanese Journal of Infectious Diseases, Vol.59, 85-91, 2006 .
- 4679 Aoki,C., Hidari,K.I.P.J. , Itonori, S., Yamada, A., Takahashi, N., Kasama, T.,Hasebe, F., Islam, M.A., Hatano, K., Matsuoka, K., Taki, T., Guo, C.-T., Takahashi, T., Sakano, Y., Suzuki, T., Miyamoto, D., Sugita, M., Terunuma, D., Morita, K., and Suzuki, Y.: Identification and Characterization of Carbohydrate Molecules in Mammalian Cells Recognized by Dengue Virus Type 2. Journal of Biochemistry, Vol.139, 607-614, 2006.
- 4680 森田公一：ヘニパウイルス感染症 . 化学療法の領域 Vol.22(7) , 56 60 , 2006 .
- 4681 森田公一：第3章特殊な感染症における検体採取と検査の進め方 (1 SARSが疑われた場合) : in 「ベッドサイドで役立つ微生物検査ガイド」, 河野茂, 平潟洋一編集, 文光社, 2006 .
- 4682 森田公一：西ナイルウイルスの現状と問題点 .成人病と生活習慣病 Vol.36(8) , 910 913 , 2006 .
- 4683 Fuxun Yu, Nor Shahidah Khairullah, Shingo Inoue, Vijayamalar Balasubramaniam, Stella Joan Berendam, Leok Kin Teh, Nik Shamsiah Wan Ibrahim, Sohayati Abdul Rahman, Sharifah Syed Hassan, Futoshi Hasebe, Mangalam Sinniah, and Kouichi Morita. Serodiagnosis Using Recombinant Nipah Virus Nucleocapsid Protein Expressed in *Escherichia coli*. J. Clin. Microbiol. Vol.44 : 3134-3138, 2006.
- 4684 森田公一：西ナイルウイルスとワクチン開発 . 感染炎症免疫 , Vol.36(3) , 242 244 , 2006 .

4685 長谷部 太, 森田公一: デングウイルス研究の最前線 . 医学のあゆみ Vol.218 , p845
848 , 2006 .

- 病原因子機能解析分野 -

4686 Yahiro, K., Shirasaka, D., Tagashira, M., Wada, A., Morinaga, N., Kuroda, F., Choi, O., Inoue, M., Aoyama, N., Ikeda, M., Hirayama, T., Moss, J., and Noda, M.: Inhibitory effects of polyphenols on gastric injury by *Helicobacter pylori* VacA toxin. *Helicobacter*, 10: 231-239, 2005.

4687 Yokoyama, K., Higashi, H., Ishikawa, S., Fujii, Y., Kondo, S., Kato, H., Azuma, T., Wada, A., Hirayama, T., Aburatani, H., Hatakeyama, M.: Functional antagonism between *Helicobacter pylori* CagA and vacuolating toxin VacA in control of the NFAT signaling pathway in gastric epithelial cells. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, 102: 9661-9666, 2005.

4688 Isomoto, H., Mukae, H., Ishimoto, H., Nishi, Y., Wen, C.Y., Wada, A., Ohnita, K., Hirayama, T., Nakazato, M., and Kohno, S.: High concentration of human β -defensin-2 in gastric juice of patients with *Helicobacter pylori* infection. *World J. Gastroenterol.*, 11: 4782-4787, 2005.

4689 De Guzman, B.B., Hisatsune, J., Nakayama, M., Yahiro, K., Wada, A., Yamasaki, E., Nishi, Y., Yamazaki, S., Azuma, T., Ito, Y., Ohtani, M., van der Wijk, T., den Hertog, J., Moss, J., and Hirayama, T.: Cytotoxicity and recognition of receptor-like protein tyrosine phosphatases, RPTP α and RPTP β , by *Helicobacter pylori* m2VacA. *Cell. Microbiol.*, 7: 1285-1293, 2005.

4690 Suzuki, Y., Gbazza, E.C., Imoto, I., James, R.F., Hirayama, T., Wada, A., Horiki, N., Nakamura, M., Inoue, H., Kuroda, M., Ogura, A., Taguchi, Y., Yano, Y., Taguchi, O., Suzuki, K., and Adachi, Y.: Vacuolating cytotoxin A is associated with increased thrombin generation in gastric mucosa. *Helicobacter*, 10: 323-341, 2005.

4691 平山壽哉, 和田昭裕, 中山真彰, 西 義人, 久恒順三: VacAの構造と毒性発現 . 日本臨床63 : 53 57 , 2005 .

4692 平山壽哉, 和田昭裕: *Helicobacter pylori* の病原因子 . 臨床と微生物32 : 109 114 , 2005 .

4693 和田昭裕, アハメド・カムルディン, 大石和徳: モラクセラ属 . 感染と抗菌薬 8 : 106
108 , 2005 .

4694 江原雅彦: コレラワクチン . 日本臨床 63巻 増刊号 5 臨床免疫学(下) : 625 630 ,
2005 .

- 感染細胞修飾機構分野 -

4695 Juarez S., I., Putaporntip C., Jongwutiwes S., Ichinose A., Yanagi T., Kanbara H.: In

Vitro cultivation and electron microscopy characterization of *Trachipleistophora anthropophthera* isolated from the cornea of an AIDS patient. J. Eukaryot. Microbiol., 52(3): 179-190, 2005.

4696 Dachlan Y. P., Yotoprano S., Sutanto B. V., Santoso S. H. B., Widodo A. S., Kusmartisnawati, Sutanto A., Gerudug I. K. K., Takagi M., Tsuda Y., Tanabe K., Kawamoto F., Yoshinaga K., Kanbara H.: Review: Malaria endemic patterns on Lombok and Sumbawa islands, Indonesia. Tropical Medicine and Health 33(2): 105-113, 2005.

4697 神原廣二：Duffy 血液型システムと三日熱マラリア原虫．臨床と微生物，感染と発症をコントロールする因子，細胞表面レセプターと感染の成立32(3)：223 226，2005．

4698 Jongwutiwes S., Putaporn C., Iwasaki T., Ferreira M. U., Kanbara H., Hughes A. L.: Mitochondrial Genome Sequences Support Ancient Population Expansion in *Plasmodium vivax*. Mol. Biol. Evol.22(8): 1733-1739, 2005.

4699 Putaporn C., Jongwutiwes S., Iwasaki T., Kanbara H., Hughes A. L.: Short communication: Ancient common ancestry of the merozoite surface protein 1 of *Plasmodium vivax* as inferred from its homologue in *Plasmodium knowlesi*. Molecular & Biochemical Parasitology 146: 105-108, 2006.

4700 Rivera W. L., Santos S. R., Kanbara H.: Prevalence and genetic diversity of *Entamoeba histolytica* in an institution for the mentally retarded in the Philippines. Parasitol Res 98: 106-110, 2006.

- 寄生行動制御分野 -

4701 Fujimaki Y., Kamachi T., Yanagi T., Caceres A., Maki J. and Aoki Y.: Macrofilaricidal and microfilaricidal effects of *Neurolaena lobata*, a Guatemalan medicinal plant, on *Brugia pahangi*. J. Helminthol., 79, 23-28, 2005.

4702 Gunewardena N.K., Fujimaki Y., Aoki Y., Mishima N., Ezaki T., Uni S. and Kimura E.: Differential effects of diethylcarbamazine, tetracycline and the combination on *Brugia pahangi* adult females in vitro. Parasitology International, 54, 253-259, 2005.

4703 青木克己，北 潔，嘉糠洋陸：分子寄生虫学入門．分子のアプローチが紐解く生命現象 第1回 対談：生命科学としての寄生虫学，細胞工学，24(10)，1100 1104，2005．

4704 青木克己：ケニアにおける住血吸虫症と防圧．住血吸虫症と宮入慶之助 ミヤイリガイ発見から90年 宮入慶之助記念誌編纂委員会（編），九州大学出版会，109 120，2005．

4705 青木克己：住血吸虫症の制圧をめざして．医学のあゆみ別冊，医歯薬出版，133 138，

2006 .

4706 青木克己：アニサキス症 . 今日の治療指針 2006年版 , 188 189 , 2006 .

- 病変発現機序分野 -

4607 Nishimura N., Yoshikawa T., Ozaki T., Sun H., Goshima F., Nishiyama Y., Asano Y., Kurata T., Iwasaki T.: In vitro and in vivo analysis of human herpesvirus-6 U 90 protein expression. *J Med Virol*, 75: 86-92, 2005.

4608 Jutavijittum P., Jiviriyawat Y., Yousukh A., Hayashi S. and Toriyama K.: Evaluation of a hepatitis B vaccination program in Chiang Mai, Thailand. *Southeast Asian J Trop Med Public Health*, 36: 207-212, 2005.

4609 Miyachi S., Lu X., Inoue S., Iwasaki T., Koike S., Nambu A., Takada M.: Organization of multisynaptic inputs from prefrontal cortex to primary motor cortex as revealed by retrograde transneuronal transport of rabies virus. *J Neuroscience*, 25: 2547-56, 2005.

4610 Ida-Hosonuma M., Iwasaki T., Yoshikawa T., Nagata N., Sato Y., Sata T., Yoneyama M., Fujita T., Taya C., Yonekawa H., Koike S.: The alpha/beta interferon response controls tissue tropism and pathogenicity of poliovirus. *J Virol*, 79: 4460-9, 2005.

4711 Arita M., Shimizu H., Nagata N., Ami Y., Suzaki Y., Sata T., Iwasaki T., Miyamura T.: Temperature sensitive mutants of enterovirus 71 show attenuation in cynomolgus monkeys: Implication of temperature sensitivity as a determinant of attenuation. *J Gen Virol*, 86: 1391-401, 2005.

4712 Jongwutiwes S., Putapornitip C., Iwasaki T., Ferreira MU., Kanbara H., Hughes AL.:
(4698) Mitochondrial genome sequences support ancient population expansion in *Plasmodium vivax*. *Mol Biol Evol*, 22: 1733-9, 2005.

4713 Maeda K., West K., Hayasaka D., Ennis FA., Terajima M.: Recombinant adenovirus vector vaccine induces stronger cytotoxic T-cell responses than recombinant vaccinia virus vector, plasmid DNA, or a combination of these. *Viral Immunol*, 18: 657-67, 2005.

4714 Obara M., Yoshii K., Kawata T., Hayasaka D., Goto A., Mizutani T., Kariwa H., Takashima I.: Development of an enzyme-linked immunosorbent assay for serological diagnosis of tick-borne encephalitis using subviral particles. *J Virol Methods*, 134: 55-60, 2006.

4715 Ichikawa T., Nakao K., Hamasaki K., Ohkubo K., Toriyama K. and Eguchi K.: An autopsy case of acute pancreatitis with a high serum IgG 4 complicated by amyloidosis and rheumatoid arthritis. *World J Gastroenterol*, 11: 2032-2034, 2005 .

4716 Asada Y., Isosmoto H., Akama I., Nomura N., Wen C., Nakao H., Murata I., Toriyama K. and Kohno S.: Metastatic low-grade endometrial stromal sarcoma of the sigmoid colon

three years after hysterectomy. *World J Gastroenterol*, 11: 2367-2369, 2005.

- 4717 Takeshita S., Nakamura H., Kawakami A., Fukushima T., Gotoh T., Ichikawa T., Tsujino A., Ida H., Toriyama K., Hayashi Tomayoshi. and Eguchi K.: Hepatitis B-related Polyarteritis Nodosa Presenting Necrotizing Vasculitis in the Hepatobiliary System Successfully Treated with Lamivudine, Plasmapheresis and Glucocorticoid. *Internal Medicine*, 45: 145-149, 2006.
- 4718 高島郁夫，早坂大輔，後藤明子，好井健太郎，苅和宏明：日本と極東ロシアのダニ媒介性脳炎ウイルスの系統解析と病原性．*ウイルス*，55：35-44，2005．

- 感染症予防治療分野 -

- 4719 Kantor. R., Katzenstein. D.A., Efron. B., Carvalho. A.P., Wynhoven. B., Cane. P., Clarke. J., Sirivichayakul. S., Soares. M.A., Snoeck. J., Pillay. C., Rudich. H., Rodrigues. R., Holguin. A., Ariyoshi. K., Bouzas. M.B., Cahn. P., Sugiura. W., Soriano. V., Brigido. L.F., Grossman. Z., Morris. L., Vandamme. A.M., Tanuri. A., Phanuphak. P., Weber. J.N., Pillay. D., Harrigan. P.R., Camacho. R., Schapiro. J.M, and Shafer. R.W.: Impact of HIV-1 subtype and antiretroviral therapy on protease and reverse transcriptase genotype: results of a global collaboration. *Plos. Med*, 2(4)e 112, pp.325-337, 2005.
- 4720 Watanabe. H., Kaji. C., Anh. D.D., Huong. P.L.T., Anh. N.T.H., Huong. V.T., Phuong. H.V.M., Thi. N.T., Suu. P.T., Nguyet. N.T.T., Rusizoka. O.S., Watanabe. K, and Nagatake. T, and Oishi. K.: Comparative molecular analysis of *Haemophilus influenzae* isolates from young children with acute lower respiratory tract infections and meningitis in Hanoi, Vietnam. *J. Clin. Microbiol*, 43(5), pp.2474-2476, 2005.
- 4721 Jurcisek. J., Greiner. L., Watanabe. H., Zaleski. A., Apicella. M.A, and Bakaletz. L. O.: Role of sialic acid and complex carbohydrate biosynthesis in biofilm formation by non-typeable *Haemophilus influenzae* in the chinchilla middle ear. *Infect. Immun*, 73(6), pp.3210-3218, 2005.
- 4722 Watanabe. H., Hoshino. K., Sugita. R., Asoh. N., Guio. H., Qin. L., Kaji. C., Watanabe. K., Oishi. K, and Nagatake. T.: Molecular analysis of intrafamilial transmission of *Moraxella catarrhalis*. *Int. J. Med. Microbiol*, 295(3), pp.187-191, 2005.
- 4723 Rojanawiwat. A., Miura. T., Thaisri. H., Pathipvanich. P., Umnajsirisuk. S., Koibuchi. T., Vongsheree. S., Iwamoto. A., Ariyoshi. K, and Sawanpanyalert. P.: Frequent detection of Epstein-Barr virus and cytomegalovirus but not JC virus DNA in cerebrospinal fluid samples from human immunodeficiency virus-infected patients in northern Thailand. *J. Clin. Microbiol*. 43(7), pp.3484-3486, 2005.

- 4724 Carlos. C.C., Oishi. K., Cinco. M.T.D.D., Mapua. C.A., Inoue. S., Cruz. D.J.M., Panchito. M.A.M., Tanig. C.Z., Matias. R.R.M., Morita. K., Natividad. F.F., Igarashi. A, and Nagatake. T.: Comparison of clinical features and hematologic abnormalities between dengue fever and dengue hemorrhagic fever among children in the Philippines. *Am. J. Trop. Med. Hyg.*, 73(2), pp.435-440, 2005.
- 4725 Wichukchinda. N., Shiino. T., Srisawat. J., Rojanawiwat. A., Pathipvanich. P., Sawanpanyalert. P., Ariyoshi. K, and Auwanit. W.: Heterosexual transmission of novel CRF 01_AE and subtype B recombinant forms of HIV type 1 in northern Thailand. *Aids. Res. Hum. Retrovir*, 21(8), pp.734-738, 2005.
- 4726 Wichukchinda. N., Nakayama. E. E., Rojanawiwat. A., Pathipvanich. P., Auwanit. W., Vongesheree. S., Ariyoshi. K., Sawanpanyalert. P, and Shioda. T.: Protective effects of *IL4-589 T* and *RANTES-28 G* on HIV-1 disease progression in infected Thai females. *AIDS*, 20(2), pp.189-196, 2005.
- 4727 Xiao. Y.Q., Freire-de-Lima. C.G., Janssen. W.J., Morimoto. K., Lyu. D., Bratton. D.L, and Henson. P.M.: Oxidants selectively reverse TGF- β suppression of proinflammatory mediator production. *J. Immunol*, 176(2), pp.1209-1217, 2006.
- 4728 Masaki. H., Nagatake. T., Asoh. N., Yoshimine. H., Watanabe. K., Watanabe. H., Oishi. K., Rikitomi. N, and Matsumoto. K.: Significant reduction of nosocomial pneumonia after introduction of disinfection of upper airways using providone-iodine in geriatric wards. *Dermatology*, 212(suppl 1), pp.98-102, 2006.
- 4729 真崎宏則,麻生憲史,渡邊 浩,永武 毅:MRSA 感染症 .Year note 2006, pp.1225-1234, 2005.
- 4730 大石和徳:第56回日本気管食道科学会総会ならびに学術講演会 .特別講演会 新興呼吸器ウイルス感染症とその対応 .日本気管食道科学会会報 , 56(2) , pp 63 71 , 2005 .
- 4731 加地千春,渡邊浩:*Haemophilus influenzae* とバイオフィルム産生 ~ 感染症難治化とバイオフィルム疾患の解明を目指して ~ . 化学療法の領域 , 21(6) , pp 855 857 , 2005 .
- 4732 陳 蒙,大石和徳:Ⅷ免疫学的検査 E .非ウイルス性感染症関連検査 (抗原および抗体を含む) 肺炎球菌抗原検出法 .日本臨牀 , 63 (増刊 7) , pp .159 162 , 2005 .
- 4733 大石和徳:肺炎球菌ワクチン 5年後の再接種の是非 .呼吸器科 , 8(1) , pp 68 72 , 2005 .
- 4734 永武 毅,秋山盛登司,高橋 淳,隆杉正和,真崎宏則,田中宏史,川上健司,宇都宮嘉明,土橋佳子,星野和彦,麻生憲史,池田秀樹,鬼塚正三郎,小林 忍,渡邊 浩他183名:下気道感染症に対する ceftazidime を対象とする cefozopran の市販後臨床

試験 . 日本化学療法学会雑誌 , 53⁽⁹⁾ , pp 526 556 , 2005 .

- 4735 **大石和徳** : Severe acute respiratory syndrome (SARS). 小児科診療 , 68⁽¹¹⁾ , pp .2261 2266 , 2005
- 4736 **大石和徳 , 吉嶺裕之** : I . 日常診療においてよくみられる肺炎 1 . 細菌性肺炎 (肺炎球菌性肺炎を中心に) . 日本内科学会雑誌 , 94⁽¹¹⁾ , pp 2256 2260 , 2005 .
- 4737 **大石和徳** : 肺炎球菌性肺炎とその対策 . 臨牀と研究 , 82⁽¹²⁾ , pp .1983 1986 , 2005 .
- 4738 **出川 聡 , 松本慶蔵** : インフルエンザからの治療 : 臨牀の立場から ~ 2004 / 2005年シーズンにおける抗インフルエンザ薬の使用を中心に ~ . 医薬ジャーナル , 41⁽¹²⁾ , pp 2917 2924 , 2005 .
- 4739 **加地千春 , 渡邊 浩** : 災害と新興感染症の危険性 . 治療学 , 40⁽²⁾ , pp .157 160 , 2006 .
- 4740 **大石和徳** : WHO 主導の国際感染症危機管理 . 感染制御 , 1⁽³⁾ , pp 295 297 , 2005 .
- 4741 **渡邊 浩** : 百日咳 . Infectious diseases report2005 , No29 , 2005 .

- 生物環境分野 -

- 4742 Kawada, H., Takemura, S., Arikawa, K. & Takagi, M.: Comparative Study on Nocturnal Behavior of *Aedes aegypti* and *Aedes albopictus*. J. Med. Entomol. 42(3): 312-318, 2005.
- 4743 Tuno, N., Okeka, W., Minakawa, N., Takagi, M. & Yan, G.: Survivorship of *Anopheles gambiae* sensu stricto (Diptera: Culicidae) Larvae in Western Kenya Highland Forest. J. Med. Entomol. 42(3): 270-277, 2005.
- 4744 Kawada, H., Yen, N.T., Hoa, N.T., Sang, T.M., Van, N., Takagi, M.: Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin impregnated plastic strips against mosquitoes in Hai Phong City, Vietnam. Am.J.Trop.Med. Hyg. 73(2): 350-353, 2005.
- 4745 Wang, S.-Q., Phong, T.V., Tuno, N., Kawada, H. & Takagi, M.: Sensitivity of the larvivo-rous copepod species, *Mesocyclops pehpeiensis* and *Megacyclops viridis*, to the insect growth regulator, pyriproxyfen. J.Am.Mosq.Contr.Assoc. 21(4): 483-488, 2005.
- 4746 Somboon, P., Thongwat, D., Somwang, P., Teng, H.J., Tsuda, Y. & Takagi, M: The specific status of *Anopheles minimus* S.L. collected from Taiwan. Southeast Asian J. Trop. Med. Pub. Hlt. 36(3): 605-608, 2005.
- 4747 Kawada, H., Tatsuta, H., Arikawa, K. & Takagi, M.: Comparative study on the relationship between photoperiodic host-seeking behavioral patterns and the eye parameters of mosquitoes. Journal of Insect Physiology. 52: 67-75, 2006.

- 社会環境分野 -

- 4748 **黒木貴一 , 磯 望 , 後藤健介 , 張 麻衣子** : 2003年九州豪雨による浸水状況から見た福岡市博多駅周辺の土地条件 . 季刊地理学 , 第57巻 , 第 2 号 , 東北地理学会 , pp .63

78, 2005.

- 4749 磯 望, 後藤健介, 黒木貴一, 陶野郁雄, 太田陽子, 中村広幸, 黒田圭介, 西木真織, 本末順子: 現地調査から見た福岡県西方沖地震被害の特徴. 西南学院大学人間科学論集, 第1巻, 第1号, pp 61-103, 2005.
- 4750 Qin L, Yoda T, Suzuki C, Yamamoto T, Cai G, Rakue Y, Mizota T: Combating HIV/AIDS in Mainland China: An Epidemiological Review of Prevention and Control Measures. Southeast Asian Journal of Tropical Medicine and Public Health 36(6): 1479-1486, 2005.
- 4751 Suzuki C, Mizota T, Awazawa T, Yamamoto T, Makunike B, Rakue Y: Effects of a school-based education program for schistosomiasis control. Southeast Asian Journal of Tropical Medicine Public Health. 2005 Nov; 36(6): 1388-1493, 2005.
- 4752 Yoda T, Rakue Y, Mizota T, Looaresowan S: Clinical trial of artesunate against plasmodium vivax malaria in a Bangkok Hospital. The Journal of Tokyo Medical University. 63(6): 480-484, 2005.
- 4753 河口明日香, 輿水達司, 青木智彦, 後藤健介, 内山 高, 石垣武久: 日本列島に飛来する黄砂の地域特性. 第15回環境地質学会シンポジウム論文集, pp 153-156, 2005年.
- 4754 谷村 晋, 坂野晶司, 山本秀樹, 水嶋春朔, 石井 明, 溝田 勉: 国際医療協力活動に従事する医師の確保をめぐる英国の取り組み. Journal of International Health 20(2): 38-43, 2005.
- 4755 磯 望, 後藤健介, 黒木貴一, 大平明夫: 台風14号による大淀川下流域の氾濫被害 - 衛星画像と現地調査による分析 -. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集, 第30号, pp 25-28, 2006.
- 4756 田中芳樹, 後藤健介, 後藤恵之輔: 衛星リモートセンシングを用いた台風9918号による熊本災害の調査解析. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集, 第30号, pp 73-76, 2006.
- 4757 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: アンケートとGISによる福岡県西方沖地震の実態調査の試み. 自然災害研究協議会西部地区部会報・研究論文集, 第30号, pp 127-130, 2006.
- 4758 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: GISによる2万5千分の1地形図からの詳細土地利用データ作成とその利用. 福岡教育大学紀要, 第55号, pp 39-48, 2006.
- 4759 依田健志, 樂得康之, 溝田 勉: タイ国パンガー県におけるスマトラ沖地震での津波による健康被害. 東京医科大学雑誌64(2): 181-182, Mar. 2006.

- 疾病生態分野 -

- 4760 Ubalee R, Tsukahara T, Kikuchi M, Lum K J, Dzodzomenyo M, Kaneko A and

- Hirayama K.: Associations between frequencies of a susceptible TNF- α promoter allele and protective α -thalassaemias and malaria parasite incidence in Vanuatu. *Tropical Medicine and International Health* 10(6): 544-549, June, 2005.
- 4761 Dzodzomenyo M, Kaneko A, Kikuchi M, Ubalee R, Osawa H, Tsukahara T, Tanihata T, Perlmann H, Hirayama K and Kobayakawa T.: IL4 polymorphisms and IgE levels on malaria-endemic islands in Vanuatu. *J Tokyo Wom Med Univ*, 75(3/4): 82-89, 2005 .
- 4762 Takeda M, Kikuchi M, Ubalee R, Na-Bangchang K, Ruangweerayu R., Shibahara S, Imai S and Hirayama K.: Microsatellite Polymorphism in the Heme Oxygenase-1 Gene Promoter is Associated with Susceptibility to Cerebral Malaria in Myanmar. *Jpn J of Infect Dis.* 58: 268-271, 2005.
- 4763 Zhang M, Obata C, Hisaeda H, Ishii K, Murata S, Chiba T, Tanaka K, Li Y, Furue M, Chou B, Imai T, Duan X, Himeno K.: A novel DNA vaccine based on ubiquitin-proteasome pathway targeting 'self'-antigens expressed in melanoma/melanocyte. *Gene Ther* 12: 1049-57, 2005.
- 4764 Atsunobu Takeda, Shinjiro Hamano, Hiroshi Shiraishi, Takeru Yoshimura, Hisanobu Ogata, Kazunari Ishii, Tatsuro Ishibashi, Akihiko Yoshimura and Hiroki Yoshida.: WSX-1 over-expression in CD 4+T cells leads to hyperproliferation and cytokine hyperproduction in response to TCR stimulation. *Int Immunology* 17(7): 889-97, 2005
- 4765 Hernandez-Becerril, N., Mejia, A.M., Ballinas-Verdugo, M.A., Garza-Murillo, V., Manilla-Toquero, E., Lopez, R., Hirayama, K., Trevethan, S., Cardenas, M., Reyes, P. A., Monteon, V.M.: Blood transfusion and iatrogenic risks in Mexico City. *Anti-Trypanosoma cruzi* seroprevalence in 43,048 blood donors, evaluation of parasitemia, and electrocardiogram findings in seropositive. *Mem Inst Oswaldo Cruz* 100(2): 111-6, 2005.
- 4766 Fu Shi Quan, Jeong Beom Lee, Jun Sang Bae, Nobu Ohwatari, Young Ki Min, Hua Mo Yang.: Resistance to reinfection in rats induced by irradiated metacercariae of *Clonorchis sinensis*. *Mem Inst Oswaldo Cruz*, Rio de Janeiro, 100(5): 549-554, 2005.
- 4767 Yoshiura KI, Kinoshita A, Ishida T, Ninokata A, Ishikawa T, Kaname T, Bannai M, Tokunaga K, Sonoda S, Komaki R, Ihara M, Saenko VA, Alipov GK, Sekine I, Komatsu K, Takahashi H, Nakashima M, Sosonkina N, Mapendano CK, Ghadami M, Nomura M, Liang DS, Miwa N, Kim DK, Garidkhuu A, Natsume N, Ohta T, Tomita H, Kaneko A, Kikuchi M, Russomando G, Hirayama K, Ishibashi M, Takahashi A, Saitou N, Murray JC, Saito S, Nakamura Y, Niikawa N.: A SNP in the *ABCC 11* gene is the determinant of human earwax type *Nat Genet*, 38(3): 324-30, 2006.

- 4768 Sakihama N, Ohmae H, Bakote'e B, Kawabata M, Hirayama K, Tanabe K.: Limited allelic diversity of *Plasmodium falciparum* merozoite surface protein 1 gene from populations in the Solomon Islands. *Am J Trop Med Hyg*; 74(1): 31-40, 2006.
- 4769 Kenji Hirayama: Genetic susceptibility to parasitic infectious diseases in humans. *Proceed. Forum Cheju 10*, November 18-20 2004, Ed by: Yoshiki Aoki(Japan), pp.64-69, 2005.
- 4770 平山謙二：免疫系における HLA の役割．平成17年度日本組織適合性学会・認定 HLA 検査技術者講習会テキスト 編集：日本組織適合性学会・組織適合性技術者認定制度委員会・教育部会，pp 20 29，2005．
- 4771 大渡 伸，Klaus Pleschka：冬眠と体温調節．体温のバイオロジー：体温はなぜ37なのかなのか，編集：山崎道明，pp 26 28，メディカル・サイエンス・インターナショナル，2005．
- 4772 平山謙二：マラリア重症化遺伝子の解析．アステラ製薬「感染症」，35(6)，215 219，2005．
- 4773 平山謙二：住血吸虫感染と体質．住血吸虫症と宮入慶之助 - ミヤイリガイ発見から90年 - ．pp .103 108 2005 宮入敬之助記念誌編集委員会「編」，(財)九州大学出版会
- 4774 平山謙二：シャーガス病 - 中南米の厄病神．別冊・医学のあゆみ 現代寄生虫病事情．pp .7 12，医歯薬出版，2006．

- 熱帯感染症研究センター -

- 4775 Kikawada, T., Minakawa N., Watanabe M., and Okuda T.: Factors inducing successful anhydrobiosis in the African chironomid *Polypedilum vanderplanki*: significance of the larval tubular nest. *Integrative and Comparative Biology*. 45: 710-714, 2005.
- 4776 Minakawa N. and Gara R. I.: Spatial and temporal distribution of coho salmon carcasses in a stream in the Pacific Northwest, USA. *Hydrobiologia*. 539: 163-166, 2005.
- 4777 Minakawa N. and Kraft G. F.: Homing behaviour of juvenile coho salmon within an off-channel habitat. *Ecology of Freshwater Fish*. 14: 197-201, 2005.
- 4778 Minakawa N., Sonye G. and Yan G.: Relationships between occurrence of *Anopheles gambiae* s.l. (Diptera: Culicidae) and size and stability of larval habitats. *Journal of Medical Entomology*. 42: 295-300, 2005.
- 4779 Minakawa N., Munga S., Atieli F., Mushinzimana E., Zhou G., Githeko A. and Yan G.: Spatial distribution of anopheline larval habitats in western Kenyan highlands: effects of land cover types and topography. *American Journal of Tropical Medicine and Hygiene*. 73: 157-165, 2005.
- 4780 Munga S., Minakawa N., Zhou G., Barrack O. J., Githeko A. K. and Yan G.: Oviposi-

- tion site preference and egg hatchability of *Anopheles gambiae*: effects of land cover types. Journal of Medical Entomology 42: 993-997, 2005.
- 4781 Munyekenye O. G., Githeko A. K., Zhou G., Mushinzimana E., Minakawa N. and Guiyun Y.: *Plasmodium falciparum* spatial analysis, ons in western Kenya Highlands. Emerging Infectious Diseases 10: 1571-1577, 2005.
- 4782 Tomikawa K., Ito T., Minakawa N. and Mawatari S. F.: Two new species of *Ochridacyclops* (Kiefer, 1937) (Copepoda, Cyclopoida) from Kenya and Nepal. Zoological Science 22: 477-487, 2005.
- 4743 Tuno, N., Okeka W., Minakawa N., Takagi M. and Yan G.: Survivorship of *Anopheles gambiae* sensu stricto (Diptera: Culicidae) larvae in Western Kenya Highland Forest. Journal of Medical Entomology 42: 270-277, 2005.
- 4783 Zhou G., Minakawa N., Githeko A. K. and Yan G.: Climate variability and malaria epidemics in the highlands of East Africa. Trends in Parasitology 21: 54-56, 2005.
- 4784 Horio, M., Masuda, K., Miura, S. and Takeuchi, T.: Triatomine bugs in the State of Santa Cruz, Bolivia, and northeastern portions of Brazil, with special reference to their infection rate with *Trypanosoma cruzi*. Jpn. J. Sanit. Zool. 56(2) 86-91, 2005.
- 4785 Minamoto K, Mascie-Taylor CG, Moji K, Karim E, Rahman M: Arsenic-contaminated water and extent of acute childhood malnutrition (wasting) in rural bangladesh. Environ Sci. 2 (5): 283-92, 2005.
- 4786 Morita M, Takamura N, Kusano Y, Abe Y, Moji K, Takemoto T, Aoyagi K: Relationship between falls and physical performance measures among community-dwelling elderly women in Japan. Aging Clin Exp Res. Jun; 17(3): 211-216. 2005.
- 4787 安高雄治・金田英子・木須友子・門司和彦・嶋田雅暁：住血吸虫症と感染行動．宮入慶之助記念誌編纂委員会（編）「住血吸虫症と宮入慶之助」九州大学出版会．121 130．2005．
- 4788 國井 修，門司和彦：緊急医療援助の現場から．保健の科学47(10)706 711，2005．
- 4789 門司和彦：文化と疾病の狭間 - ケニアで風土病を学ぶ - ．医学のあゆみ212(7)709 714，2005．
- 4790 嶋田雅暁：貧乏神としての寄生虫 - DALY分析，医学のあゆみ212(8)，773 777，2005．
- 4791 國井 修：持続可能な開発と健康 安全医学 3：25 28，2005．
- 4792 門司和彦，岩崎琢也：BSE：隠された共食い．科学75(1)：52 55，2005．
- 4793 松山章子：女性の教育が妊婦健診受診行動に与える影響 - 医療人類学的研究 - ，国際開発研究 14(2)15 31，2005．

- 4794 **松山章子**：医療人類学。「国際保健医療学」日本国際保健医療学会編 第二版，杏林書院，2005。
- 4795 Okamoto N, Saruki N, Mikami H, Yamashita K, Maruyama Y, Yano T, Imamura Y, Kaneko S, Tanaka H.: 5-year survival rates for primary cancer sites at cancer-treatment-oriented hospitals in Japan. *Asian Pac J Cancer Prev* 7(1): 46-50, 2006 .
- 4796 Kinoshita H, Nakane Y, Nakane H, Ishizaki Y, Honda S, Ohta Y, Ozawa H.: Nagasaki Schizophrenia Study: Influence of the duration of untreated psychosis on long-term outcome. *Acta Med Nagasaki* 50: 17-22, 2005.
- 4797 Yokota K, Mine M, Honda S, Tomonaga M.: Cancer mortality in Nagasaki atomic bomb survivors with epilation. *Acta Med Nagasaki* 50: 73-76, 2005.
- 4798 Tsuchiya T, Higami Y, Komatsu T, Tanaka K, Honda S, Yamaza H, Chiba T, Ayabe H, Shimokawa I.: Acute stress response in calorie-restricted rats to lipopolysaccharide-induced inflammation. *Mech Ageing Dev* 126: 568-579, 2005.
- 4799 Morishita M, Ohtsuru A, Hayashi T, Isomoto I, Itoyanagi N, Maeda S, Honda S, Yano H, Uga T, Nagayasu T, Kanematsu T, Yamashita S.: Clinical significance of categorisation of mammographic density for breast cancer prognosis. *Int J Oncol* 26: 1307-1312, 2005.
- 4800 Fukushima T, Miyazaki Y, Honda S, Kawano F, Moriuchi Y, Masuda M, Tanosaki R, Utsunomiya A, Uike N, Yoshida S, Okamura J, Tomonaga M.: Allogeneic hematopoietic stem cell transplantation provides sustained long-term survival for patients with adult T-cell leukemia/lymphoma. *Leukemia* 19: 829-834, 2005.
- 4801 Miyawaki S, Sakamaki H, Ohtake S, Emi N, Yagasaki F, Mitani K, Matsuda S, Kishimoto Y, Miyazaki Y, Asou N, Matsushima T, Takahashi M, Ogawa Y, Honda S, Ohno R, for the Japan Adult Leukemia Study Group.: A randomized, postremission comparison of four courses of standard-dose consolidation therapy without maintenance therapy versus three courses of standard-dose consolidation with maintenance therapy in adults with acute myeloid leukemia, the Japan Adult Leukemia Study Group AML97 study. *Cancer* 104: 2726-2734, 2005.
- 4802 **太田保之，荒木憲一，本田純久**：雲仙・普賢岳噴火災害被災住民の長期経過後の精神的問題。精神医学 48：241-246，2006。
- 4803 **竹中伸一**：特集感染症から命を守る - 世界エイズデーにちなんで - HIV / エイズ予防のための啓発活動 JICAクロスロード 12月号，20-31，2005。
- 4804 Tomoko Kisu, Kiyoshi Shiratori, Francis Callyst, Yuji Ataka, Eiko Kaneda, Elisonguo Ngomuo, Richard J. Shayo and Masaaki Shimada: The effect of medication on ques-

tionnaire analysis of children with *Schistosoma mansoni* infection in Tanzania. Tropical Medicine and Health, Vol.33(3), 143-152, 2005.

- 共同研究室 -

4805 一ノ瀬昭豊, アハメド カムルディン, 大石和憲, 和泉伸一, 和田昭裕: 細菌とウイルス電子顕微鏡観察のために新手技. 医学生物学電子顕微鏡技術学会会誌, Vol.19, No. 2, 34-37, 2005.

4806 Gulcan Akgul., Ali Erturk., Mustafa Turkoz., Tolga Turan., Akitoyo Ichinose., Tsuyoshi Nagatake., and Kamruddin Ahmed.: Role of lipooligosaccharide in the Attachment of *Moraxella catarrhalis* to human pharyngeal epithelial cells. Microbiol Immunol. 49 (10): 931-935, 2005.

- 感染細胞修飾機構分野 - (追加分)

4807 Nakazawa S.: Plasmodium berghei NK 65: Studies on the effect of treatment duration and inoculum size on recrudescence. Experimental Parasitology 111: 59-63, 2005.

4808 中澤秀介: プーチェン村のマラリアがなくなる道筋. 熱帯37: 299-306, 2005.

9.2 学会発表演題

- 1) 平山謙二：倫理委員会と PGx 治療．フォーラム「ファーマコゲノミクス治療の問題と解決法」，東京，2005年2月21日．(平成16年度分)
- 2) 青木克己，三浦光政，渡部幹次，藤巻康教：住血吸虫卵の孵化：卵殻の破壊はミラシジウムの運動によるか，卵殻の膨化によるか？第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日．
- 3) 草場照代，藤巻康教，青木克己：*Brugia pahangi* 感染幼虫の血清への走化性．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日．
- 4) Ratawan Ubalee, Noor Azian Md Yursuf, 菊池三穂子, Lookman Hakim Sulaiman, 平山謙二：熱帯熱マラリア原虫由来合成ペプチドを用いた HLA クラス 1 HLA - B * 1513 拘束性 T 細胞エピトープの解析．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日．(第74回日本寄生虫学会大会プログラム・抄録集，p80．)
- 5) 曾根敏男，大城 聡，松下 祥，平山謙二：*Trypanosoma cruzi* CLBrener 株由来タンパク質のプロテオーム解析．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日．(第74回日本寄生虫学会大会プログラム・抄録集，p87．)
- 6) Honggen Chen, Shuying Xie, Jun Ge, Dan Dan Lin, 菊池三穂子, 平山謙二：日本住血吸虫の感染負荷量を決定する循環抗原測定系の開発．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日（第74回日本寄生虫学会大会プログラム・抄録集，p94．)
- 7) 平山謙二，渡部幹次，菊池三穂子，Ekhlis Hamed，奈良武司，新川 武，石井一成，千馬正敬，岩崎琢也，青木克己：ミニブタモデルを用いた日本住血吸虫ワクチンの開発．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日，(第74回日本寄生虫学会大会プログラム・抄録集，p96．)
- 8) 肥後廣夫，三浦左千夫，吾妻 健，石上盛敏，三森龍之，平山謙二，竹内 勤，多田 功，姫野國祐：*Trypanosoma cruzi* の主要系統間での遺伝子交換について．第74回日本寄生虫学会大会，米子（鳥取），2005年4月8 - 9日（第74回日本寄生虫学会大会プログラム・抄録集，p97．)
- 9) 陳 蒙，古本朗嗣，大石和徳：慢性呼吸器疾患患者における肺炎球菌ワクチン接種後の血清中特異 IgG 抗体応答と経時的推移に関する研究．第79回日本感染症学会総会，名古屋市，2005年4月14 - 15日．P121
- 10) 吉嶺裕之，渡邊 浩，渡邊貴和雄，大石和徳：本邦における呼吸器病原性肺炎球菌の分子疫学的検討．第79回日本感染症学会総会，名古屋市，2005年4月14 - 15日．P124
- 11) 齊藤麻理子，本田章子，大石和徳：デングウイルス二次感染症における液性因子の検討．

第79回日本感染症学会総会，名古屋市，2005年4月14 - 15日．P147

- 12) 土橋佳子，斉藤若菜，渡邊 浩，大石和徳：気管支動脈造影を施行した咯血症例16例の検討．第45回日本呼吸器学会学術講演会，千葉市，2005年4月14 - 16日．P162
- 13) 本田章子，中間貴弘，原田義高，石田正之，黒木麗喜，天野秀明，渡邊 浩，大石和徳：当科で経験した肺気管支病変を合併したシューグレン症候群の臨床的検討．第45回日本呼吸器学会学術講演会，千葉市，2005年4月14 - 16日．P177
- 14) 平山謙二：感染症の感受性遺伝子．第48回春季日本歯周病学会学術大会・若手研究者の集い 長崎，2005年4月21日．
- 15) 磯 望，黒木貴一，後藤健介，黒田圭介：福岡県西方沖地震災害について．日本地形学連合2005年春季大会，福岡，2005年5月14 - 15日．
- 16) 黒木貴一，磯 望，後藤健介，宗 建郎：衛星データとGISによる雲仙火砕流被災地およびその周辺の環境変化解析．日本地形学連合2005年春季大会，福岡，2005年5月14 - 15日．
- 17) 一ノ瀬昭豊，和田昭裕：細菌，ウイルスにおいてPTA及びモリブデン酸アンモニウムを用いたネガティブ染色の開発と染色像の比較 - 細菌編 - ．第21回医学生物学電子顕微鏡技術学会学術講演会・ワークショップ 酢酸ウラニル染色に代わる電子染色法，岐阜，2005年5月21 - 22日．
- 18) Afjal Hossain Khan，福家 功，石川豊数，井上真吾，森田公一：西ナイルウイルスに対する弱毒生ワクチン開発の試み．第40回日本脳炎ウイルス生態学研究会 箱根（神奈川県），2005年5月26 - 27日．
- 19) 渡邊貴和雄，吉嶺裕之，渡邊 浩，大石和徳：呼吸器系検体より分離された *Branha, ella catarrhalis* の薬剤感受性分布．第53回日本化学療法学会総会，東京，2005年5月26 - 27日．P130
- 20) 黒木貴一，張麻衣子，磯 望，後藤健介：実体鏡を用いた2003年九州豪雨時の御笠川の流速測定 2005年度東北地理学会春季学術大会，宮城，2005年5月28日．P194
- 21) 鳥山 寛，千馬正敬：ケニア内陸部における膀胱癌の特徴．第42回日本アフリカ学会学術大会，東京，2005年5月28 - 29日．
- 22) 高木正洋，砂原俊彦，前川芳秀：スマトラ沖津波被災地における被災後の感染症媒介蚊発生状況の粗調査報告．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1 - 3日．
- 23) 川田 均，島袋 梢，砂原俊彦，前川芳秀，當間孝子，宮城一郎，高木正洋：昼行性および夜行性蚊数種における eye parameter の計測（2）．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1 - 3日．
- 24) 川田 均，島袋 梢，竹村伸也，蟻川謙太郎，高木正洋：ネットアイシマカとヒトスジシ

- マカの夜間行動の違いに関する研究．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1 - 3日．
- 25) 川田 均，前川芳秀，高木正洋：メトフルトリンを含有した常温揮散製剤の蚊に対する空間忌避効果に関する検討（3）インドネシア・ロンボク島のブルガにおける樹脂製剤の残効性試験．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1 - 3日．
- 26) 川田 均，Nguyen Thi Yen, Nguyen Thuy Hoa, Truong Minh Sang, Nguyen Van Dan & 高木正洋：メトフルトリンを含有した常温揮散製剤の蚊に対する空間忌避効果に関する検討（4）ベトナム・ハイフォン市の民家におけるネツタイシマカを対象とした樹脂製剤の残効性試験．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1 - 3日．
- 27) 津田良夫，比嘉由紀子，川田 均，高木正洋，小林睦夫：アカイエカとチカイエカの地上における生態の比較調査法．第57回日本衛生動物学会大会，札幌，2005年6月1日 - 3日．
- 28) 市川辰樹，濱崎圭輔，鳥山 寛，古河隆二，西村大介，田浦直太，後藤貴史，福田麻里子，川下 浩，本吉康英，柴田英貴，江口勝美：生活習慣病からみたNASH．第41回日本肝臓学会，大阪，2005年6月16 - 17日．
- 29) 平山謙二：ベトナムのデング出血熱とHLA-DRB1遺伝子アレルとの相関．第3回長崎免疫研究会，長崎，2005年6月17日．
- 30) 倉本剛史，石田正之，寺田真由美，池田秀樹，土橋佳子，吉嶺裕之，麻生憲史，大石和徳，有吉紅也：当科における最近のマラリア症例の検討 - 血小板減少とPAIgGを中心として - ．第16回日本臨床寄生虫学会，東京，2005年6月18日．P20
- 31) 山崎栄樹，和田昭裕，熊取厚志，中川一路，船尾純子，中山真彰，久恒順三，西 義人，平山壽哉：H. pylori が産生する空胞化毒素 VacA の apoptosis 誘発機序．第52回毒素シンポジウム，仙台，2005年7月7 - 9日．
- 32) Maria del Carmen Parquet, Phan Thi Nga, Manmohan Parida, Nguyen Thanh Thuy, Pham Thi Suu, Afjal Hossain Khan, Leonora T. D. Salda, Fuxun Yu, Shingo Inoue, Takashi Ito, Kouichi Morita: Novel Arbovirus in Vietnam: Isolation, Identification and Molecular Characterization．第42回日本ウイルス学会九州支部総会・沖縄，2005年7月8 - 9日．
- 33) Afjal Hossain Khan，福家 功，石川豊数，井上真吾，森田公一：西ナイルウイルスに対する弱毒生ワクチン開発の試み．第42回日本ウイルス学会九州支部総会・沖縄，2005年7月8 - 9日
- 34) Fuxun Yu, Nor Shahidah Khairullah, Shingo Inoue, Vijayamalar Balasubramaniam, Futoshi Hasebe, Kouichi Morita: Expression of Nipah virus nucleocapsid protein in *Es-*

cherichia Coli and its application in sero-diagnosis .第42回日本ウイルス学会九州支部総会・
沖縄, 2005年7月8 - 9日 .

- 35) 久保嘉直, 吉居廣朗, 田中勇悦, 佐藤裕徳, 山本直樹: CXCR 4 糖鎖修飾による CD 4
非依存性 HIV - 1 感染の抑制 . 第42回日本ウイルス学会九州支部総会, 沖縄, 2005年7
月8 - 9日 .
- 36) 吉居廣朗, 大石和徳, 天沼 宏, 山本直樹, 久保嘉直: 同種指向性マウスレトロウイル
スの宿主域決定機構の解明 . 第42回日本ウイルス学会九州支部総会, 沖縄, 2005年7月
8 - 9日 .
- 37) 和田昭裕, 平山壽哉: *Helicobacter pylori* VacA の毒素活性へのガングリオシドの関与 .
第58回日本細菌学会九州支部総会, 沖縄, 2005年7月8 - 9日 .
- 38) 後藤健介: 福岡県西方沖地震による被害の特徴 . 2005年度福岡地理学会研究発表会, 福
岡, 2005年7月24日 .
- 39) 栗林 太, 中村三千男: ルシゲニン依存性の化学発光は好中球の接着に依存する . 第16
回 日本生体防御学会学術総会 . 2005年8月4 - 6日 .
- 40) Moji K, Nishikiori N, Abe T, Kunii O : Disaster Preparedness and Management with special ref-
erence to Tsunami of December 26, 2004. 15 th Association of Public Health Officers (Kenya)
Biennial Conference., Mombasa, Kenya, 2005. 8. 19
- 41) 黒田圭介, 磯 望, 後藤健介: 太宰府市におけるため池周辺景観の変遷 . 2005年日本
第四紀学会大会, 島根, 2005年8月26 - 29日 . pp .106 - 107
- 42) 磯 望, 黒木貴一, 後藤健介: 福岡県西方沖地震による被害分布の特徴 . 2005年日本
第四紀学会大会, 島根, 2005年8月26 - 29日 . pp .129 - 130
- 43) 山本秀樹, 坂野晶司, 神原咲子, 楽得康之, 谷村 晋, 溝田 勉: 国際保健医療協力に
おける公衆衛生領域での人材育成の諸問題について . 第64回日本公衆衛生学会総会, 札
幌市, 2005年9月14 - 16日 . 日本公衆衛生雑誌52 (8) : 1055, 2005 .
- 44) 谷村 晋, 黒岩宙司, 溝田 勉: 長崎市の小児人口に基づいた受療機会の地理的格差 .
第64回日本公衆衛生学会総会, 札幌市, 2005年9月14 - 16日 . 日本公衆衛生雑誌52
(8) : 477, 2005 .
- 45) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介, 中村真人, 鴨川武文, 藤田 隆, 井手口 敬, 下山正
一: アンケートと踏査による福岡県西方沖地震の被害分布 . 2005年日本地理学会秋季学
術大会, 茨城, 2005年9月17 - 19日 . P97
- 46) 後藤健介, 黒木貴一, 大平明夫, 黒田圭介, 磯 望: 大淀川下流域における台風14号
による浸水被害 . 2005年日本地理学会秋季学術大会, 茨城, 2005年9月17 - 19日 .
- 47) 一ノ瀬昭豊: 新規なセロファン寒天培地法による真の微細な電子顕微鏡形態観察 . イノ

バージョン・ジャパン2005 - 大学見本市，東京，2005年9月27 - 29日。

- 48) 平山謙二，菊池三穂子，渡部幹次，Ekhlal Hamed，奈良武司，新川 武，石井一成，千馬正敬，岩崎琢也，青木克己：ミニブタモデルを用いた日本住血吸虫ワクチンの開発。第4回長崎免疫研究会，長崎，2005年9月30日。
- 49) Nguyen Thi Phuong Lan，菊池三穂子，Vu Thi Que Huong, Vu Thien Thu Ngu, Vo Dinh Tham, Tran van Dat, Do Quang Ha，森田公一，平山謙二：ベトナム（Kinh 族）に認められた，新規 DR14アレルの解析。第14回日本組織適合性学会大会，熊本，2005年10月2 - 4日，(MHC . 12 (1) : 85)
- 50) Salda Leonora Trinidad Demot, Maria Del Carmen Parquet, Ronald R. Matias, Filipinas F. Natividad, Nobuyuki Kobayashi, Kouichi Morita: Molecular epidemiology of dengue virus serotype 2 in the Philippines . 第46回日本熱帯医学会大会，京都，2005年10月14 - 15日。
- 51) 鳥山 寛，千馬正敬，Jutavijittum P., Thammayong T. and Yousukh A .: ラオスの献血者における HBV, HCV, HIV 感染の血清疫学的研究。第46回日本熱帯医学会大会，京都，2005年10月14 - 15日。
- 52) 高木正洋：媒介者の世界とその戦略的対策 - Introduction - 。第46回日本熱帯医学会大会，京都，2005年10月14日 15日。
- 53) Dujdow Songthamwat，梶原和男，菊池三穂子，柳 哲雄，肥後広夫，平山謙二：Structure and expression analysis of a multigene family of Gp 82 of *Trypanosoma cruzi* . 第46回日本熱帯医学会，京都，2005年10月14 - 15日 (Tropical Medicine and Health 33 (Supplement): 45)
- 54) Nguyen Thi Phuong Lan，菊池三穂子，Vu Thi Que Huong, Vu Thien Thu Ngu, Vo Dinh Tham, Tran van Dat, Do Quang Ha，森田公一，平山謙二：Genetic analysis for susceptible gene to Dengue Hemorrhagic Fever in Vietnam . 第46回日本熱帯医学会，京都，2005年10月14 - 15日。(Tropical Medicine and Health 33 (Supplement): 60)
- 55) 皆川 昇：アフリカ大陸のマラリア媒介蚊とその最新研究 第46回日本熱帯医学会，京都，2005年10月14 - 15日。
- 56) 中澤秀介・Le Duc Dao・Nguyen Van Tuan・上村春樹・門司和彦：ベトナムマラリア流行地の小学生における潜在的マラリア原虫感染。第46回日本熱帯医学会，京都，2005年10月14 - 15日。
- 57) 野田伸一，Hoa B.T.V ., 宇賀昭二，Khanh T.L ., 青木克己，藤巻康教：ベトナムハノイ近郊に於ける土壌媒介寄生虫病の伝播疫学研究：水と大気の寄生虫卵による汚染状況。第46回日本熱帯医学会大会，京都，2005年10月14 - 15日。
- 58) 青木克己，濱本 満，渡部幹次，Muhoho, N. : ビルハルツ住血吸虫感染にともなう排尿困難。第46回日本熱帯医学会大会，京都，2005年10月15日。

- 59) 坂本 慶, 栗林 太, 中村三千男, 竹重公一朗: 細胞 NADPH オキシダーゼの活性化における p38MAP キナーゼの役割の解析. 神戸, 第78回日本生化学会大会2005年10月19 - 22日.
- 60) 森田公一, デング熱・ウエストナイル熱. 第88回日本細菌学会関東支部総会・浜松市, 2005年10月21日
- 61) 都野展子, Guiyun Yan.: アフリカマラリアベクター幼虫の潜水行動生態についての比較研究. 第58回日本寄生虫学会南日本支部大会・第55回日本衛生動物学会南日本支部大会, 宮崎, 2005年10月22 - 23日.
- 62) 川田 均, 才田 進, 島袋 梢, 平野雅親, 古賀雅之, 岩下智明, 高木正洋: 昆虫成長制御剤を添加した水質浄化ブロック製剤「エコバイオブロック®S」の水質浄化作用と蚊幼虫に対する羽化阻害効果. 第58回日本寄生虫学会南日本支部大会・第55回日本衛生動物学会南日本支部大会, 宮崎, 2005年10月22 - 23日.
- 63) 前川芳秀, 砂原俊彦, 神原廣二, 上村春樹, Yoes Prijatna Dachlan, 高木正洋: インドネシア, スンバワ島南西部の移民村で採集したハマダラカ属について. 第58回日本寄生虫学会南日本支部大会・第55回日本衛生動物学会南日本支部大会, 宮崎, 2005年10月22 - 23日.
- 64) Kimani, I., Temu, E.A., Minjas, J.N., Kawada, H. & Takagi, M.: Genetic diversity of *Plasmodium falciparum* isolates from wild African malaria mosquitoes. 第58回日本寄生虫学会南日本支部大会・第55回日本衛生動物学会南日本支部大会, 宮崎, 2005年10月22 - 23日.
- 65) 黒木貴一, 磯 望, 後藤健介: 太宰府市原川流域における2003年九州豪雨による斜面崩壊地の地形・地質的特性. 日本応用地質学会, 平成17年度研究発表会, 愛知, 2005年10月27 - 28日. P255
- 66) 谷村 晋, 溝田 勉: Rの地図グラフィック機能. 第22回日本コンピュータサイエンス学会学術集会. 大阪市, 2005年10月29日. p. 35
- 67) 金田英子: ラオス・ラハナム地区における小学生の健康調査とその結果. 第52回日本学校保健学会 仙台, 2005年10月29日.
- 68) Moji K, Nakamura S, Oku T: Prebiotic effects of daily fructooligosaccharide (FOS) intake on weight gain and reduction of diarrhea incidence among young children in urban Bangladesh. 第20回日本国際保健医療学会 ICDDR,B Symposium Session 東京, 2005年11月5日.
- 69) 谷村 晋, Mai Quyu Le, Trong Uyen Nin, 中谷友樹, 黒岩宙司, 溝田 勉: 1999年から2003年のベトナムのデング熱の地域集積性 - FleXScan 法を用いた検討 - . 第20回日本国際保健医療学会, 東京, 2005年11月5 - 6日. p. 126
- 70) 板橋 亨, 宮地宏幸, 水谷理人, 渡辺敬介, 川口 忍, 白石基三, 川田 均: 天然ピレ

- トリン炭酸ガス製剤について．第17回日本環境動物昆虫学会，奈良，2005年11月5 - 6日．
- 71) 門司和彦・國井 修・錦織信幸・阿部朋子・大和昌久：スマトラ沖地震・津波被害：大学の役割と今後の展開（感染症対策を中心として）．日本医師会・感染症対策会議 東京，2005年11月9日．
- 72) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：急性呼吸不全や慢性呼吸不全憎悪にサイトメガロウィルスの関与が疑われた症例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10 - 11日．P57
- 73) 山領 豪，黒木麗喜，土橋佳子，渡辺 浩，大石和徳，有吉紅也，真崎宏則：*Mycobacterium abscessus* による肺非結核性抗酸菌症の1例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10 - 11日．P57
- 74) 田中健之，原田義高，川上健司：バルーンカテーテルで気管支内異物を除去し気胸を併発した一例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10 - 11日．P100
- 75) 土橋佳子，本田章子，黒木麗喜，大石和徳，有吉紅也：当科で GM-CSF 吸入療法を試行した特発性肺胞蛋白症の4症例の検討．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10 - 11日．P101
- 76) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：VT を合併した睡眠時無呼吸症候群の一例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P103
- 77) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：COPD の心機能評価における心 MRI の有用性．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P117
- 78) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：Churg Strauss 症候群に合併した ARDS の一例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P118
- 79) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：重症呼吸不全の呼吸管理戦略における PCPS の位置づけ．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P121
- 80) 寺田真由美，中間貴弘，天野秀明：NPPV を用いて呼吸管理を行った ARDS の一例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P122
- 81) 栗田伸一，池田喜彦，竹林茂夫，大石和徳，有吉紅也：末期 UIP に両側性急性肺塞栓症を合併した1部検例．第57回日本結核病学会九州地方総会，第55回日本呼吸器学会九

- 州地方総会，熊本市，2005年11月10日 - 11日．P133
- 82) **大石和徳**：肺炎球菌ワクチン：成人，小児領域における今後の展望．第37回日本小児感染症学会教育セミナー，三重，2005年11月11日．
- 83) **磯 望，黒木貴一，後藤健介，陶野郁雄**：福岡県西方沖地震の被害分布の特徴．第24回自然災害学会学術講演会，宮城，2005年11月17日 - 18日．pp 27 - 28
- 84) **後藤健介，黒木貴一，大平明夫，黒田圭介，磯 望**：台風14号による大淀川流域の洪水氾濫の実態．第24回自然災害学会学術講演会 宮城 2005年11月17日 - 18日 .pp .133 - 134
- 85) **栗田伸一，陣内ちさ，中寺英介，池田喜彦**：気管支鏡を用い局所麻酔下胸膜生検にて診断された結核性胸膜炎の2例．第271回日本内科学会九州地方会，那覇市，2005年11月19日．P33
- 86) **松木 啓，田中健之，麻生憲史，倉本剛史，石田正之，有吉紅也**：気胸に対する胸腔ドレーンによる治療中に再膨張性肺水腫を来した1例．第271回日本内科学会九州地方会，那覇市，2005年11月19日．P34
- 87) **藤本武士，高木理博，栗田伸一，池田喜彦**：気腫性腎盂腎炎，敗血症を来した2型糖尿病の1例．第271回日本内科学会九州地方会，那覇市，2005年11月19日．P37
- 88) **Khan Afjal Hossain，鍋島 武，福家 功，石川豊数，井上真吾，森田公一**：西ナイルウイルスに対する弱毒生ワクチン開発の試み．第53回日本ウイルス学会学術集会，横浜，2005年11月20 - 22日．
- 89) **Salda Leonora, Maria Del Carmen Parquet，小林信之，森田公一**，Molecular epidemiology of dengue virus serotype 2 in the Philippines: Genotype shift and local evolution．第53回日本ウイルス学会学術集会，横浜，2005年11月20～22日．
- 90) **林 昌宏，高崎智彦，根路銘令子，伊藤美佳子，田島 茂，森田公一，石川豊数，倉根一郎**．ウエストナイルウイルス不活化ワクチンの日本脳炎血清型群ウイルスに対する交差反応の検討．第53回日本ウイルス学会学術集会，横浜，2005年11月20 - 22日．
- 91) **青木千恵，左 一八，森田公一，長谷部 太，高橋忠伸，鈴木 隆，鈴木康夫**． Dengue ウイルスエンベロープ蛋白質と宿主由来糖分子との相互作用の解析および糖鎖誘導体による Dengue ウイルス感染阻止効果の検討 第53回日本ウイルス学会学術集会 横浜，2005年11月20 - 22日．
- 92) **安井文彦，北畠正大，横地祥司，井上真吾，森田公一，志田壽利，木所 稔，村井 深，松島綱治，小原道法**．SARS コロナウイルスの全構造蛋白質発現型組換えワクシニアウイルスによるワクチン効果の検討．第53回日本ウイルス学会学術集会，横浜，2005年11月20 - 22日．
- 93) **余 福勲，井上真吾，長谷部太，森田公一**．Sero-diagnosis of Nipah virus infection by using

- recombinant Nipah virus nucleocapsid protein expressed in Escherichia coli . 第53回日本ウイルス学会学術集会 , 横浜 , 2005年11月20 - 22日 .
- 94) 久保嘉直 , 吉居廣朗 , 田中勇悦 , 佐藤裕徳 , 山本直樹 : HIV 1 の細胞内侵入におけるエズリンの関与 . 第53回日本ウイルス学会学術集会 , 横浜 , 2005年11月20 - 22日 .
- 95) 吉居廣朗 , 大石和徳 , 山本直樹 , 久保嘉直 : Mus dunni 細胞株の同種指向性マウス白血病ウイルス感染抵抗性の決定機構 . 第53回日本ウイルス学会学術集会 , 横浜 , 2005年11月20 - 22日 .
- 96) 門司和彦・金田英子 : Demographic and Health Surveillance System 構築の必要性と課題 : ラオスにおける経験を中心に . 第6回感染症研究施設4大学連絡会議 那覇 , 2005年11月22日 .
- 97) 市川辰樹 , 中尾一彦 , 濱崎圭輔 , 大曲勝久 , 鳥山 寛 , 江口勝美 : 抗ミトコンドリア抗体 M2 陽性で脂肪性肝炎の組織像を呈した2例 . 第36回日本肝臓学会西部会 , 鈴鹿 ,(三重) , 2005年11月25日 - 26日 .
- 98) 平山謙二 : 動物実験モデル開発について . 平成17年度厚生労働省新興再興感染症研究班会議 , 名古屋 , 2005年12月20日 .
- 99) Moji k, Kaneda K, Tiengkham Panom, Boupha B: Effect of Opisthorchis viverrini infection on growth of schoolchildren in a community of Central Lao. Annual Meeting of Japan-US panel on Parasitology. Washington DC, USA, 2005.12.11 .
- 100) 井上真吾 , Nemani Talemaitoga, Aryati, Mohammed A. Islam, Efren M. Dimaano, Ronald R. Matias, Wimal Abeyewickreme , 大石和徳 , Filipinas F. Natividad and 森田公一 , 第12回トガ・フラビ・ペスチ研究会 , 東京 , 2006年1月20日 .
- 101) 黒木貴一 , 磯 望 , 後藤健介 : 2005年台風14号による大淀川下流域の氾濫被害 . 2005年福岡地理学会 , 福岡 , 2006年1月29日 .
- 102) 磯 望 , 後藤健介 , 黒木貴一 , 大平明夫 : 台風14号による大淀川下流域の氾濫被害 - 衛星画像と現地調査による分析 - . 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会 , 福岡 , 2006年2月18日 . pp 25 - 28
- 103) 田中芳樹 , 後藤健介 , 後藤恵之輔 : 衛星リモートセンシングを用いた台風9918号による熊本災害の調査解析 . 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会 , 福岡 , 2006年2月18日 . pp .73 - 76
- 104) 黒木貴一 , 磯 望 , 後藤健介 : アンケートと GIS による福岡県西方沖地震の実態調査の試み . 平成17年度自然災害研究協議会西部地区部会・研究発表会 , 福岡 , 2006年2月18日 . pp .127 - 130
- 105) 高木明子 , 菊池三穂子 , Mirani Weerasooriya , 木村英作 , 伊藤 誠 , 安波道郎 , 吉浦

孝一，新川詔夫，平山謙二：スリランカの象皮病多発家系を用いた罹患同胞対解析による疾患感受性遺伝子マッピング．厚生労働科学研究費・国際医学協力研究事業「寄生虫症の病態・治験及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対策への応用的展開に関する研究（H17 - 国医 7）班」平成17年度班会議 日米医学協力寄生虫疾患専門部会・平成17年度国内会議，東京，2006年2月18日．

- 106) Aoki Y. and Hien N.T.: Research center for clinical epidemiology of Emerging and re-emerging infectious diseases. MEXT “Program of founding research centers for emerging and re-emerging infectious diseases”, Asian Research Forum on Emerging and Re-emerging infection-2006, Tokyo, February 19, 2006.
- 107) 川上健司，木村由美子，原田義高，田中健之，山領 豪：結核ユニット化病棟における GFT - 2 G キットの使用経験．第30回長崎感染症研究会，長崎市，2006年3月4日．
- 108) 後藤惠之輔，田中芳樹，後藤健介：台風による塩害停電対策のためのリモートセンシングの活用．第15回生研フォーラム「宇宙からの地球環境モニタリング」，東京，2006年3月16 - 17日．pp 44 - 48
- 109) 黒木貴一，磯 望，後藤健介，宗 建郎：衛星データと GIS による太宰府市の環境変化解析．2006年日本地理学会春季学術大会，埼玉，2006年3月27 - 30日．P153
- 110) 西木真織，後藤健介，磯 望，黒木貴一：ランドサットデータに現れる季節変動解析 - 北部九州の事例 2006年日本地理学会春季学術大会，埼玉，2006年3月27 - 30日．P247
- 111) 磯 望，黒木貴一，後藤健介，田中夢見，水本 茜，沖原美央，佐々野理恵，藤原あや：アンケートによる福岡県西方沖地震の影響調査 2006年日本地理学会春季学術大会，埼玉，2006年3月27 - 30日．P255
- 112) 山崎栄樹，和田昭裕，中山真彰，久恒順三，西 義人，平山壽哉：*H. pylori* が産生する空胞化毒素 VacA の RPTPβ のフォスファターゼ活性に与える影響．第79回日本細菌学会，金沢，2006年3月29 - 31日．
- 113) 久恒順三，中山真彰，山崎栄樹，西 義人，和田昭裕，片方陽太郎，平山壽哉：*H. pylori* VacA は p38及び Erk 1 / 2 シグナル伝達系を介して Cyclooxygenase-2 mRNA の発現誘導を亢進する．第79回日本細菌学会，金沢，2006年3月29 - 31日．
- 114) 中山真彰，和田昭裕，山崎栄樹，西 義人，久恒順三，八尋錦之助，平山壽哉：*H. pylori* 空胞化毒素(VacA)の毒性発現機序．第79回日本細菌学会，金沢，2006年3月29日 - 31日．
- 115) 和田昭裕，高橋 章，山崎栄樹，藤原由似子，中山真彰，久恒順三，西 義人，平山壽哉：*H. pylori* の空胞化致死毒素(VacA)の作用機序への RPTPβ の役割．第79回日本細菌学会，金沢，2006年3月29 - 31日．

9 . 3 国際会議における研究発表

- 1) Kenji Hirayama: Monitoring Adverse Events and SAEs. International Conference on Standard Operating Procedure of Ethical Review Committee. (FERCAP) March 28-29, 2005 Taipei, Taiwan (平成16年度)
- 2) Kenji Hirayama et al.:
 - 1 . Discussion oh WHO-ART and WHO Drug Dictionary
 - 2 . Proposal for Additional AE Terminology (continued)
 - 3 . Autocoling Practical Session
 - 4 . Writing SOPs for Data Coding
 - 5 . Writing SOPs for Data Coding (continued)
 - 6 . SOP presentationCDMTDR Workshop on Data Coding. March 31-April 2, 2005, Sofitel Center Hua Hin Resort, Thailand
- 3) Morita K.: Arboviral encephalitis infection in Asia: The Old and the New. German-Japanese Symposium on Emerging and re-emerging viruses May 14-17, 2005, Toyama, Japan
- 4) Hirayama, T., Nakayama, M., Wada, A., Hisatsune, J., Yamasaki, E., Nishi, Y., and Moss, J.: *Helicobacter pylori* VacA clustering in gastric cell line AZ-521 is mediated by RPTP β . 105th General Meeting of American Society for Microbiology June 6-9, 2005, Atlanta, USA
- 5) Kenji Hirayama:
 - 1 . Informed Consent
 - 2 . Evaluation of risks and benefits in children.International Course on Research Ethics. July 25-27, 2005, Pompe Hall, Nagasaki University, Japan
- 6) Kenji Hirayama: Plenary Discussion on Self-assessment Exercise.
Refresher Course on Good Clinical Practices for TDR Clinical Monitors. August 15-17, 2005, Sofitec Central Prachuab Khirkhan, Thailand
- 7) Honda S, Mine M, Shibata Y. Association of life and health conditions with satisfaction in daily life among atomic bomb survivors. The XVII IEA World Congress of Epidemiology (WCE 2005), August 21-25, 2005, Bangkok, Thailand.
- 8) Dat V.T., Vo D. T., Vu T. Q. H., VU T.T. N., Kikuchi M., Nguyen T. P. L., Hirayama K., Do Q.H., Morita K.: Genetic analysis for susceptible gene to Dengue hemorrhagic fever in Vietnam. Medicine and Health in the Tropics, September 11-15, 2005 Marseille, France (Abstract Book,

Medicine and Health in the Tropics, Marseille-France: p 54)

- 9) Hirayama K., Ubalee R., Tsukahara T., Kikuchi M., Lum K.J., Dzodzomenyo M., Kaneko A., Na-Bangchang K.: Associations between frequencies of a susceptible TNF-alpha promoter allele and protective a-thalassemias and malaria parasite incidence in Vanuatu. Medicine and Health in the Tropics, September 11-15, 2005, Marseille, France (Abstract Book, Medicine and Health in the Tropics, Marseille-France: p. 71)
- 10) Jutavijittum P., Jiviriyawat Y., Yousukh A., Kunachiwa W. and Toriyama K.: Genotypes of hepatitis B virus among hepatitis B carriers in northern Thailand. Internal Meeting of the Molecular Biology of Hepatitis B virus. September 18-21, 2005, Heidelberg, Germany
- 11) Kenji Hirayama: Presentation and Discussion of the activity in Japan. WHO/TDR Annual Meeting on Clinical Data Management. September 26-28, 2005, Shanghai, China
- 12) Kenji Hirayama: Presentation of SOPs of Center in Japan. WHO/TDR Annual Meeting on Clinical Data Management. September 26-28, 2005, Shanghai, China
- 13) Kawada,H., Loan,L.L., Tien,T.K., Mai, N.T.N. & Takagi,M.: Field evaluation of spatial repellency of metofluthrin-impregnated plastic strips against mosquitoes in My Tho city, Vietnam 4th International Congress of Vector Ecology October, 2-7, 2005, Reno, USA
- 14) Kawada,H., Tatsuta,H., Arikawa,K. & Takagi,M.: Comparative study on the relationship between photoperiodic host-seeking behavioral pattern and the eye parameter of mosquitoes 4th International Congress of Vector Ecology, October, 2-7, 2005, Reno, USA
- 15) Hasegawa,M., Tuno,N., Yen,N. & Takagi,M.: Abundance of JE-vectors in relation to host distribution in a northern vietnam village. 4 th International Congress of Vector Ecology, October, 2-7, 2005, Reno, USA
- 16) Tuno,N., Tsuda,Y., Swonkerd,W. & Takagi,M.: Mosquito prebiting resting behavior and density dependent feeding success 4th International Congress of Vector Ecology, October, 2-7, 2005, Reno,USA
- 17) Hirayama T: *Helicobacter pylori* vacuolating cytotoxin VacA binds to mammalian cells through interaction with receptor type protein tyrosine phosphatases, RPTP α and RPTP β , 2005 EHSG XVIII Oct. 12-14, 2005, Copenhagen, Denmark
- 18) Wada, A and Hirayama, T.: Effect of *Helicobacter pylori* vacuolating toxin (VacA) on gastric epithelial cells. The 3rd stage surface barrier immunology study group (SBARIS)2nd meeting & Infectious disease study group 3rd meeting November 4-5, 2005, Okinawa, Japan
- 19) Kenji Hirayama: Immunity in schistosomiasis. Scientific Working Group on Schistosomiasis. UNICEF/UNDP/World Bank/WHO Special Programme for Research and Training in Tropical

- Disease (TDR). November 14-16, 2005, World Health Organization (WHO) Headquarters, Geneva, Switzerland.
- 20) Yoda T, Rakue Y, Mizota T: Integrated Pest Management and Surveillance of West Nile Virus as Re-Emerging Infectious Disease in Louisiana, USA. Joint International Tropical Medicine Meeting 2005, November 30-December 2, 2005, Bangkok, Thailand (Abstract page 61)
- 21) Takenaka, S: Human Security and HIV/AIDS. JICA Satellite Meeting Mainstreaming Human Security in HIV Prevention ,14th International Conference HIV/AIDS & STIs in Africa (ICASA 2005). Dember 6, 2005, Abuja, Nigeria
- 22) Kenji Hirayama : バヌアツ諸島で観察されたマラリア感受性遺伝子の自然選択
Malaria selection pressure on the frequencies of microsatellite alleles located around immune related genes in Vanuatu . - Preliminary study 日米合同会議 , December 9-11, 2005, Washington, USA
- 23) Hirayama, T., Nakayama, M., Wada, A., Hisatune, J., Yamasaki, E., Nishi, Y., and Moss, J.: *Helicobacter pylori* vacuolating cytotoxin, VacA-induced cellular vacuolation and p38 activation is dependent on translocation of its receptor RPTP β to lipid rafts. 45th Annual Meeting The American Society for Cell Biology December 10-14, 2005, San Francisco, USA
- 24) Yamasaki, E., Wada, A., Moss, J., and Hirayama, T.: *Helicobacter pylori* Vacuolating Cytotoxin (VacA) Induces Activation of The Proapoptotic Protein Bax and Bak Independent of Vacuolation. 45th Annual Meeting The American Society for Cell Biology December 10-14, 2005, San Francisco, USA
- 25) Oishi K, Celia Carlos, Cynthia Mapua, Maria T. Cinco, Inoue S, Ronald R. Matias, Filipinas F. Natividad: Comparison of clinical features and hematologic abnormalities between dengue fever and dengue hemorrhagic fever among children in the Philippines. American Society of Tropical Medicine and Hygiene 54 th Annual Meeting Dec 11 to 15, 2005, Washington, DC, USA
- 26) Saito M, Inoue S, Efren M. Dimaano, Maria T. Alera, Kumatori A, Moji K, Ronald R. Matias, Morita K, Filipinas F. Natividad, Oishi K: Association of increased platelet-associated immunoglobulins with thrombocytopenia and the severity of disease in secondary dengue virus infections. American Society of Tropical Medicine and Hygiene 54 th Annual Meeting Dec 11 to 15, 2005, Washington, DC, USA
- 27) Kenji Hirayama: Roundtable Discussion I: Reports from Asian & Western Pacific Countries: The Current Status of Guidelines and Legislation Related to Research Ethics. An International Conference on Defining the Roles, Responsibilities, and Relations between National

- Health Authorities and Ethics Committees in Health Research. December 12-13, 2005, Pattaya, Thailand
- 28) Kenji Hirayama: Japanese system for Auditing IRB. Audit Training for TDR Clinical Monitors. December 15-17, 2005, Bangkok, Thailand
- 29) Kenji Hirayama: Structure of Curriculum for Vaccine development. Informal consultation for PhD course on Product Research and Development. December 21-24, 2005, Nagasaki University, Nagasaki, Japan
- 30) Oishi K: Role of strain-specific surface antigen in pulmonary defense against nontypeable *Haemophilus influenzae* (NTHi) in a murine model. US/Japan Cooperative Medical Science Program Acute Respiratory Infections Panel Meeting Jan 24 to 25, 2006, Texas, USA
- 31) Watanabe H: Prevalence and transmission of acute respiratory tract infections caused by *Streptococcus pneumoniae* and *Haemophilus influenzae* among the internally displaced persons in tsunami disaster evacuation camps of Sri Lanka. US/Japan Cooperative Medical Science Program Acute Respiratory Infections Panel Meeting Jan 24 to 25, 2006, Texas, USA
- 32) Morita K,: Ecology of arbovirus in Asia implies a future rapid expansion of West Nile virus in the Region: Development of West Nile fever vaccines February 19-20, 2006, Tokyo, Japan
- 33) Kenji Hirayama: The necessary things for hosting the diploma course of clinical product development at Nagasaki University . 薬剤開発のための大学院設立準備会議 . March 19-21, 2006, Nagasaki University, Nagasaki, Japan
- 34) Kenji Hirayama: Discussion on the development of anti helminth drugs in Japan. Informal Consultation Meeting of Experts to advice TDR on the proposed Helminth Initiative to enhance R & D for new products. March 23-25, 2006, Tokyo, Japan / 主催 : UNICEF/UNDP/World Bank/WHO Special Programme for Research and Training in Tropical Disease (TDR).
- 35) Hirayama T: Mechanism of Action of Helicobacter pylori VacA toxin in Disease: Role of Protein Tyrosine Phosphatase. 8th Japan-Korea International Symposium on Microbiology March 29, 2006, Kanazawa, Japan
- 36) Tanimura S, Thiem VD, Mizota T: Geographic clusters in surveillance data of dengue in Vietnam. International Symposium for Application of GIS to Health, March 2006, Niigata, Japan

9.4 報告書等印刷物

- 1) 久保嘉直：HIV-1 感染における ERM ファミリー蛋白質の関与．平成17年度 厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 「HIV の増殖・変異の制御に関する研究」 総括・分担研究報告書．
- 2) 金田英子：国際学校保健と寄生虫対策：ラオス・ラハナム地区での取り組みと今後の課題．総合地球環境学研究所研究プロジェクト4 - 2 2004年度報告書，pp230 - 232．2005年7月．
- 3) 平山謙二，中澤秀介，菊池三穂子，河野 茂，狩野繁之，松田 肇，千種雄一，加藤尚子，関澤 麻，中村秀文，奈良武司，佐藤 博，太田伸生，木村英作，松井健志，中西憲司，坪井敬文，楊河宏章，金澤 保，新川 武，竹村保範 熱帯病に対するヒト感受性抵抗性遺伝子解析．長崎大学熱帯医学研究所(全国共同利用研究所)平成16年度(2004)共同研究報告集，pp 66 - 70，長崎大学熱帯医学研究所，2005年8月．
- 4) 後藤惠之輔，後藤健介，吉岡良平：2005年3月20日福岡県西方沖地震における海水温の状況観測．平成16年度地震研究所特定共同研究(A)報告 内陸直下地震の予知，pp 183 - 191，2005年10月．
- 5) 大利昌久，國井 修，門司和彦，別所誠一，錦織信幸，古賀才博，阿部朋子，近藤裕子，波川京子，山本加奈子，広瀬 茂：日本医師会感染症危機管理対策室委託研究 - スマトラ島沖地震・津波災害後，6ヶ月の現状，日本医師会感染症危機管理対策室委託研究，2005年11月．
- 6) 鳥山 寛：ラオス献血者の血清疫学研究 Medical Tribune (2005年12月1日付)：38 (48)：p 35．
- 7) Thein H, Kama M, Mizota T: Comparative Studies on Infectious Diseases Control and Prevention in Fujii and Japan. Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University. Nagasaki, Dec. 2005.
- 8) 峰松和夫：寄稿・共同研究会「熱帯性感染症と経済的貧困・文化」から学んだこと．長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「熱帯性感染と経済的貧困・文化」，長崎市，2005年12月，p109 - 110
- 9) 溝田 勉：開発途上国における保健医療環境の社会的基盤の研究．長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「熱帯性感染と経済的貧困・文化」，長崎市，2005年12月，p .1 - 68
- 10) 溝田 勉：貧困・文化が熱帯起源の感染症対策に及ぼす影響．長崎大学熱帯医学研究所共同研究事業「熱帯性感染と経済的貧困・文化」，長崎市，2005年12月，p 69 - 110
- 11) 平山謙二．寄生虫感受性の宿主因子の検討．厚生労働科学研究費補助金(国際医学協力研究事業)寄生虫症の病態・治療及び予防に関わる標的分子探索とその国際寄生虫対

- 策への応用的展開に関する研究 (H17 - 国医 - 7) 平成17年度 総括・分担研究報告書 .
pp 30 - 32 , 2006年 1 月 .
- 12) **大渡 伸, 藤巻康教, 熊取厚志, 鳥山 寛, 金田英子, 奥村 寛** 紫外線 (UV-B) 照射と生体免疫能の関連 長崎大学熱帯医学研究所 (全国共同利用研究所) 平成16年度 (2004) 共同研究報告書 , pp .71 - 72 , 長崎大学熱帯医学研究所 , 2005
平山謙二 . ワクチン抗原遺伝子導入住血吸虫株の樹立とその感染動物の検討 . 国際学術研究助成研究成果報告書平成14 - 16年度 , pp170 - 171 . 出版(財)平和中島財団 , 2006年 2 月 .
- 13) **後藤健介** : 勝山町の自然的位置と特徴 . 勝山町史 上巻 , pp 3 - 8 . 勝山町 , 2006年 3 月 .
- 14) **後藤健介** : 衛星画像で見た勝山 . 勝山町史 上巻 , pp 26 - 32 . 勝山町 , 2006年 3 月 .
- 15) **磯 望, 黒木貴一, 後藤健介** : 台風14号による大淀川下流洪水氾濫区域の実態と地形・土地条件の特徴 . 科研費補助金 (特別研究促進費) 17800003 2005年 9 月台風14号による水災害と土砂災害に関する研究 研究成果報告書(研究代表者 : 善功企) , pp .182 - 187 , 2006年 3 月 .
- 16) **後藤健介** : 太宰府市の衛星画像解析による土地被覆の経年的変化と解析上の課題 . 平成16年度 ~ 平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 一般)
16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書 (研究代表者 : 磯 望) , pp 3 - 15 , 2006年 3 月 .
- 17) **西木真織, 後藤健介, 磯 望** : 衛星画像解析による北部九州の土地被覆の経年的変化 . 平成16年度 ~ 平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 一般)
16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書 (研究代表者 : 磯 望) , pp 29 - 43 , 2006年 3 月 .
- 18) **磯 望・西木真織・後藤健介** : 北部九州で認められた衛星画像の季節的变化 . 平成16年度 ~ 平成17年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 一般) 16500653 衛星データによる土地被覆の季節的变化と経年的変化の比較研究 研究成果報告書 (研究代表者 : 磯 望) , pp 57 - 73 , 2006年 3 月 .
- 19) **平山謙二** . ミニブタを用いた日本住血吸虫感染動物モデルの開発 . 厚生労働科学研究費補助金 (新興・再興感染症 研究事業) 輸入蠕虫性疾患の監視と医療対応整備に関する研究 (H15 - 新興 - 8) 平成17年度総括・分担研究報告書 . pp 27 - 29 , 2006年 3 月
- 20) **平山謙二** . 「研究の国際展開 ~ 外部資金獲得・海外拠点 ~ 」 . 大学国際戦略本部強化事業平成17年度公開シンポジウム報告書 大学の国際戦略 - 戦略的・組織的な取組を目指して - . pp 42 - 64 , 独立行政法人日本学術振興会 , 2006 .

10 講演会

10 . 1 熱帯医学研究所における所外講師による講演

1) Framework for research ethics. Informed consent. Inducements, exploitation.

Ezekiel Emanuel (Department of Clinical Bioethics, Warren G. Magnuson Clinical Center, National Institutes of Health, USA)

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

2) Evaluation of risks and benefits. Issues in international research ethics.

Reidar K. Lie (1.Center for International Health, University of Bergen Armauer Hansens Hus, Haukelandsbakken28 ,N5021Bergen, Norway 2 Senior Fellow & Head of Section / Department of Clinical Bioethics, National Institute of Health.USA)

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

3) Organization of ethics review and regulations in Korea.

Ock-Joo Kim (Department of History of Medicine and Medical Humanities, College of Medicine, Seoul National University, Korea)

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

4) IRB on clinical trials in Japan

Eiji Uchida (Director and Professor/1) Clinical Trial Support Center, Showa University Hospital

2) Second Department of Pharmacology, Showa University, School of Medicine).

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

5) China, Policy options for research ethics review.

QIU Renzong (Institute of Philosophy, Chinese Academy of Social Sciences, China)

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

6) Ethics and pharmacogenomics.

Kiichiro Tsutani (Professor /Department of Pharmacoeconomics, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, The University of Tokyo)

International Course on Research Ethics.

July 25-27, 2005,

Pompe Hall, Nagasaki University, Japan

7) 「EPI Programme in the Western Pacific Region」

佐藤芳邦 WHO 西太平洋事務局医務官

2005年10月17日

8) 認知症 診断と活性酸素の関わり

清原龍夫 (清原龍内科, 院長)

2006年1月31日

9) ヒト型抗口タウイルス中和抗体の単離と解析

守口匡子 (藤田保健衛生大学・医学部)

長崎大学ポンペ会館

2006年3月20日

10.2 熱帯医学研究所教官による講演

- 1) Genetic susceptibility to parasitic infectious diseases in human.

平山 謙二

JICA 上級原虫病コースに係る特別講義，
2005年3月8日，長崎大学熱帯医学研究所（平成16年度）

- 2) ゴキブリ，ダニ等家屋害虫の防除方法

川田 均

児玉商会主催研修会（児玉G業者の家屋害虫知識の啓発）
2005年4月6日，福岡

- 3) スマトラ沖地震被災地視察報告

高木 正洋

第74回日本寄生虫学会大会サテライト集会マラリア談話会
2005年4月7日，米子

- 4) 熱帯医学と住血吸虫症対策

青木 克己

愛媛大学医学部 講義
2005年4月24日，2005年10月13日

- 5) 大洋州予防接種事業強化プロジェクト

森田 公一

JICA 大洋州事務所長会議
2005年4月26日，フィジー

- 6) Japanese contribution for PIPS

森田 公一

WHO/UNICEF PIPS Workshop
9-13 May 2005，
Noumea, New Caledonia

- 7) 熱帯医学専攻（修士課程）について

平山 謙二

2005年5月30日，大村市

- 8) インフルエンザと旅行医学肺感染症の新展開：気道の炎症制御と感染防御

大石 和徳

第2回 Respiratory Forum for Frontier

- 2005年6月16日, 大阪
- 9) 熱帯医学と住血吸虫症
青木 克己
九州大学医学部 講義
2005年6月17日
- 10) - 注目すべき新興感染症 - 医療をめぐる最近の話題
平山 謙二
武庫川女子大学薬学講座
2005年6月18日, 西宮市
- 11) 熱帯感染症感受性遺伝子探索
Hirayama Kenji
タマサート大学保健科学部特別講義
June 22, 2005, Bangkok, Thailand
- 12) 食品と寄生虫病
青木 克己
徳島大学医学部栄養学科 講義と実習
2005年6月23日
- 13) 熱帯医学
青木 克己
京都大学医学部 講義
2005年6月24日
- 14) 途上国における妊娠, 出産期の健康と病の捉え方と行動 ネパールを事例として
松山 章子
熊本大学保健科学研究懇話会
2005年7月15日, 熊本
- 15) 熱帯医学研究所の中長期目標
青木 克己
富山大学和漢薬研究所 セミナー
2005年7月23日
- 16) 開発途上国における熱帯病制御の新しい戦略
青木 克己
日本薬学会北陸支部第1回総会 特別講演
2005年7月23日

- 17) 住血吸虫症の対策：新しい武器の開発
青木 克己
帯広畜産大学原虫病センター 特別講義
2005年 8月 4日
- 18) Introduction to Tropical Diseases (熱帯医学総論)
Kenji Hirayama
Laboratory and Field Observations in Tropical Diseases (Tropical Diseases IV)
(タマサート大学熱帯医学実地研修コース 特別講義)
August 7-14, 2005, タイ
- 19) ユニセフの支援活動
松山 章子
熊本ユニセフ協会，ユニセフジュニアセミナー
2005年 8月18日，熊本
- 20) 熱帯地で問題になる新興・再興感染症
有吉 紅也
第49回鳥取県東部医師会医学セミナー
2005年 8月20日，鳥取市
- 21) 臨床熱帯医学の役割と将来像
有吉 紅也
とろび会講演会
2005年 8月29日，長崎市
- 22) 熱帯病・新興感染症をとりまく状況 - 日本の対応 -
森田 公一
長崎医学同窓会福岡支部総会
2005年 9月 3日，福岡
- 23) デング熱の重症化遺伝子解析
平山 謙二
ガーナ大学野口記念医学研究所 特別講演
2005年 9月19日
- 24) 大洋州予防接種事業強化プロジェクト (6ヶ月経過報告)
森田 公一
2005年 9月29日，フィジー
- 25) 肺感染症の新展開：気道の炎症制御と感染防御

大石 和徳

第 6 回茨城呼吸器感染症研究会

2005年10月 6 日 , 茨城

26) HIV / エイズ問題 - 途上国から学ぶ -

有吉 紅也

第388回長崎医学会例会

2005年10月 8 日 , 佐世保市

27) *Helicobacter pylori* vacuolating cytotoxin VacA binds to mammalian cells through interaction with receptor type protein tyrosine phosphatases, RPTP α and RPTP β , Hirayama, T.

Seminar at Copenhagen University

Oct.11, 2005, Copenhagen, Denmark,

28) 東南アジアにおける HIV ・ エイズ対策の取り組み

有吉 紅也

第 5 回長崎 STD 講演会

2005年10月14日 , 長崎市

29) スマトラ沖大地震に対する JDR の活動経験

高木 正洋

平成17年度感染症対策研修

2005年10月18日 , 東京

30) 新興感染症をとりまく状況

森田 公一

福岡県保健医協会研究会

2005年10月28日 , 北九州市

31) 呼吸器感染症の治療・予防戦略

大石 和徳

第 9 回北勢呼吸器感染症研究会

2005年10月29日 , 四日市市

32) 熱帯医学と寄生虫病

青木 克己

群馬大学医学部 講義

2005年11月 1 日

33) 女性の見えない国 , 見える国

松山 章子

熊本男女共同参画 熊本ユニセフ協会企画

2005年11月3日, 熊本

- 34) 国際感染症としてのデングと血小板減少機序の新たな展開

大石 和徳

第3回感染症研究学会 Infectious Diseases Study Group 3rd Meeting

2005年11月4日, 沖縄

- 35) スマトラ沖地震・津波被害: 大学の役割と今後の展開 (感染症対策を中心として)

門司 和彦

日本医師会・感染症対策会議

2005年11月9日, 東京

- 36) 新型インフルエンザについて

大石 和徳

長崎県健康危機管理担当課長会議

2005年11月22日, 長崎市

- 37) 感染症の免疫遺伝学

Kenji Hirayama

カロリンスカ大学病院 (スウェーデン) 特別講義

November 28, 2005, Stockholm, Sweden.

- 38) 脳マラリアの感受性を決定する TNF プロモーターアレルカ

Kenji Hirayama

カロリンスカ大学病院 (スウェーデン) シンポ“Malaria research on Island Melanesia”

December 1, 2005, Stockholm, Sweden

- 39) コミュニティーを対象とする臨床疫学研究における倫理面での配慮について

Kenji Hirayama

カロリンスカ大学病院 (スウェーデン) 特別講義

December 2, 2005, Stockholm, Sweden

- 40) 妊娠, 出産, 育児におけるネパール女性の意思決定

松山 章子

日本助産学会, 国際助産協働セミナー

2006年1月28日

- 41) 研究の国際展開 ~ 外部資金獲得・海外拠点 ~

平山 謙二

大学国際戦略本部強化事業平成17年度公開シンポジウム「大学の国際戦略 - 戦略的・組織的な取組を目指して - 」

2006年1月30日，東京

42) 熱帯性感染症の感受性遺伝子探索

平山 謙二

北海道大学大学院獣医学研究科「人畜共通感染症に関するミニ講演会」

2005年2月6日，札幌市

43) 疾病媒介蚊の生態とその防除対策

高木 正洋

人畜共通感染症に関する講演会，北海道大学

2006年2月6日，札幌

44) 衛生動物に関わる最近の話題

高木 正洋

第41回ねずみ衛生害虫駆除技術研修会

2006年2月14日，大野城

45) 殺虫剤概論

川田 均

第41回ねずみ衛生害虫駆除技術研修会

2006年2月14日，大野城

46) 人材育成のカリキュラムについて

森田 公一

平成17年度厚生労働科学研究費補助金，国際健康危機管理ネットワーク強化研究推進事業研究成果発表会

2006年3月3日，東京

47) インフルエンザと旅行医学

渡邊 浩

平成17年度長崎県救急医療研修会

2006年3月12日，長崎市

48) MRSA に対する院内感染対策

渡邊 浩

第13回感染症・サーフェスバリア研究会

2006年3月28日，福岡市

11 主要な研究設備

- | | |
|---------------------|----------------------------|
| 1 回転電動万能マイクロトーム | 20 核酸蛋白質解析合成システム |
| 2 反射型蛍光顕微鏡 | 21 宿主・寄生体相互作用解析システム |
| 3 ウルトラマイクロトーム | 22 プラスミド自動分離調整システム |
| 4 落射蛍光位相差顕微鏡 | 23 遺伝子検出システム |
| 5 分離用超遠心機 | 24 感染症病原性解析システム |
| 6 真空高速冷却遠心機 | 25 コロニーアナライザー画像解析装置 |
| 7 クリオスタット | 26 熱帯性病原体成分機能解析システム |
| 8 万能倒立顕微鏡 | 27 多機能ぜん虫行動解析システム |
| 9 走査電子顕微鏡装置 | 28 熱帯性ウイルス感染症診断試薬作成システム |
| 10 プロテインシステム | 29 蛋白質精製システム |
| 11 生態機能解析装置 | 30 病原性ウイルス遺伝子及び蛋白質機能解析システム |
| 12 病理組織標本作製システム | 31 自動炭酸ガス細胞培養装置 |
| 13 超高速ビデオ | 32 超遠心機 |
| 14 細胞自動解析分離システム | 33 核酸オリゴマー感染症治療薬開発システム |
| 15 原虫遺伝子 DNA 解析システム | 34 生物顕微鏡 |
| 16 レーザースキャン顕微鏡 | 35 細菌毒素活性測定解析システム |
| 17 医用サーモグラフィ装置 | 36 DNAシーケンサー |
| 18 蛋白細胞相互作用解析システム | 37 デジタル画像電子顕微鏡システム |
| 19 白血球機能解析システム | |

12 刊 行 物

1) Tropical Medicine

当研究所が発行した機関誌で、熱帯医学の原著論文のほかに短報や総説などが掲載される。

本誌は長崎大学風土病紀要として昭和34年に創刊されたものであるが、昭和42年に研究所名が改められたときに Tropical Medicine (熱帯医学) と変更され、さらに平成元年からは英文のみの雑誌となった。毎年4号分を1巻として平成12年度には第42巻が発行されたが、平成13年度から休刊中である。

2) 長崎大学熱帯医学研究所年次要覧

昭和39年3月、当研究所の沿革および研究活動をまとめた最初の「長崎大学風土病研究所年次要覧、昭和38年度」が刊行された。その後、昭和42年の研究所名改称に伴う標記表題への変更はあったが、昭和45年度まで毎年刊行された。昭和46年度から54年度までの分はまとめて昭和56年3月に発行された。昭和55年度から再び毎年発行されることになり現在に至っている。平成16年度年次要覧は平成17年12月に発行された。

3) 長崎大学熱帯医学研究所 Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University

国内及び外国からの来訪者に対する当研究所の紹介パンフレットとして、長崎大学熱帯医学研究所案内 (A Guide to the Institute of Tropical Medicine, Nagasaki University) が昭和55年12月に最初に発行された。その後一部改訂されたものが随時発行されてきた。平成元年10月には、当研究所が共同利用研究所に改組されたのを機会に、標記のように表題を改めカラー印刷として発行され、その後は毎年発行されることになった。平成6年度に研究所の機構が大部門制に改組されたのを機に、このパンフレットはB5判からA4判に改められ、また和文版と英語版を別々に作成することになった。平成18年度版は、平成18年9月に発行された。

4) 長崎大学熱帯医学研究所共同研究報告集

この報告集は、当研究所が平成元年に全国共同利用研究所に改組されたのに伴い、毎年実施される共同研究と研究集会の概要をまとめたものである。平成17年度の報告集は、平成18年8月に発行された。

長崎大学熱帯医学研究所年次要覧
平成17年度（2005）

平成18年12月発行

編集者：長崎大学熱帯医学研究所
附属熱帯感染症研究センター

発行者：長崎大学熱帯医学研究所
〒852 8523 長崎市坂本1丁目12-4
☎(095)849 7800（総合案内）

印刷所：株式会社 昭和堂
〒850 0875 長崎市栄町6-23 昭和堂ビル
☎(095)821 1234